

ガールフレンド（仮）君と過ごす学園生活

QUEEN

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖櫻学園に入学した九条礼二と初日に知り合った戸村美知留たちと過ごす学園物語。ガールフレンド（仮）プレイしてて何となく書いてみた小説です。戸村推しの戸村推しのため？の小説です。

荒らしは受け付けません。感想、意見等ありましたらよろしくお願ひします。

## 目 次

### 高校一年編

入学式	1
部活とバイトと新たな出会い	5
居眠りとゲームと衣装製作	9
遠足一週間前	14
ゲームとコスと遠足と	17
スタジオと昼飯と宿題と	22
前売りと衣装と打ち上げと	25
テスト勉強とヘルプミー	29
お疲れ様と試験の結果	32
優しさゆえの過ち	36
プールとナンパとリベンジと	40
礼二のコミケデビュー	44
後輩たちの頼み事そして友との再会	47
合宿!	51
夏の終わりと新学期	57
恋愛相談のプロ現る?!	62
運命の学園祭	65
迷子の子供とその姉と	70
試験結果とクリスマスパーティー	74
福引と新年時々両親	79
温泉勉強新学期	84
バレンタインは戦場にも?	87
取り返しのつかない間違いをする前に	92

## 高校二年編

新しいクラスと新入生

遠足の道中は昼寝に限る

告白する勇気と告白される優輝

修学旅行と新たな縁

自分の人生のために行動せよ

キャンプ合宿のカレーは好きじゃない

受験生になる前の最後の夏休みの過ごし方

合宿!!

文化祭は何の日?

バンドコンテスト 東京予選

ハロウインパーティーの思わぬ来客

この学校での思い出は?

師走のサンタたちは超多忙

再会は思わぬ時にやつてくる

それぞれの将来のビジョン

有終の美を飾るためにには

春の訪れに待つもの

## 高校三年編

桜の花を目にしたら振り向け

休む時には思いつきり休め

# 高校一年編

## 入学式

ここは聖櫻学園。今日から俺はここで三年間過ごすんだな。勉強に励むのは当たり前だけど部活や恋愛もしたいなー。そう思いながら入学式に親とは別で一人で学園に向かっていた。静かな一日だ。すると後ろから、

「どいて、どいてー。」

ん？ 後ろから誰かが叫んでいる。振り返った時には…遅かった。  
「痛たた。誰だよ。」

「あの…ごめんなさい。急いでいたもので。」

「俺の方こそゴメン。」

「ん？ 君もその制服つてことは同じ学校の人？」

そう言つて制服を見た。ブレザーガと同じだつたことから同じ学校の人だと分かつた。

「そう…みたいだな。俺は九条礼二。今日から聖櫻学園の一年だ。」「私は戸村美知留私も一年。よろしくね。」

「ああ、よろしく。」

「で、戸村は何で急いでたんだ？」

「ああ、私は入学式にこのままだと遅刻しちゃうから。」

「…戸村、時計を確認してみる。」

そう言うと戸村は言うとおりに時計を見た。

「あ！ 七時四十五分！ なんだー一時間も早いじやん。昨日夜遅くまでお裁縫していたから寝坊しちゃつたかと思つたー。それなら一緒に行こうよ。一人だと寂しいから。」

「ああ、いいぞ。所でさつき裁縫していたって言つてたけど何作つてたんだ？」

「ふつふつふよくぞ聞いてくれました！ それはズバリ！」

「それは、ズバリ？」

「コスチュームです！ こう見えてもコスプレイヤー界隈ではトムト

ムミツチーとして有名なんだよ。」

「へー。つてことは部活は手芸部希望か？」

「ううん。帰宅部でアルバイト掛け持ちしようと思つていてる。所で九条君はコスプレには興味ある?」

「興味は…あるな。中学時代ライブで衣装着たりしてたから。こう見えてもライブハウスで演奏したこともある。」

「おおつ。じゃあこれからイベントにもしよかつたら一緒に出でくれない?」

「ああ、いいぞ。俺の予定と被らなければ。」

そう話しているうちにに学校に着いた。

「クラスはクラスは」

一年C組 九条礼二

・

・

戸村美知留

「一緒か。改めてよろしくな。戸村」

「よろしく。九条君」

式場内

「あれ? 恭介?」

「おお! 礼一お前も同じクラス、そして同じ学校、こりや楽しみだ。

そつちの子は?」

「こいつは真島恭介。俺と同じ中学でバンドやつてた仲間だ。パートはドラムで俺はギターだ。恭介、こつちが道中知り合つた戸村」

「戸村美知留です。よろしくね!」

「ああ、よろしく。」

意外なやつがいたことには驚きだつたな。

入学式は滞りなく行われた。

「C組の皆さんは私についてきてください。」

随分ちつこい先生だな。大丈夫なのかこの人。

「自己紹介が遅れましたー。私一年C組担当の橘響子です。私も一年目だから至らないところがあるけどよろしくねー。じゃあ窓側から自己紹介をお願いします。」

「五十嵐大輔です。趣味は歌うことです。希望は軽音部です。よろしくお願ひします。」

「九条礼二です。九条、礼二、レイ。どれかで呼んでください。趣味はギター演奏とゲームです。軽音部希望です。よろしくお願ひします。」

「戸村美知留です。趣味はお裁縫とコスプレです。コスプレに興味がある子は私にまでー。よろしくお願ひします。」

「真島恭介だ。さつきの九条とは同じ中学でバンドやつてた。趣味はドラムとゲーム。よろしく。」

自己紹介が終わつた。

### キーンコーンカーンコーン

「自己紹介だけで終わつちやつたね。次の時間はフリートークの時間にします。皆色んな人と仲良くなつてねー。」

「おお、礼二ー。お主はどういうゲームをやるんじゃー？」

「ええと、姫島だつたか。お前もゲーム好きとか言つてたな。俺は歴史シミュレーションとかRPGとか狩りゲーだな。そこの恭介とモンハンはよくやつてた。」

「何と！ 東雲ーここに同志二人おつたぞ！」

「やるとしても俺がいつやるかはわからんけどな。」「右に同じく。」

恭介が言つた。

「やるとき連絡したいから連絡先教えてくれー。」「了解。」

この後何人かと話してフリートークは終わつた。部活見学は今日からやつているらしい。行つてみるか。

そして放課後

「じゃあ私は弓道部見学に行くから」

「じゃあな、るい。俺はそのまま帰るから。」

「あれ？ 天霧？ あれは上条か？」

「九条に真島か。 そうだよ。 まさかお前らと同じとはな。 るいにも伝えとく。」

彼は天霧ルイ。 上条るいの幼馴染。 ルイルイコンビと呼んでた。  
「俺はB組だから暇なとき遊びに行くわ。 ちなみにるいもB組だ。」

「ふーん。 機会があつたら二人できな。」

「ああ、 そうさせてもらう。」

そう言つて俺は恭介と軽音部部室に向かつた。

## 部活とバイトと新たな出会い

俺と恭介は廊下を歩いていた。すると同じクラスの櫻井がいた。  
「櫻井は放送委員会に入るのか？」

「あ、九条君と真島君。そうだよ。つてことは二人も入るの？」

「いや、俺たちは軽音部だ。じゃあな。」

「そつかお互い頑張ろうね。じゃあまた明日。」

俺と恭介は軽音部部室前に来た。するとクラスメイトの五十嵐と女子生徒が三人いた。

「あれ？ 五十嵐？ お前も来たのか。いやークラスでの自己紹介聞いて目光させて正解だつたぜ。」

「つてことは九条と真島もか。よろしくな。」

「盛り上がっているところ悪いんだけど私らもいるんだけどー。」

「えつと同じ一年ですか？ 俺は一年C組の九条礼一。パートはギターだ。」

「同じクラスの真島恭介。パートはドラム。」

「同じく同じクラスの五十嵐大輔。パートはボーカル。」

「ドラムつてことは同じだがや。アタシは蓬田董だがや。クラスは一年A組だがや。」

「私は黒川凪子。パートはベースで一年B組だ。」

「私は一年A組の風町陽歌。パートはボーカルだけど他の楽器も可能だよー。」

「「「「「よろしく。」」」」

こうして俺たちは知り合つた。

「お！ 君たち軽音部希望かい？ 俺は小牧真人。パートはベース。二年A組だ。」

「西沢靖。パートはギター。二年A組小牧とは幼馴染。」

「よろしくお願ひします。小牧先輩。西沢先輩。」

「今鍵開けるから待つてて。」

その後俺たちは部室で自己紹介をした。

「へー、九条と真島と五十嵐はV系が好きなのか。だから髪長いんだな納得納得。」

「先輩たちもですか？」

「ああ。」

「じゃあ一緒にやろうと思えばやれますね。」

「俺たちも去年一緒にやつてた先輩たちが抜けてどうしようかと思つてたからマジ助かる。」

「よー。新入生たちと随分盛り上がつてるなー。あ、新入生の皆には初めまして部長の浅野だ。パートはギター。三年D組だ。基本音楽は雑食。」

俺たちは再び自己紹介をした。

「とりあえず部活について説明するよ。活動は基本自由に。練習したい日は一週間前に申請。試験二週間前からは活動禁止。ライブは年に6回。場所はライブハウスでやつてている。出演料は毎回5千円。後は聖櫻学園の生徒も結構来るからそこの前回の収入と合わせて払つてている。8月には学校公認の任意の合宿もある。最終日にはライブもあるから実質7回だな。後これ入部届。顧問から多めにもらつておいた。いつでも待つてるよー。」

と浅野部長は言つた。

「ちなみにうちの部はバイトしているのも多いからしてみるのもいいかもね。お小遣いも増えて機材も買えるし社会経験も増えるし」

「俺たちは駅前の焼肉屋でバイトしてる。髪型自由と時給高めだから。シフトは週二から三だな。バンド組んでる奴はみんな一緒のシフトにしていることが多いな。練習時間も一緒にして。」

「なるほど。俺たちも焼肉屋にするか。」

「名案だな。賄いとかあるんですか？」

「ああ二百円で食べられるぞ。」

「それはいい。」

「それは行くしかないのう。」

こうして焼肉屋には俺、真島、五十嵐、蓬田が決まつた。黒川は居酒屋、風町はカラオケにするらしい。

「それじゃ、これから紹介するよ。俺たちで推薦しとくから安心してくれ。」

こうして今日は解散となつた。

翌日面接してさらに三日後採用が決まつた。俺、真島、五十嵐、小牧先輩、西沢先輩は月、水、土曜日のシフトにして蓬田は火、木、金曜日にした。時間はみんな十八時から二十二時まで土曜は十四時から二十二時まで。火、木、金は部活して家帰つて個人練、日曜は自由日にした。基本的に月、水、土の放課後は図書室で勉強にした。黒川と風町は蓬田とバイトする日は同じにしたとのことだつた。

そしてバイト初日小牧先輩と西沢先輩と一緒にバイト先の焼肉屋に向かつた。

「挨拶はおはようございます。最初は自己紹介からな。まあシフト皆大体同じだから他の人と会うのは珍しいけどな。入る時は正面口からだ駅前ビルの中だから裏口はないから」

「おはようございまーす。店長ー。新人の後輩連れてきましたよー。」

すらつとした男の人が出てきた。

「よく來たね。店長の大島だよ。よろしくね。後輩つてことは君たちも軽音部かい？」

「あ、はい。よろしくお願ひします。」

「こう見えて俺聖櫻の軽音部O Bなんだよ。パートはギターとドラムができた。」

「おお！これはすごい。」

「さあ、そろそろ開店だから着替えて準備してくれるかな？」

「はい！」

俺たちは着替えてバイトに励んだ。

「いらっしゃいませー。お客様は何名様ですか？」

「四人です。つてレイ！？どうしてここに？」

「え？ここでバイトしてるからだけど？まさか戸村に、見吉、櫻井、

それにもう一人の子は？」

「知ちゃん自己紹介。」

「A組の押井知です。よろしくねレイ君。」

「よろしくな。押井。俺の事は櫻井とか戸村に聞いてくれ。、櫻井、戸村頼んだよ。恭介と五十嵐もいるから二人の事も紹介しといて」

「うん！よろしくね！」

押井は言った。

「了解。」

櫻井が言つた。

それにしても同じ学校の生徒も来るのか。リーズナブルな価格だから無理もないか。

それから三時間経過して大島さんが、

「おつともう時間か後は大学組が来るからお疲れ様。ゆっくり休むんだよ。バイトのし過ぎで成績には影響起こさないようにな。夕飯は何か食べていくかい？」

「はい！是非！」

こうして五人で賄いを食べて

「お先に失礼します。お疲れさまでした。」  
と言つて帰宅した。

## 居眠りとゲームと衣装製作

バイトの翌日

火曜日だった。

「うあー疲れたー。」

「確かに疲れたな。まあすぐ慣れるだろ。でもドラムって体力勝負のイメージがあつたんだけどな。それとこれとは別かもな。ある意味。」

「そ、うなんだよなー。」

俺は言つた。

「いきなりバイト始めるとかスゲーよ。」

ルイが言つた。

「礼一君も恭介君も急ぎ過ぎじゃない? ルイ君みたいに何もしないよりはましだけど。」

「うるせーなー。俺には俺のペースがあるんだよ。」

ルイが言つた。

「俺たちだつて楽器の機材とか買うのに金が必要なんだよ。かつこいいギターとか欲しいし。」

「スタジオ練習代とか掛かるし。」

「軽音部もある意味大変ね。」

すると後ろから、

「おつはよー! レイ!」

駅を通り過ぎると後ろからぎゅつと誰かが抱きついてきた。背中には二つの柔らかい感触が当たつていた。

「このテンションから察するに戸村か。朝からテンション高いなー。」

「聞いてよ。聞いてよ。新しいコスができただもん。」

「寝たのは?」

「二時。」

「授業中寝ても知らんぞ。斜め前だから起こそうと思えば起せるけど。」

「お願いします。」

実はこつちのクラスは初日に席替えをしていたのだ。

「高校生なんだからそういうことも管理しろよ。」

「礼二君が言えたことじやないでしょ。」

「レイ。そつちの女の子は？」

「紹介がまだだつたわね。私はB組の上条るい。よろしくね。」

「私は戸村美知留。よろしくね。」

そして戸村も混ざつて登校した。

授業も本格的に始まつてきた。周りを見てみると姫島は一番後ろで教科書立てて何かしてゐる。恐らくゲームだろう。東雲は休んでる。戸村は案の定居眠り、見吉も居眠り。現在英語の月白先生。見た目が少し怖いイメージを持つた先生だ。俺は睡魔と格闘しながらなんとか持ちこたえた。声のトーンからして寝たら殺されるそう思えたのが救いだつた。そろそろ見吉が指されるな。起こすか。俺はシャーペンで背中をつづいた。クッダメか。少し強くつついてみた。すると

「…うーん。ダーリン? 何?」

見吉はそう言つて起きた。そして

「見吉さん。次を読んでください。」

「そろそろ指されると思つて起こした6ページのJapanese cultureの所から。」

「ありがとう。優しいね。ダーリンは。」

そう言つて見吉は難を逃れた。戸村は相変わらずであつた。そんなこんなで二限は終わつた。それ以降は三限姫島が居眠り注意されるくらいだつた。後ろの方も目を付けられるんだな。教師悔れない。四限終了後櫻井が教室を出ていった。俺は

「櫻井は教室で飯食べないのか?」  
と聞いた。

「食べないというよりは食べられないが正解かな。お昼の放送があるから。」

「そつか。がんばれよ。」

「うん。ありがとう。」

「礼二ーー飯食おうぜ。姫島からモンハン誘われてて。」

「さつさとしろー礼二ー。堂々とゲームできる希少な時間なんだぞー。そのために充電温存していたんだからなー。」

「ボクは姫島に無理やり呼び出されただけだけだ。終わつたら帰るけどな。バレないようにするの面倒なんだよ。」

「東雲も来たのか。まあいいや。サクッとやりますか。」

そんなこんなで昼休みは過ぎていった。

五限、六限、七限と授業は過ぎて放課後となつた。五限の現代社会はマジで睡魔がヤバかつた。

「ういー礼二ー、恭介ー放課後もモンハンすつぞー。」

「悪いが姫島、俺と恭介は部活だ。」

「だからバツクバツクを一人とも装備しているのか。」

「バツクバツク言うな。俺のはギターで恭介のはドラムのステイツクだ。」

「そうだったのか。仕方ないのー。東雲の家で東雲と二人でやるかー。」

そういうつて俺たちは部室へ向かおうとしたとき、「よー礼二ーと恭介。今日一緒に帰らないか?」

とルイがやつてきた。

「悪いなルイ。俺たち部活だから。」

「そつか。なら俺は図書室で勉強してる。んで適当な時間に帰るわ。」

そう言つてルイとは別れた。

「九条、真島部活行こうぜ?」

「もう名前で呼んでいいぞ。一緒に練習する仲なんだからな。」

「そういうことだ。行くぞ大輔。」

「ああ!」

「三人とも来たか。じゃあ練習始めますか?」

「その前に入部届もらわなきやだろ? それにコピー歴とか聞かねー

とな。」

「こちら入部届です。俺と恭介は中二からはオリジナルやつててたまにコピ―していきました。」

「参考に音源持つてきました。」

「コピ―歴は the GazetteとかViViDからLUNA SEA、X JAPANとかやつてました。」

「V系の有名どころは結構やつてるのな。難しいものもやつてるみたいってことは即戦力だな。」

「いやいや恐れ多い。」

「音源も結構いい感じだな。作詞作曲は九条か?」

「あ、はい。」

「五十嵐はどんな経験があるんだ?」

「中学時代はDIVとかユナイト、ラルクのコピ―をしていました。」

「結構高いキー出せるんだなこれは心強い。」

その後五月のライブのセトリを相談した。今回はナイトメアのコピーになつた。

「初陣はかつこよく決めたいだろ?」

「はい。確実に成功させましょう。風町達には負けていられませんから」

その後俺達と先輩で部室にあつたOBの先輩たちが置いていつたナイトメアのバンドスコアで練習した。本番は四曲になつた。

「セトリもメンバーも決まつたお祝いに夕飯食いに行こうぜー。俺達でおごつてやるよ。」

「すいませんね。」

そう言つて駅前のファミレスに行つた。

「いらっしゃいませーお客様は何名様でしょうか?つてレイ!?:どうしてここに?」

「戸村!お前ここでバイトしているのかー。」

「どう?その、制服似合つてる?」

「ああ、似合つてるぞ。」

「ありがとっ！」

「とりあえず席に案内してくれないか？」

「あつごめんごめん。案内するね。こちらへどうぞ！」

そういわれて席に案内された。店は忙しい時間の前だつたからか空いていた。

「さつきのはクラスメイトか？学校内で見たことはあるが

「はい。コスプレ趣味なクラスメイトの戸村です。コスプレ制作していることから衣装とかも依頼できるかと。」

「衣装か。俺らの代に時谷小瑠璃つていう手芸部のやつがいて俺達は彼女に依頼している。体型がちょっと残念だけどな。」

「誰が残念な体型だつて？」

「げつ時谷!？」

「そんなこと言つてると次回から依頼受け付けないぞ？それにまだこれから成長するから今に見ていろ。」

「悪かつた。悪かつた。冗談だ。」

「今回はそういうことにしといてやる。新一年の三人。初めまして私が時谷小瑠璃だ。手芸部部長とデザイナーをしている。」

「つてことはレザーの加工とかも。」

「ああ。しているぞ。」

「是非お願ひします。」

「ここで会つたのも何かの縁だ。今日は私たち先輩三人でおこつてやろう。第一印象が大事だしそれに長い付き合いになるかもしれないしな。」

「しかしさつきのコスプレイヤーいづれライバルになるかもしれないな。私も負けていられない。」

そう言つて六人で夕食を食べて帰宅した。これが時谷先輩とのファーストコンタクトだった。

## 遠足一週間前

ゴールデンウイークの一週間前遠足も、ゴールデンウイークの直前に行われるのだ。遠足前のHRで

「皆——来週は待ちに待つた遠足です。そのため皆には班を作つてもらいまーす。基本的に人数は自由でーす。決まつたら私の所までお願いしまーす。」

と橘先生は言つた。

「あ、後道中の暇つぶしは基本的に自由で遠足で行く場所はお台場でーす。」

と続けた。

「礼一、俺らと一緒の班にしようぜ。」

恭介と大輔が言つた。

「あ、私もー。レイ、いいよね？」

と戸村も言つた。

「ん？ああいいぞ。男だけってのも虚しいしな。」

「礼一——あたしと東雲も入れろー。道中ゲームをしようではないか。」

「戸村さん、姫島さん、東雲さんが一緒の班：か。なら私も一緒にいないとな。委員長として。そして問題児の監視として。」

と八束が cameた。

「俺と恭介と大輔も問題児だと?!不名誉な！」

「九条君と真島君と五十嵐君は問題児じゃないわ。そこの女子三人よ。」

「何でーすと?!」

「戸村さんまずあなたは授業中の相次ぐ居眠り、姫島さんは相次ぐ内職としてのゲーム、東雲さんは相次ぐサボリ。これを上げておいて問題児と言わずに何ていえばいいの?」

「危険因子!」

戸村が言つた。

「さらに危険度上げてどうするんだよ：。」

恭介が言つた。

「はあ、俺達の遠足があ‥」

大輔が言つた。

「仕方ねーだろ。戸村たちと組んでやれるの俺たちくらいなんだから。」

「ごめん、レイ。」

「少しは生活態度を改めてくれりやいいんだけどな。」

「それは無理ですサー。」

「とりあえず申請するか。」

そして俺たちの班は了承されHRは終了した。

さて、帰りますか。今日はバイトの日だつたな。水曜日だからな。三人でバイト先の焼肉屋に向かうことにした。

「あつ小牧先輩ー、西沢先輩ー、先輩たちの遠足の場所はどこつすか？」

「俺らは横浜中華街とみなとみらいとランドマークタワーだ。」

「イイっすね！」

「いいもんかよ。横浜中華街だけふらつければいいつての。」

「あはは‥。」

「お前らのお台場の方がまだマシだつての。去年行つたけど。」

と道中話して過ごした。

「おはようございまーす。」

「おつ來たか。そろそろそつちは遠足だつたつけ? 小牧と西沢たちは中華街か? 土産期待してるぞー。」

と大島さんは言つた。

「‥勘弁してください。」

西沢先輩はそう返した。

今日は月末が近いことで少し忙しかつた。そして酒の注文がかつた。金曜じやねーのに飲み過ぎだろ。今日のバイトであつたことはそれくらいだつた。

翌日

「よーつす。ルイルイコンビ。」

先にルイとるいが一緒だつたから呼んだ。

「なんだ礼一か。」

「そういえばそつちは誰と組んだんだ？」

「私はルイ君と二人だけ。」

「ハハツ相変わらずいつも一緒に。」

「う、うるさいわねー。そつちは誰と組んだのよ？」

「恭介と大輔と。あつ大輔つてのはクラスメイトの五十嵐同じ部に入つてる。それと問題児たち。」

「それつて戸村さん、姫島さん、東雲さん、見吉さん？」

「あつ見吉は別の所。そしてそのせいで監視役として委員長の八束

が。」

「問題児ゆーなー！」

バコツ

「ゴフツ」

振り返ると戸村がいた。さつきの衝撃はカバンか。そしてさらに後ろから

「悪いー寝坊した。」

と恭介が来た。

「何で寝坊したんだよ珍しい。」

「ゲームの装備強化してて。姫島達に迷惑はかけられないからな。礼一の方はどうだ？」

「俺も少し強化しといた。」

といつも通りの登校風景となつた。

来週の遠足が複雑な心境であることに変わりはなかつた。楽しみだけど問題児と一緒にうーん。

## ゲームとコスと遠足と

遠足当日バス内

「礼二！閃光玉頼む！」

「あいよ。」

「東雲尻尾は任せた。」

「わかつたよ。」

「俺がスタンさせる。だから頭は任せろ。」

俺たちがやっていたのはモンハン2GのG級竜王の系譜。ソロでも行けるけど仲間とやるのもなかなか面白いものだな。ちなみに武器は俺と東雲は太刀、姫島は大剣恭介がハンマーという感じだ。

数分後

「いよっし！完了！」

「もう一本何か行くか？」

「盛り上がりがついているところ悪いけどもうすぐレインボーブリッジ。つまり到着するってこと。」

後ろからの委員長の宣告でモンハンは終わりを告げた。

「まあ菓子でも食つて到着を待とうぜ？」

そう言つて俺はタケノコの林を出した。

「礼二！さては貴様タケノコ厨か？それともあたしへの嫌がらせか？！宣戦布告か？！」

「は？」

「礼二。こいつの言つてることは無視していいぞ。姫島はキノコ厨だからタケノコが許せないだけだ。」

東雲がフオローした。

「キノコ厨言うな！キノコ愛好家と呼べー！」

「はーそういうことか。まあいいや。恭介、戸村、食うか？」

「なら遠慮なくもらおう。」

「ほつほーう。ではありがたく。」

「あ、委員長も食う？」

「私は遠慮しておくわ。」

「そつか。」

おやつを少し食べていたらお台場に到着した。

「皆さんいますかー？八束さん確認お願いします。」

「確認完了しました。全員います。」

「それでは皆さんここからは自由行動となりまーす。班の人と仲良く行動してくださいねー。」

「ここの辺にはジョイポリスって大きなゲームコーナーがあるみたいだよ。後はダイバーシティ東京がある。後はフジテレビだな。昨日ボクが調べておいた」

「うおーまずはジョイポリスじゃー。一日そこで過ごしてやるー。」

「勘弁してくれ。」

「俺と大輔は構わねーけどな。」

恭介と大輔はそれでいいらしい。

「ボクもいいけど。」

「しめじちゃん。私も一日はバスの方向で。」

「委員長。俺と戸村は途中から別のところ行くわー。どこかで合流つてことで。戸村の監視は任せてくれ。」

「監視つて何よ監視つて?!」

「わかつたわ。九条君お願ひね。」

「はいよ。」

というわけでジョイポリスにやつてきた。すると押井がいた。

「あれ？ 押井？」

「あ！ レイ君！ レイ君たちもここに来たんだ。私の班もここに來たんだー。ここは樂園だよー。ボタン押し放題だし。」

「そ、そつか。あと俺のレイつてのはあだ名で本当の名前は礼二。」「そ、そだつたんだ。てつきりレイが名前かと思つちやつてた。ごめんね礼二君。」

「怒つてないからいいけど。改めてよろしくな。」

「うん！ よろしく！」

「礼二ーまだかー？」

「ああ、悪い悪い。じゃあな押井。」

そう言つて俺は押井と別れた。

その後俺たちはいくつかのゲームをした。

「つてわけで委員長。俺と戸村は別行動つてことで全員の集合時間が十五時だから十四時四十分にダイバーシティ東京前で合流つてことで。」

「わかつたわ。」

そう言つて俺と戸村は委員長たちと別れた。

「それでレイ。どこ行こつか？」

「ガンダムフロントはどうだ？ 制服貸し出しコーナーあるから戸村も楽しめるんじゃねーか？」

「おおつ。これは行くつきやないですねー。さあ行きましよう！ つとその前にえいっ！」

そう言つて戸村は俺に腕を組んできた。

「せつかく一人なんだからこうしないとー。いいよね？ ね？ ね？」

「何言つても聞きそうにないな。いいけど。」

「鈍感。上条さんの気持ちがわかる。（ボソツ）」

「何か言つた？」

「何でもありませんよ。」

そう言つてガンダムフロントに二人で入場した。当日券余つててよかつたー。

その後中のいろんなところを見て回り撮影コーナーに到着した。

「じゃーん！ どう？ 似合つてる？」

そう言つて戸村は地球連合軍の制服の上着を着て見せた。

「ああ。似合つてる。俺も着てみるかな。」

そう言つて俺はΖΑＦＴの白服を着た。

「赤服もあればよかつたんだけどな。」

「けど似合つてるよ。レイ。」

「そつか。ありがとな。」

「そうだ！ 今度一緒にコスプレする時これいいかも！ レイ！ どう

？」

「いいねー。俺は賛成だ。」

「冬コミはこれで行こー！ってわけでコスの完成は期待してね！」  
そしてその後俺たちは登場キャラを背景に写真撮影した。戸村はキラと。俺はレイと撮影した。個人的にレイ・ザ・バレルが気に入つていたからだ。

その後お土産を買ってガンダムフロンティア後にした。

その頃の恭介たちは

「姫島一。俺達はもう無理だー。」

「うーむ。あたしもそろそろ飽きてきたのー。礼二たちに合流するかのー。」

「じゃあ俺が連絡する。」

「行くのはフジテレビでどうだ？」

「私は賛成。」

「ボクもかな。」

「じゃあ礼二に伝えてくる。」

そう言つて俺は礼二に電話をかけた。

「礼二ー今そつちはどこだー？」

「今フジテレビに向かつてる。」

「同じだな。なら入り口で合流するか。」

「ああ。じゃあな。」

「向こうも行先は同じだ。行くぞ。」

「おー恭介ー。随分疲れた顔してるな。」

「当たり前だ。あの後ずっとゲームしてたからな。」

「ははっ。そいつはごくろーさん。んじやあ行きますか？」

そしてフジテレビを時間まで見学してバスに戻つた。

「礼二ー。恭介ー。帰りもモンハンすつぞー。つてありや？」

「z z z。」

「z z z。」

「仕方ない。東雲ー。つて東雲もかー！誰も一緒にやつてくれないのかー！」

四十分くらいして俺は起きた。すると橘先生が、  
「隣の人気が寝ている場合は起こしてください。SHRします。」

「恭介。起きろ。SHRだ。」

「んあ？何だよ礼一。」

「SHRだ。」

そしてSHRが始まった。

「最後にGW中の宿題をちゃんとやってGW後に会いましょう。」

そういってSHRは終了して俺達の遠足は終わりを告げた。

## スタジオと昼飯と宿題と

GW最終日の昼間に俺と恭介と大輔は小牧先輩と西沢先輩とスタジオで練習した。もちろん今月中旬試験期間二週間前になる直前のライブだ。その練習終了後に先輩たちは、

「九条、お前らはGWの宿題終わってるのか？」

と聞いてきた。

「そりやもちろん終わつてますよー。」

「右に同じく。」

「俺は少し残つてます。家帰つて三時間くらいあれば終わります。」五十嵐はまだ残つてるらしい。恭介と俺は面倒事を真先にかたづけるタイプだからすぐに終わらせていた。

「そつか。ならよかつた。」

「部活もいいけど学生のメインは学業だからな。」

「その辺は大丈夫ですよー。」

「まあ今日は解散にするか。皆お疲れさん。」

「おつー。」

「お疲れ様です。」

「礼二。この後暇か？もしよければ飯にしようぜ？」

「ああ。そうするか。」

「じゃあみんなで飯にするか給料も入つたことだしな。」

俺たちの給料は5万五千位だった。結構入つていたので驚いた。

その後俺たちはファーストフード店で昼食をとつた。

「じゃあ今度こそ解散だな。」

「お疲れさまでした。」

「礼二。この後暇か？もしよければ一緒に帰らないか？」

「悪い。この後ギターの弦買うのと機材見ておこうと思つて。」

「そつか。わかつた。五十嵐は？」

「俺は宿題だ。」

「そうだつたな。んじやあ俺は姫島達とゲームしてるか。」

「姫島は全く宿題してなさうだけどな。」

「それもそうだな。じゃあな。」

その後俺は駅前の楽器やでギターの弦を買って少し機材を見て帰路についた。するとスマホが鳴った。誰からだ? 戸村?

「もしもし。九条だけど?」

「レイ! 助けてよー。宿題終わらないよー。とりあえず私の家に来てー。住所は だからさー。」

「はあ。わかつた。今から行くわ。」

十分ほど歩いて戸村の家に着いた。

「さて言い訳を聞こうか。」

「コス製作とバイトしてて終わらなくてー。」

「帰つていいか?」

「ごめんなさい。宿題終わったら私の胸触つていいからー。」

「女の子がそんなことを言うんじゃありません。」

ペチッ

「ぶつた! ブツダがぶつたー。」

「つまらんダジャレだ。」

「じゃあ体で払うからー。」

「だから女の子がそんなことを言うんじゃありません。というよりお前はビツチか?!」

ペチッ

「ぶつた! 一度もぶつた! お父さんにもぶたれた事もないのに。」

「知るか。つたくしようがねえ。かつたりいけど手貸してやる。」

「すみません。」

「じゃあ早速やるぞ。」

十分後

「お前全く授業聞いてないのな。呆れるわ。学生の本分忘れている  
としか言いようがねえな。」

「うう。返す言葉もない。でもコス製作のためにアルバイトしない  
とだからしがたないじやん。私の青春はこれなんだから」

「青春も何も学業あつてのものだろ? 後々親からバイト禁止令出て  
も知らねーぞ。」

「それだけはご勘弁をー。」

三十分後

「（）でペルシアを滅ぼしたってことででてくるのがアレクサンドロス大王。」

「なるほど。」

「それによつてオリエントはヘレニズム時代に入つたつてわけだ。」「なるほど。」

さらに一時間後

「Xの二乗—2X+3を平方完成するとX—1の二乗+2つてことになるのは理解できたか？」「うん」

さらに三時間後

「終わつたー。」

「あー疲れた。つてもう六時かそろそろ帰らねーとだな。」「ねえレイ、ちょっとそこで目を閉じて立つてて。」「？」

戸村の気配がどんどん近づいてくる。そして拘束されたのと同時に体に柔らかい感触が当たつていた。俺は目を開けた。すると戸村は俺に抱きついていた。そして耳元で

「ありがとう。レイ。」

と言つた。俺もそのまま抱きしめ返した。戸村の柔らかい肌、香りがすべて愛おしく思えた。少ししてから俺は手を離した。

「じゃあまた明日学校で。」

「うん！今日はありがとう！」

そう言つて俺は戸村と別れた。

翌日姫島だけが宿題が終わらず怒られていた。

## 前売りと衣装と打ち上げと

ＧＷが終了して姫島が怒っていた日の昼休みに放送が流れた。  
「お昼の放送の時間です。本日はゲストが来てします。軽音部の浅野部長です。」

部長? 何だろ?

「軽音部部長の浅野です。全校生徒の皆さんにお伝えします。試験二週間前の前日の日曜に俺たち軽音部がライブをします。今年入部したルーキーたちも出演するのでよろしければ見に来てください。前売り限定ですが生徒割引も実施しています。購入希望者は今日から一週間の間に軽音部部室入口までチケットを買いに来たと申し出て下さい。値段は前売り1000円、当日1500円。どつちもドリンク代として500円別に掛かります。」

「以上軽音部の浅野部長からでした。この日は皆さんもライブで盛り上がりましょー!」

「つてことだ。戸村、東雲、姫島も来てくれよな。」

「もちろん行きますよー。アニソンあるかもしれないし。レイやる曲教えて?」

「当日のお楽しみだ。」

「ボクはいくよー。黒川から誘われてるし。」

「嫌じゃー。あたしはゲームするんじゃー。」

「なら今後手を貸さん。」

「姑息な! わかつた! わかつたから今後も手を貸してくれー。」

その日の放課後たくさんの生徒が前売り券を買いに来た。店番は交代制だった。

「先輩・・・いつもこんな感じですか?」  
「ああ。」

この日のバイトで、

「大島さん。この日ライブやるんで空いてたら見に来てください。」

「おー! 行く行く! 九条たちで組んでいるのか?」「はい。」

「ならこの日は休暇を取る。」

「ありがとうございます。」

ライブ三日前の放課後手芸部部室にて

「時谷。例の物はできているのか？」

「当たり前だ。どんだけ待っていたと思つてゐるんだー！」

「すみません。先週チケット売るのに忙しくて。時谷先輩にはお礼

としてこちらはタダでどうぞ。」

「例の物だ。お代は一人8000円だ。」

「はいよ。」

「ではこちらで。」

「ライブ期待してゐるぞ。つとその前に向こうで試着してきてくれないか？サイズあつているか心配でな。」

「わかりました。」

「サイズは問題なさそうです。」

そして制服に着替えて

「ではライブ楽しみにしててください。」

「ああ。」

ライブ当日の午前中

「搬入は済んだか？」

「はい。つてことはリハーサル開始ですか？」

「そうしたいところだけど、最初は風町達からだ。風町達含めほかのバンドが7バンド、俺たちはトリだから最後だな。」

「トリですか。今まで何度かライブはしましたがトリは初めてなんで緊張しますなー。」

三時間後

「リハーサル始めるぞ。九条。」

「はい。」

リハーサルは問題なく終わつた。

「受付の方は確か風町と蓬田が担当だつたな。けどそろそろ交代時間だ。行くぞ恭介。」

「おうよ！』

「風町一。蓬田一交代の時間だ。」

「ありがとー。」

しばらくして、

「やつほーレイ。来たよー。」

「おお戸村。来ててくれたかー。今日は楽しんでつてくれよ。」

「もちろんですよー。」

またしばらくして、

「ダーリン来ちゃつた。チケットは・・・放送寝てて聞いてなかつたから当日券でお願い。」

「2000円な。」

「はい。」

俺は2000円受け取り、チケットを渡した。

「今日は楽しんでつてくれよ。」

「うん。今日は仕事もないからゆつくりしていく。」

「礼二。お前の客が多いのな・・・。いつぺん死んでこい。」

「嫉妬はよせ。このライブでファン出来んじやねーか?」

「それもそうだな。」

「さて開演時間だな。俺達も行くか。」

「客席行かねーとな。」

ライブは何事もなく進んでいき俺たちの番になつた。

「衣装の方も準備いいか?」

「はい。」

今回の衣装は長いカーディガンに黒のズボンだった。目元も全員  
アイシヤドウを塗つていた。

「大輔。MCの準備はいいか?」

「もちろんだ。」

「じゃあ行きますか!」

「ついに今回のライブも泣いても笑つても俺達最後のバンドになりました。最後でも行けつかー?」

「オー!」

「行けつかー!!」

「「オー!!」

「行くぜーお前ら!!」

こうして俺たちの初陣は始まつた。三曲やつて俺たちの出番とライブは終了した。

「時間は8時だな。今日はこのまま帰りで明日は小牧達の店で打ち上げだな。もう予約しといた。小牧が。」

この日はこれでお開きになつた。

翌日

登校時

「お疲れー。礼二。恭介。」

「お疲れ様。礼二君。恭介君。」

「ああどうだつた? ライブ。」

「楽しかつた! 次回も行くからな。」

そういつてルイルイコンビと恭介とで登校した。

昼休み

「ねーレイ。レイたちのやつてた曲つてデスノートとコロッケの曲だつた?」

「ああ。 そ�だけど。」

「やつぱり! わかる曲でよかつたー。」

「ボクもいいライブだつたと思つたよー。」

放課後 バイト先

「まずは昨日はお疲れ様。今回のライブの成功を祝つて乾杯!」

「乾杯ー!」

そして打ち上げを行つた。今日から試験2週間前だということは今日ぐらい忘れてても罰は当たらないだろう。

## テスト勉強とヘルプミー

打ち上げの日の学園内

ついに試験二週間前になつた。橘先生も朝に「皆さん今日から試験二週間前です。昨日ライブで楽しかつたかもしませんけど切り替えていきましょう。テストで赤点四つ以上取つたら次回の試験まで放課後一時間残つてもらいますからねー。赤点一個でも一回補修がありまーす。あつ忘れていたけど九条君、真島君、五十嵐君昨日はお疲れ様。」

と言つていた。試験か。

「恭介ー今回も前みたいに勝負するか?」

「望むところだ。今回は勝たせてもらうからな。」

恭介とは中学時代から毎回定期テストで勝負をしていた。結果は六勝六敗。実力はほぼ互角だつた。

バイトは試験二週間前なので休ませてもらつていて。打ち上げの時に大島さんに言つておいた。大島さんは、「はいよー。大学生組に頑張つてもらうから九条たちも勉強に専念しなー。」

と快諾してくれた。

放課後

「レイー助けてよー。居残りになつたらアルバイト全部やめろつてお母さんに言われちゃつたのー。」

「あつダーリン。私もお仕事の都合で授業中居眠りが多かつたから私にも教えて。」

「戸村と見吉か。はあ、めんどいけどわかつたよ。」

「ありがとうダーリン。」

「まさに神様仏様礼二様つて感じですねー見吉さん。」

「そうだね。」

両手に花つて感じだな。

恭介も姫島に聞いていた。

「姫島ー。お前は大丈夫なのか? 四六時中ゲームやつてるイメージ

があるんだが?」

「心配するではない。もともと無理ゲーだから。」

「ほう。朝橋先生が言つていたことを忘れたのか? 赤点四つで一時間の居残り。そうするとゲームの時間も無くなるんじやないのか?」「うおーそうじやつたー。恭介! 頼む! 助けてくれー!」

「しようがねえなあ。」

「お互い大変だな。恭介。」

「そうだな。」

「さてどこで勉強するか。」

「図書室がいいんじやないかな?」

「そうだな。 そうするか。」

俺と戸村と見吉は図書室に向かつた。

「まずは二人は教材は何を持つてるんだ?」

「私は学校のもの以外何も持つてません! サー。」

「私は一問一答集で仕事の合間にやつているよ。」

「見吉はそこそこやつてるのな。」

「まあ試験の問題なんて大体問題集からの抜粋だからそれやれば問題ないだろう。やつててわからないことは聞いてくれ。俺は英語でもやつてるから。」

「わかつた。頼りにしてるね。ダーリン。」

「それじやあさつそくこの給ふつて尊敬? 謙譲?」

「古典か。はひふは尊敬ふるふれは謙譲給へはどつちになるかはケースバイケースだ。」

「ありがとー。」

「ダーリン。N a c l って何の事?」

「塩化ナトリウムだな。簡単に言えば食塩だ。」

「ありがとー。」

「おつともうそろそろ閉館時間か。それじや今日はここまでだな。」

「助かつたよーレイ!」

「ありがとね。ダーリン。」

「帰り道

「あつ世界史と古文单語は隙間時間にやると効率良いぞ。」

「ありがとう。」

「ありがとね。」

「おつと俺の家こっちだから。じゃあな。」

「じゃあね。おやすみレイ。」

「バイバイダーリン。私の夢を見てくれると嬉しいな。」

そして俺は打ち上げに行つた。

結局試験二週間は戸村と見吉の面倒を見ながらの勉強だった。自

分の復習にもなつたし女の子と勉強できたからプラスだつた。

## お疲れ様と試験の結果

「はい。試験終了でーす。書くのをやめて後ろから前へテスト用紙をお願いします。」

終わった。三日にわたる激闘が。国語、数学、英語、O.C、化学、世界史、政治経済、どれも大丈夫だろう。クラストップは多分恭介と競うことになるだろうな。

「恭介ー。そつちの出来はどうだ？」

「俺は結構いけた。今回は勝てる気しかしねえな。」

「そうか。残念だが俺も同じだ。」

「話しているところ悪いんですけど、レイと恭ちゃんは中学時代どちらくらいできたの？」

「中学時代校内のトップ争いしてた。」

「レイも恭ちゃんも凄いね。ところでこの後見吉さんとお疲れ様会でカラオケ行くんだけど二人とも都合はいいですか？」

「そうだな。部活の日じやねーから大丈夫だな。でもバイトあるから十七時までだな。」

「わかりましたー。それじゃあ見吉さんに伝えておきますねー。」

「レイと恭ちゃん確保しました。」

「ありがとう。戸村さん。」

放課後、午前中で解放された俺達は昼飯食べた後にシダックス新桔梗ヶ丘駅前店に向かつた。

「いらっしゃいませー。あれー礼二君に恭介君どうしたの？」

「風町？お前ここでバイトしていたのかよ。」

「そうだよー。今誰もいないからよかつたらこれ使つて。」

渡されたのは20%オフのチケットだつた。

「利用時間は何時間でしようか？」

「今は十三時か。なら四時間でお願いします。」

「わかりました。ドリンクバーはお付けしますか？」

「あつ、ではお願ひします。」

「それではごゆつくりどうぞー。」

「はいそこに住んでますよひだまりです。」

「戸村結構うまいのな。」

「軽音部に入らないか？」

「遠慮します。コスプレの方が私には合うので。」

「ダーリン。次ダーリンの番。」

「もう迷わない。ほら目の前に広がった僕らの生きる世界〜」

「おつ。これってマギのやつですね。」

「そうだな。」

四時間のカラオケが終わって俺たちはバイトへ向かった。恭介と俺はV系で聞きやすいものを選んでうたつた。結構聞きにくいものも聞いていたことに驚いた。

「おはようございまーす。」

「二人とも試験お疲れさまー。五十嵐はもう来ているよー。」

「よー大輔。お前は試験どうだつた。」

「今はその話題はやめてくれ。一応言つておくが赤点は避けたぞ。俺はいつたん家帰つて昼寝してたがお前らは何してたんだ？」

「俺と礼二は戸村と見吉に誘われてカラオケ行つてた。偶然風町のバイト先だつたけどな。」

「いーなー。俺も行きたかった。」

「男女各二人だから気まずくなかった。お前が入つたら男女比おかしくなるだろ。」

「仕方ないよなー。」

「おはようございまーす。」

「二人とも試験お疲れ様ー。ほかの三人はもう着いてるよー。」

「よーお前ら。試験お疲れ様。」

「お疲れ様です。」

久々のバイトは思つていたよりも充実していた。忙しかつたけど

先輩たちが力バーしてくれた。

二十時半になつて店長が、

「今日はもう忙しくなることはないだろうからもう上がつていいよー。試験で疲れているだろうから今日は短めにしておいたから。」「しかし…。」

「九条。ここは大島さんの好意に甘えておけ。試験でお前も疲れているだろ？後は大学生組がやつてくれるはずだ。」

「小牧先輩…。わかりました。」

「わかれればいい。さて皆で賄い食つて帰ろうぜ。」

「おう。」

「「はい。」」

久々に食べた賄いは美味かつた。家帰つてギター少し弾いてそのあとすぐに俺は寝た。

翌日の授業にて

「嘘！私がこんな点数とれるなんて！ありがとうレイー。」

「戸村。点数は77か。よく頑張つたな。」

「それでレイは？」

「ほい。98。」

「恭介お前は何点だ？」

「100。」

「なつ。」

「この教科は俺の勝ちだな。」

「一週間後に張り出される成績まで結果は分からぬぜ。」

一週間後

4位真島恭介

5位九条礼二

41位見吉奈央

57位戸村美知留

73位姫島木乃子

「くそっ。今回は俺の負けか。」

「またの挑戦待つてるぜー。」

「クラス成績は教室で渡されるのか。結果はわかっているが。」

クラス順位は恭介がトップで俺が2位だった。

## 優しさゆえの過ち

試験が終わつてまた普通の日常が戻つてきた。そんなことを思いながら登校していた。

「おはよう。恭介。礼二。」

「よつ。つてルイか。」

「私もいるわよ!?」

「冗談だるい。」

「私もいますよ。」

「戸村もか。この時間とは珍しいな。」

「それが今日すぐに目が覚めてしまつて。もつと寝ていたいのに。「良いことじやねーか。そういえば今日は降水確率が少し高かつたな。」

「しまつたー。傘家に忘れてしましたか。」

「今から取りに行つたら遅刻確定だな。」

「諦めるしかないか。てるてる坊主用の紙学校着いたらやるから元氣出せ戸村。」

「そんなの必要じやないですよー。」

昼休みになつて雲が出始めた。

「礼一。こりや多分降るな。今日は部活もバイトもなしだつたよな？」

「確かにそうだつたな。俺は今日はさつさと帰らせてもらうわ。」「俺は今日は図書室で勉強してからだな。夏休み明けの期末試験も勝たせてもらうぜ。」

「礼二ー。恭介ー。今日もモンハンするぞー。持つてきてるか?」「はいよ。」

「わかつた。わかつた。」

放課後土砂降りの雷雨だつた。

「いやー助かつた。傘持つてきて正解だつたぜ。」

タタタタタタ

走つてくるやつもいるな。

「レイ一。入れてー。」

「戸村か。ハアわかつたよ。」

よく見ると戸村はずぶぬれだった。

「つ。いつたん俺の家まで急ぐぞ。お前が風邪ひいちまう。」

正直日のやり場にも困った。制服は夏服だつたから少し透けていた。

「エツチ。」

「んなこと言つてる場合か馬鹿！」

「冗談ですよー。へつくし。」

「言わんこつちやない。行くぞ。」

「風呂場と洗濯機はこつちだ。とりあえず風呂場で熱いシャワー浴びて体を温めろ。代わりの服とタオルはその間に用意しておく。乾燥器にかけておくからそこに入れておけ。」

「わかりました。」

俺は急いで部屋に戻り中学時代のジャージを用意した。

「確かに置いておいたからな。」

「ありがとうございます。」

乾燥機の時間を見てみると後2時間半程だった。  
少ししてから戸村が出てきた。

「体温計用意した。一応計つておけ。」

戸村は素直にうなずいた。

「微熱っぽい。」

「仕方ない。俺のベッドで横になれ。」

「エツチ。」

「仕方ないだろ。まあそんなふざけたこと言つてられるなら明日は平氣だろう。」

「眠れない。お話ししようよレイ。」

「レイつてさー。私以外の子にも優しいよね。」

「そうやつてほかの女の子に優しくしているのを見ていると私の心

の中がもやもやするんですよ。」

「へー。 と、いうと？」

「とぼけないで！ 私が色々アピールしているのにレイは何も反応してくれないじゃないですか！ それどころか冷たくあしらうことだつてあるじゃないですか！ どうして！ 私はこんなにもレイの事が好きなのに！」

「つ！」

「答えてよレイ！ いや、 九条礼一！」

「わからない。」

「どうして！ どうしてその答えなの！ 好きか嫌いかはつきり言つてよ！」

「だからそれがわからないって言つているんだろ！ 一人の女の子として好きなのか。 それとも一人の友として好きなのか。 そんな中途半端な思いで答える真似なんて俺にはできないんだよ！」

「レイ・・・。ごめんつらく当たつて。」

「ただこれだけは言つておく。 9月の文化祭の朝。 その日に結論を出す。」

「わかつた。 私はどんな結果でも受け入れるから。」

チュツ。 戸村が唇を重ねてきた。

「ファーストキスだから大切にしてくださいね。 文化祭までに好感度マックスにしてやりますから。」

「ああ。」

そう言つて俺も唇を重ねた。

「今はそのために体を休ませろ。 乾燥したら起こす。」

「ふふっ。 ありがと。」

「起きろ。 制服乾いたぞ。」

「ん。 今何時ですか？」

「午後八時だ。 雨はもう止んでる。」

「そうですか。 なら帰らないとですね。 着替えてから。」

「今日はお邪魔しましたー。 また明日ねレイ。」

そう言つて俺は戸村を見送つた。

## プールとナンパとリベンジ

夏休み前の前期期末試験を終えて早くに終わった俺は何するか悩んでいた。すると後ろから、

「レイープール行こー？」

と戸村が誘ってきた。俺としては何するか悩んでいたので丁度良かった。だから俺は、

「ああ。構わん。」

そういえば恭介がいないな。まあいつか。

プールの男女の更衣室の前で俺は

「着替え終わつたらプールの外で待つてる。」

と言つて戸村と別れた。

着替え終わつて待つていると

「あれ？ 礼一？」

「えつ恭介？ それに風町も？」

「恭介君に誘われたのー。」

「お前も誰かときたのか？」

「ああ、戸村に誘われて。」

「お待たせー。レイ。」

「まあ俺は行くぜ。じゃあな礼一。」

「あれは恭ちゃんですか？ 女の子も一緒だつた気がしますが？」

「ああ軽音部の風町と来てたみたい。」

「恭ちゃんも隅にはおけませんなー。」

そして俺たちはプールに入つて遊んでいた。

「あれ？ 九条？」

「えつ？ 小牧先輩に西沢先輩じゃないつか！ どうしたんですか

？」

「ああ、俺らは同学年の球技三人組に誘われて。」

「真人君ー。靖君ー。どこ行つたのー？」

「あつ九重ー。こつちだー。」

「どこかで見たことがある気がするけど二人の後輩?」

「あつはい。1年C組の九条礼二です。小牧先輩と西沢先輩とは同じ部活で世話になつてます。」

「あたしは玉井麗巳。ゴルフ部に所属してるよー。」

「私は九重忍。ビリヤード同好会に所属しているわ。」

「そして私が浅見景。バレー部に所属しているの。あつバレー部つて言つてもバレーボールの方ね。」

「先輩方スポーツ系なんですね。」

「つてわけによろしくね。礼二君。」

「さつきレイつて呼ばれていたから。レイつて呼ばせてもらうよ。」

「レイ達もアタシらと遊ばない?」

「ちよつと麗巳。人の恋路を邪魔すると馬に蹴られるわよ?」

「そつか。じやあアタシらは失礼するよー。」

やつぱりここつて学園の人もいるのか。悔れん。にしてもスタイルのいい先輩だつたなー。

「ねーレイー。ウォータースライダー行こう?」

「おついいねー。行くか。」

そして俺たちはウォータースライダーを滑つて降りた時、浅見先輩たちがナンパされているのを目撃した。小牧先輩たちが対応していふみたいだけど2対4か。恭介も近くにいる。ここは恭介も呼んで助太刀だな。

「恭介!」

「礼二!」

「言いたいことはわかるよな?」

「ああ。行くぞ。」

「姉ちゃん。そんな奴らとじやなくて俺たちと大人の遊びしようぜー?」

「悪いけどする気はないわ。」

「人の楽しんでるところを邪魔するのは感心しないなー。」

「ナンパなら他所を当たりな。」

「んだとテメー！」

そう言つて不良が二人掛かりで殴り掛けた時に俺たちは背後から飛び膝蹴りを入れた。

「グハツ。テメー痛えーじゃねーか。」

「しかも背後からとか卑怯だろ。」

「2対4で挑むお前らには言われたくねー。」

「右に同じく。」

「小牧先輩、西沢先輩。」

「助太刀します。」

「お前らに警告するよ。危険な目を見たくなかったら今すぐに去りな。」

「そんな脅し聞かねーよ。」

相手は真正面から殴りかかつてきた。目標は俺か。俺は相手の腕をつかんで背負い投げをしてプールに放り込んだ。

「ほらな。言わんこつちやない。」

「監視員さーん。こっちですー。」

「君たちか。ここ最近ナンパして迷惑かけている客つてのは。」

「ゲッやべー。」

「逃げるぞ。」

「そろはいかないんですよお客さん。」

そういつて不良4人組は監視員さんに包囲されてその後出入り禁止になつた模様だ。後から聞いた話だとこのプールのブラックリストだつたらしい。

「レイー。危ない真似しないでくださいよー。」

「ありがとう。真人君。靖君。礼二君。えつと君は?」

「恭介です。真島恭介。礼二のクラスメイトで軽音部所属です。」

「そう。ありがとね。恭介君。」

「助かつたぜ。風町。」

恭介は風町の頭を撫でていた。

「えへへー。」

風町は満足そうな顔をしていた。

「先輩。恭介。後2時間でバイトの時間です。そろそろ上がつて準備しないとヤバくないですか？」

「そうだな。そろそろ上がるか。」

「じゃあアタシらも上がるかー。」

「あつ。来週ライブがあるのでよかつたら来てくださいねー。」

「お礼に行くわよ。」

そう言つて浅見先輩たちと別れた。

焼肉屋にて

「おはようございまーす。」

「おお。九条に真島。お手柄だつたな。小牧と西沢から話は聞いたぞ。」

「相手が弱くて運がよかつたつすよ。」

その日のバイトも普通に終わつた。

1週間後

ライブも終わり終業式の日に試験結果が張り出された

3位九条礼二

5位真島恭介

「リベンジ成功！」

「そのようだな。」

そして俺たちは高校初の夏休みに入った。宿題は夏休み前に発表のものが多かつたから事前にコミケで一緒にコスプレすることになつた戸村と7割は終わらせておいた。俺もその分バイトに回せるしな。恭介はもう終わらせたとのことだつた。

## 礼二のコミケデビュー

「レイーお待たせー。」

「さてそれじゃあ行きますか。コミケの勝手はよくわからんが。時はさかのぼり二週間前

家で作曲していたら電話がかかってきた。誰からだよ。戸村か。「もしもし? レイ? これから私の家に来てもらえる?」

「何だ? 藪から棒に。」

「前に言つていたコミケですよー。コス作成のために採寸したいから来て欲しいつてわけですよー。どういうコスをするかも見せたいですから。」

「悪い。三時間後なら問題ない。今作曲中で。」

「わかりました。なら午後の二時半に私の家に来てくださいね。」

「はいよ。」

「待つていましたよレイ。それじゃあさつそく採寸に…。」

「待て。何のコスプレさせるんだ?」

「seed destinyのレイですよー。遠足の時言つてたじやないです。」

「戸村は誰やるんだ?」

「ルナマリアです。レイは手伝つてくれるわけですからレイに合わせたいと思いまして。」「かつこいい系だからまあいいか。」「つてことで採寸しますね。」

十分後

「ああくすぐつたかつた。」

「レイがもう少し大人しくしていれば後三分ほど早く終わつたんですね。」

「今日はこれで終了か?」

「はい。このまま帰つてもらうのも何か失礼ですし、お礼と言つては変ですがお茶していつてくださいよ。」

「そうさせてもらう。」

「あつ思い出した。宿題でわからないところあつたので教えてください。」

「ああいいぞ。」

「時間後

「じゃあそろそろ帰るわ。」

「はい。当日楽しみにしていてくださいね。こつちで万全な準備をしますので。」

時はまた戻りコミケ当日

新桔梗ヶ丘駅前で戸村と合流した俺は東京ビックサイトまで一緒に行つた。

「それじやあ私は受け付けで申請してきますね。」

「ああ。待つている。」

「それじやあこれ持つて更衣室で着替えてきてここに集合で。」

「わかつた。」

コミケが始まつてからは撮影の嵐だつた。大半の人は俺ではなく戸村を撮つていた。戸村つて本当にコスプレ界では有名だつたんだな。それにしても汗がやべー。大半の客が

「トムトムミッキー今回のコスもやつぱりパねえっす。」

というオタクばかりだつた。俺との関係も聞かれていたけどどうまく流していた。

「はい。レイ。飲み物。」

「ああ。ありがとう。」

「午後も頑張つてくださいね。」

午後も炎天下の中長袖長ズボンという地獄を味わつた。

そしてコミケが終わつて帰りの電車で俺達は殆ど寝ていた。新桔梗ヶ丘駅前のファミレスに打ち上げに向かつた。

「あれ? 恭介? それに風町?」

「おー礼二ー。お前らもデートか?」

「いや。コミケの手伝い。」

「ほう。写真見せろ。」

「はい。恭ちゃん。それに風町さんも。」「なかなか似合つてるじゃん。」

「ホントだねー。」

「どうかな？俺は普通だと思うが。」

「いえいえ。レイは素材がいいから映えますよ。」「そつか。」

こうして俺のコミケデビューは終わりを告げた。

## 後輩たちの頼み事そして友との再会

夏休みも半ばになつた頃俺はシールドをさらにいいものにしよう  
ということから、恭介はステイックに新しいものが入つていなか  
と  
いうことから駅前の商店街に来ていた。

「ここはいつも来てもワクワクするよな！恭介。」  
「確かにそれは言えるな。入荷したものの広告が来るといつも  
来る。」

「あや？九条先輩に真島先輩ですか？」

「おお！久しぶりだな朝比奈。元気してたか？そういえば今年は朝  
比奈は受験生だつたな。どこ受けるか決めているのか？」

「はい！先輩たちと同じ聖櫻学園です。この前のライブで歌つてい  
た女の先輩がすごかつたので一緒にやってみたいと思いまして。」

「そうか。」

「あの先輩。受験関係なんですけどユズちゃんと私の勉強を少し見  
てもらつてもいいですか？」

「ああ。いいぞ。」

「わーい！先輩たちと久しぶりに勉強です。場所はユズちゃんの  
家で約束しているので一緒に行きましょう！」

「やあ！九条君に真島君久しぶりだねー！少し見ない間に少し大き  
くなつたんじやないかな？つとそんなことより桃子ちゃんから聞い  
たけどウチの柚子と桃子ちゃんの勉強を見てくれるんだつてね。な  
ら俺の方からもお礼をしないとな。そうだ！二人は昼食はまだかい  
？」

「あ。商店街で済ませようとしていたら朝比奈に勉強見てくれつて  
言われてまだでした。」

「よかつたらうちで食べていいかい？お世話になるから俺の奢  
りだ！」

「ではお言葉に甘えて。」

「久しぶりだよな礼二。葉月のおじさんの所で食べるの。」  
「そうだつたな。」

俺達は葉月庵で昼食を済ませた。

「先輩！お久しぶりです！お食事の方は終わつた感じでしようか？」

「葉月か。ああ丁度終わつたところだ。」

「では早速お願ひします。」

「二人そろつて聖櫻な感じ？」

「はい！モモもあたしも一緒にいいつてことから。」

「そつか。それは聖櫻の過去問だな？準備いいな。」

「さつきモモが買つてきたんですよ。」

「それじや始めますか。」

それから三時間ほど二人の勉強を見ていた。二人とも出来はだいぶ良かつたので驚いた。

「では先輩今日はありがとうございました。」

「二人は明日は空いているか？」

「空いていますよ？一体どうしたんですか？」

「あー明日学校案内してやろうと思って。一旦担任に交渉してからだけどな。」

「ぜひ行つてみたいですね。先輩たちの軽音部も見てみたいですし。」

「あたしは学校の雰囲気を見てみたいです。」

「恭介明日つて誰が練習しているつけ？」

「確か風町達の練習日だつたな。」

「そうか。朝比奈明日ちようど前の女の先輩が練習日みたいだよかつたな。」

「はい！いい返事お待ちしています。」

「礼二交渉お前に任せてもいいか？」

「ああ。任せろ。」

その日の夜に橘先生に交渉した結果二つ返事で了承してくれた。そしてそれを朝比奈に伝えた。

翌日

「それじやあ行きますか。」

全員制服で学校に行つた。

「九条君、 真島君その子たちが後輩の子？」

「はい。」

「初めまして。私が九条君と真島君の担任の橘響子です。今日は私が案内します。九条君と真島君も一緒についてきてね。」

そして俺たちは橘先生と一緒に案内した。そして一通り案内した

後に

「朝比奈が軽音部を見たいと言つていたので連れて行つてもいいですか？」

「あたしは他の部活を見てみたいです。」

葉月がそう言つた。

「それじやあ九条君達は朝比奈さんを私が葉月さんを案内するね。」

「それでは先輩また後程。」

「一時間後校門前で合流しましょう。」

そう言つて先生達と別れた。

軽音部部室に到着すると

「あれ？ 恭介君に礼二君？ どうしたの今日は私たちの日だけど。」

「見学したいつて俺の後輩が言つていたから連れてきた。」

「初めまして。九条先輩と真島先輩の後輩の朝比奈桃子です。」

「私は風町陽歌。こっちがナギー。こっちが董。」

「それじや私たちの名前がわからないでしょ？ 私が黒川凪子。こつちが蓬田董。」

「陽歌がボーカルでナギーがベース、そして私がドラムだがや！」

「俺たちの事は気にせず練習していくくれ。」

25分後

「少し桃子ちゃんと三人で話してみたいから恭介君達には申し訳ないけど一旦外してもらえるかな？ 女の子だけで話してみたいこともあります。お願ひ。」

「私からも頼む。」

「わかつた。20分位したらまた戻る。」

「ごめんね。後で何かお礼するから。」

「おや九条君に真島君じゃないですか。二人の事を知っている感じの転校生が九月から来ますよ。ちょうど今職員室にいますので会つてきいたらどうでしようか？」

「ありがとうございます。藤堂先生。」

「お、お前は！」

「久しぶりじゃねえか悠！」

「久しぶりだな礼一、恭介。」

そこにいたのは中学時代に隣町に転校した神崎悠だつた。中学時代に組んでいたバンドのボーカルだ。悠が転校してからは別のボーカルだつた。正直言つて今まで組んだ奴では悠が一番上手かつた。時間が近づいていたので少し話をして悠と別れた。話によると悠も向こうで別のバンドを組んでいたらしい。しかしほかのメンバーが作曲できなかつたのでコピーバカリだつたとのことだつた。動員数も俺達と組んでいた時の方が多かつたとのことだつた。向こうでも俺たちの名が知れ渡つていたのは初耳だつた。

「戻つたぞ。十分話せたか？」

「十分じゃないよ。十二分だよ。」

「置いてあつたキーボード引いてもらつたけど上手で驚いたよ。」

「そうか。朝比奈そろそろ時間だから行くか。」

「お待たせ九条君。真島君。」

「それじゃあ帰りましようか。」

「橘先生今日はありがとうございました。」

「三人の入学待つてあるよ。」

橘先生と別れて俺達はバイトに向かつた。その日のバイトは忙しく無くて早上がりとなつた。そして翌日は泥のように寝ていた。

## 合宿！

夏休みも終わりに近づいてきたころ浅野部長から部員全員集合のメールが来た。内容は部室で話すことだつた。そして次の日恭介と一緒に部室に入つた。

「時間だな。さて部員諸君に伝える。二年以上のメンバーは分かっていると思うが、今年も学園主催の文化部の部活合宿がある。日程は8月19日から8月23日まで。22日の夜から23日の朝までオールナイトライブだ。参加は任意。費用は学園側から出すというのが毎年の流れだ。参加したいメンバーは8月15日までに俺に連絡してくれ。またはこの場で言つてくれ。」

「部長。場所はどこですか？」

「新潟の学校の合宿所だ。」

「ちなみに運動部は長野だ。」

その後俺と恭介と大輔は行くことにした。

「礼一、恭実は俺9月に両親の仕事の都合で海外に引っ越すことになった。お前らと最後の思い出を作りたかつたからこのイベントに参加することにした。」

「そうか。寂しくなるな。」

「最後にでかい花火打ち上げるかの如くお前との最後のステージを盛り上げてやるよ。」

「ありがとな。」

同期の風町、黒川、蓬田、そして先輩の小牧先輩と西沢先輩も行くとのことだった。

「言い忘れていたが朝は聖櫻学園前に集合だ。持ち物は楽器と着替えだ。他は何もつてきても構わん。ただし行くのは山の方だからな。水着は持つてきても意味ないぞ。そして何より楽器の事も考えているから安心しな。」

そして俺と恭介は買い出しに行つた。恭介はドラムのステイックを。俺は予備の弦を買いに来た。

「恭介、虫よけも買っておくか？」

「そうだな。持つといたほうがいいかもな。」

「九条さん×真島さんこれはいいカツプリングです。」

「そこで何をしているんだ。そこの奴。」

「うつひやあおう！く、九条さん!? それに真島さん!?」

「お前は確か戸村のダチの…」

「掛井です！掛井園美です！あのそのこれは悪気はなく前々から気になつていて。」

「俺らにそつちの氣は無い。」

「しつ失礼しましたー！」

「そう言つて全速力で去つて行つた。何だつたんだ？」

「まあ、虫よけスプレーは買つておくか。」

「そう言つて俺たちは薬局に行つた。

「さてそろそろ帰りますか。」

「その前に店長に連絡しとかねーと。」

「そうだな。今日バイトだしその時で。このままバイト行こうぜ。」「時間も近いからまあいつか。」

「おはようございまーす。」

「おお。九条に真島。君たちも部活合宿かい?」

「な、なぜそれを。」

「小牧と西沢に聞いた。懐かしいなあ合宿。あれを機に辞めるやつもいたから。あ、シフトは調整しとくよ。」

「そ、そんなにヤバいんすか?」

「それは君たち次第かな?どう取るかも君たち次第だし。」「まあいい方向に考えようぜ礼二。」

「そうだな。」

そしてその日のバイトは終わつた。

そして部活合宿初日

「おはようございまーす。」

「どもっす。」

「来たか九条に真島。」

「おはよー恭介君。礼二君。」

「おはよーさん礼一。恭介。あー朝は苦手だ。」

風町と黒川が来た。蓬田はリュックサックを枕に寝ていた。軽音部はバス一台あつた。他の部も部によつては一台あつた。俺達は風町達と反対の席に座つた。そして少ししてバスが出発した。バスが出発して3時間後合宿所に着いた。

「あー腰痛え。」

「俺は首が痛え。」

そう言いながらバスを降りた。合宿所で祐天寺先生が開始の式をして解散になつた。部屋は五人部屋で当然男女別々だつた。メンバーは俺、恭介、大輔、小牧先輩と西沢先輩となつた。

「合宿のライブ何やるか。」

「俺は少し前にオリジナル作つたのでそれやつてみたいです。」

「大輔が引っ越すつてのを知つてから作つたんだよな。」

「五十嵐の為の曲つてことか。いいぜ。乗つた。」

「すまねえな。礼一。」

「気にすんなつて。」

初日は音源を共有してスタジオに入つて軽く合わせた。大輔の為の一曲と今まで作つたオリジナル2曲をやることにした。他はいくつかほかのメンバーとコピーをすることにした。

少しホテルを小牧先輩と歩いていると時谷先輩がいた。

「ん？そこにはいるのは礼一に真人じやないか。そうだ勝手に作つてみた衣装があるんだ。来てみてくれないか。ああそうだ他の君のメンバーも呼んでくれ。衣装代はいらないからな？今回は勝手に作つて着てみてくれという押し付けみたいなものだから。」

「時谷、今回はどうな感じだ？」

「和をモチーフにしたものだ。」

「つてことは着物ですか？」

「まあそういうもいう。とりあえず来てみてくれたまえ。きっと君たちも気に入るはずだ。」

「どこに行けばいいですか？女子部屋入るのもまずいでしようし。」

「そうだつたな。合宿所の手芸部の部屋に来てくれ。とは言つても

事前に作っていたものに仕上げをしただけだがな。」「わかりました。」

そして手芸部の部屋に行くと俺たちは驚きの声をあげた。

「これはスゲー。」

「そうですね。」

「夏にふさわしいだろう。驚いたか。私の高尚なセンスに。」

「はい。」

「ああ。」

その後風呂に5人で入り夕飯になつた。夕飯は料理部が作つたとのことだつた。藤堂先生や鍋島先輩の腕に驚きを隠せなかつた。夕飯後また俺たちはスタジオに入つて練習をした。深夜テンションで2時まで練習してしまつた。その後は8時に起きて朝食をとつて昼まで寝ていた。昼食は料理部主催の料理教室だつた。作つたものはカレーで西沢先輩が活躍してた。

「西沢先輩凄いっすね。」

「ああ。俺の家は年の離れた弟と妹がいて両親が旅行の時とか出張の時の料理は俺がすることがあるからな。」

「そうだつたんですね。」

「西沢先輩はいい旦那さんになるがや！」

「ありがとな。蓬田。」

「お前らはもう少し練習しろよ？九条、真島。」

「あはははは…。」

3時には茶道部主催の茶道の勉強があつた。

「これは何流でござろうか？」

「これは表千家ですよ。それと茶道は修行でもあります。前田さんによつては縁の深いものかもせんね。」

「勉強になる。川上殿。」

あれは歴史研究会か。俺達もお茶を楽しみますか。

感想 抹茶つて思つていたより苦い

夕飯も朝と同じく合宿所の元ホテルの料理人によるバイキングだつた。そしてその後雑談をして俺たちは寝た。

次の朝 寝ていると何者かに洗濯ばさみを鼻に挟まれた。そして勢いよく引っ張られた。

「ぎゃあああ！」

「うつせーなー。何だよ礼二つてうわつ。」

恭介が水鉄砲にやられる。

「イエーイ！ 寝起きドッキリ大成功！」

「浅野部長：それに先輩：」

「九条、真島あれが軽音部名物早朝ゲリラだ。」

仕掛け人は浅野部長と軽音部の他の先輩だった。

今日は午前はスタジオに入った。昼食はまた料理部主催の料理教室だった。今回はチャーハンと餃子と中華スープだった。今日は俺と先輩の班は俺と恭介中心に行われた。

「野菜は小さく切ると火が通りやすくなるから小さくすると時間加速につながるわよ。」

鍋島先輩からのアドバイスをもらつて俺たちの料理が完成した。藤堂先生からは、

「努力がまだ必要ですが気持ちが伝わる味です。この調子で精進しなさい。料理は愛情ですから。」

と言われた。

午後は歴史研究会と将棋部を回った。歴史研究会では新潟県の歴史について学び将棋部では飛原先輩と勝負してボロ負けした。

夕飯はバーベキューだった。その後オカルト研究会主催の肝試しをやつた。その日に部長がライブのタイムテーブルを作成して合宿参加している部活全てにライブの連絡をした。

4日目は午前中に恭介、大輔、先輩との2バンドを練習して午後は別の1つのバンドを練習した。夜の8時オードブルが運ばれてきてライブが始まつた。トップバッターは小牧先輩とほかのメンバーのステージ、次は風町、黒川、蓬田の3ピースバンドで、次は午後に合わせた俺のD.I.Vのコピーバンドだつた。23時頃に恭介、大輔、先輩と時谷先輩の作った衣装で己龍をやつた。途中色々な部の人気が入つたり抜けたりしていたが常に満員に近かつた。そんなこんなで

夜は更けていきトリのバンドになつた。トリは部長が大輔に気を使つて大輔と俺達のバンドしてくれたのだった。そして大輔最後のステージが始まり、最後の曲になつた。MCは大輔が始めた。

「この合宿ライブもついに最後の曲になりました。実は俺は9月に海外に引っ越すことになりました。部長、最後にトリにしてくださいありがとうございます。見に来てくれた皆さんもありがとうございます。最後の曲を作ってくれた礼二。ありがとうございます。それでは聞いてください。Thank you my friends。」

そして曲が終わつて、

「皆ありがとうございます！」

と大輔は言つた。浅野部長が最後に見に来た人出演した人にあいさつをしてライブは終了した。

帰りに合宿所で終了の式をして文化部の参加者全員で写真撮影をして、その後バスに乗り聖櫻学園で解散となつた。

## 夏の終わりと新学期

夏休みも終わりに近づいたころ俺はバイトに明け暮れていた。もちろん恭介も一緒だ。バイトの時に大島さんに悠をバイトに入れるも問題ないか恭介と交渉した。その結果OKしてくれた。ちなみにアルバイトの大学組はというと夜勤中心に入つたり旅行行つたりゼミ合宿やサークル合宿行つたりと理由はバラバラだつた。そんな状況で夏休みも日が過ぎていた。残り一週間になつて恭介の家で作曲や勉強をしていた。

「礼二。ここにファイルイン入れてもいいか?」

「どんな感じにだ?」

「少し待つてろ。今からやるから。」

そんな時俺の携帯が鳴った。戸村か。

「もしもし?レイ?来週の夏休みの最後の日はお祭りの日じゃん?  
よかつたら一緒に行こ?」

「ああ、いいぞ。集合場所はどうする?」

「レイの家に17時に迎えに行くから待つてて。」

「はいよ。」

「ほう。礼二は女から誘われたか。」

「お前は?」

「俺は俺から風町を誘つた。」

「なるほど。ルイはるいを誘うだらうな。」

「それは言えてるな。るいが素直に誘わずに仕方ないから一緒に行つてあげる的な感じに。」

「それだ。大いにあり得る。」

「ところで恭介。さつき言つてたファイルインを聞かせてくれ。」

「そうだつたな。少し脱線した。」

夕方に恭介の家を出発して家に帰つた。

夕飯の後に見吉からも電話が来た。

「あ、ダーリンやつほー。ダーリン来週のお祭りの日は空いてる?」

「戸村と行く予定。」

「そっかー。じゃあ戸村さんにも連絡するね。お休みダーリン。」  
あつという間に夏休みも最終日を迎えた。俺はせつかくだから浴衣を着た。年に何回も着るわけではないしなというのが理由。そして戸村へのサプライズもある。帯の結び方はインターネットで調べた。浴衣って相変わらず着るのが難しい。

ピンポーン

「はーい。」

ガチャヤ

「やつほーレイどう似合つてる?」

戸村は浴衣だつた。

「ああ似合つている。」

「ふつうの反応ですね。もつと驚いてくださいよー。」

「下手にがつつくのも違うだろうが。」

「それはそうですけど。せつかく女の子が浴衣だつてのにドキドキしてくれないんですか?」

「いや少しばかりドキドキしている。」

「でしょー。これでドキドキしなかつたら人間じゃないですよー。着てきてよかつた。アルバイトのお金で買つたんですから。レイに見てもらいたくて。」

「そっか。」

そう言つて戸村の頭を俺は撫でた。

「さてそろそろ行きますか。」

「あ、見吉さんも向こうで合流するそうです。私としてはレイと二  
人きりで行きたかったんですが私もレイも見吉さんとも仲がいいで  
すから縁切られたら嫌だつてのもありますし。」

「はいよ。そういうことは言わないでいいからな。」

そして俺たちは夏祭りに来ていた。相変わらずにぎわっていた。

「去年どつかであつていたかもしないな。これだけ人がいると。」

「それはあり得るね。あ、あれ恭ちゃんと風町さんじやないですか

?」

「本當だ。恭介ー。風町ー。」

「おお礼二に戸村。二人して浴衣か。」

「お前らもか。そして悠もいたのか。」

「ああ偶然会つたから。恭介に恭介と一緒に來ていた風町さんを紹介された。」

「ボーカルで一緒だねって話していたんだよー。」

「さて人の恋路を邪魔するのもあれだからそろそろ俺たちは行くわ。」

「俺も少し回つたら帰るわ。久しぶりにこの祭りに来て正解だったな。何人か昔の奴にも会えたし。」

「そつか。じゃあ明日学校で会おうな。」

「ああ。」

「そう言つて俺たちは別れた。」

「レイ。見吉さんが鳥居の前で待つてゐるみたいです。さつきまで仕事だつたみたいで。」

「ダーリン。会いたかつたよ。戸村さんもありがとね。」

「仕事お疲れさん見吉。」

「お疲れ。」

「ありがとう。」

見吉も浴衣だつた。モデルだからこれくらい持つていて当然のことだつた。

その後見吉の労をねぎらうのと戸村が腹減つたと言つたため三人で屋台でいろいろ買つた。二人が俺にあーんばかりしていて二人が対抗していくと肩身が狭かつた。金は俺が出したけど。その後川辺に行つて打ち上げ花火を見て解散した。恭介たちも近くで見ていた。俺たちの夏休みは濃い内容になつた。

そして翌日の登校にて

「よーるい。るいはお祭りでは見かけなかつたんだがどうしたんだ

？」

「それが：」

「ゴホツゴホツ。」

「ルイ君がこの有様でルイ君の両親も旅行行つてたから私が看病し

ていた。」

「ごめん。るい。祭り誘つたの俺なのに風邪ひいちまつて。」

「もう。期待した私がばかみたい。まあルイ君らしいけど。来年は一緒に行つてあげてもいいわよ。」

「素直に一緒に行きたいつて言えよ。」

「うつ、うるさい！うるさい！うるさい！」

「久しぶりー皆ー。」

「悠久しぶりだな。」

「悠君。本当に悠君なの？」

「ああ。今日から転校することになつた。」

「俺と恭介は知つていたけどな。」

そんな登校だつた。戸村は遅刻ギリギリだつた。

全校集会で悠の紹介が終わつてから課題テストの通知が来た。明日一日で現代文 古典 数学 理科系 社会系の試験をやるとのことだつた。そして放課後恭介はクラスメイトの遠山に呼ばれていた。遠山が離れてから俺は恭介に聞いた。

「遠山が来てたけどどうしたんだ？」

「ああ、今日の放課後図書館デートしてくれつて。まあ付き合つていなかつたからOKしたけど。」

「遠山がお前のこと好きだつたとはな。」

「多分勉強のライバルつてのもあると思う。けど参つたな。俺は風町が好きなのに。」

「お互い人気者はつらいな。」

「そうだな。所で話変えるが今度の土曜はあいつの命日だな。」

俺にはかつて恋人がいた。村沢友美。昨年に病死した恋人だ。俺と恭介の軽音部仲間だ。

「もう一年か。悠も誘おうぜ？」

「そうだな。」

そんなことを思い出したら今の戸村や見吉との関係に不安がよぎつた。文化祭まであと一ヶ月近く戸村への返事も決めなければならぬ。そういったことが頭の中で巡り始めた。とりあえずまずは

試験だ。考えるのはそれからにしよう。そんな新学期初日だった。

## 恋愛相談のプロ現る？！

試験も終わり命日の土曜に俺は友美の墓参りに行つた。恭介が一緒じゃないのは恋人の俺だけで行つたほうが天国の友美も喜ぶだろうとのことだつた。お墓の前で友美の両親に会つた。

「おお、礼一君じゃないか。友美の為にすまないね。」

「いえ、俺は俺の意志で来ただけです。それに友美には思い出をたくさんもらつたのでこれくらいはしたいので。」

「そうかい。では私たちは墓参りが済んだから行くよ。恋人と二人きりの時間も必要だろうからね。」

「すみません。」

俺は線香と花を供えて拝んだ。

「友美。俺に好きな人ができた。けれどそれはお前に對して失礼なんじやないかと思うと何もできない。それにお前の事を忘れなくてはならないのかという不安にも襲われる。俺はどうすればいいんだ？」

「終わつたか？」

「ああ。待たせたな。恭介。それじゃあ俺は行くぜ。」

「ああ。また学校でな。」

そして翌週月曜日

授業は聞いているが休み時間になると友美の事が脳裏を常によぎつていた。そして昼休みになつた。

「どうしたの九条君？顔が怖いよ？何かあつたの？」

「白鳥か。ああ少し悩み事があつてな。」

「悩み事？私で良ければ力になるよ？」

「助かる。その悩み事が『恋の悩みね。』そんなんだよつてえ？」

「あ、先輩。」

「白鳥。この人は？」

「あ、九条君は初めてだよね。紹介するよ。合唱部の先輩の有栖川

先輩。他人の恋の話が大好きでいつも探している先輩。」

「初めまして。詩織ちゃんの先輩の有栖川小枝子です。君の名前は

？

「九条礼二です。」

「礼二君。もしよかつたら放課後音楽室に来て。そこで相談に乗るわ。」

「…。」

「九条君。有栖川先輩は何があつても聞きに来るから諦めたほうがいいよ。」

「わかりました。それじゃあ音楽室で。」

「そういえば礼二君は軽音部よね？真人君と靖君にも伝えておくね。君が今日は遅れるつて。」

そして放課後音楽室にやつてきた。

「礼二君来てくれたんだね。それじゃあそこに座つて。」

「はい。」

「まずは状況から聞くね。」

「まず去年の二日前まで俺には恋人がいました。しかしその恋人はその日に病で亡くなりました。そしてこの学校に入学して俺に積極的にアピールしている子がいましてその子の事をだんだん好きになつていきました。しかし好きなつたとしても付き合つたりしたら病で死んでいった彼女の事を忘れていつてしまわないか。ということや彼女に対して失礼じやないのかという思いに駆られるんです。俺はどうすればいいんですか？」

「礼二君。君にはすぐつらい過去があつたんだね。けれど思い続けてもその子は戻つてくるの？」

「それは…。」

「戻つてこないよね？それなら礼二君にできることは一つ。何だとと思う？」

「…わかりません。」

「前を向いて歩いていくことよ。もちろん死別してしまった礼二君の彼女さんのことも胸にとどめてね。そして新たな恋を始めていけばいいと思うの。」

「けど俺なんかにそんなことができる気がしません。」

「大丈夫。礼二君は心が強い子だから。それだけ思いが強い子ならきっとできるわ。きっといた彼女さんのことは忘れないと思う。だから頑張つて一歩ずつ歩いて行つて。」

「くつ。」

「泣きたいなら好きなだけ泣いて。涙は心を浄化してくれるから。男の子だつて泣きたいときは泣いたつていいんだよ。」

「うああああああああああ！」

俺は周りを気にせずに泣いた。

「それだけずつとつらい思いを抱えていたんだね。よく頑張つたね。」

数分後有栖川先輩にお礼を言つて音楽室を後にして軽音部部室に向かつた。有栖川先輩は最後に「頑張つて」と言つてくれた。

「礼二。どうやら過去の呪縛と決別できたみたいだな。」

「ああ。心配かけてすまん。」

「憑き物が取れたつて顔をしているぜ九条。有栖川には感謝しないとだな。」

「いつものメンバーからマイナス1だつたがさつき元に戻つたぜ。入つてきな。」

「礼二。俺も軽音部に入ることにしたぜ。」

「悠。来てくれると思ってたぞ。」

「役者もそろつたことだから練習始めるか？」

「二二はい（おう）！」「」

俺たちは文化祭ライブに向けて練習を開始した。過去の問題と決別した清々しい放課後だった。

## 運命の学園祭

ついに運命の文化祭の日の朝がやつてきた。俺は朝食を食べて歯磨きをして制服に着替えて仕度をした。今日は珍しく一人での登校だつた。部活の集合は10:00だつたが戸村との約束の日でもあつたため勝手に早くに目が覚めてしまつた。教室に入るとクラスメイトの中に見吉がいた。

「ダーリン…戸村さんからの言伝。屋上で待つてるつて。ダーリンは行つちやうの？」

「ああ。」

「嫌だよ。行かないでよ。私だつてダーリンのことが好きだつた！どうして！どうしてなのダーリン！このまま三人で仲良くしていようよ！」

見吉は泣いていた。

「見吉。俺だつて本当はそうしてやりたい。だけどそんなことをしたら二人のうちどつちかをもつと泣かせることになるんだ。そんなの俺は嫌だ。好きな人たちにはいつでも笑顔でいて欲しいから。虫のいい話かもしれないけど俺のことが好きなら一つ頼みがある。」「何？」

「これからも俺の親友でいてくれ。」

「そんなこと言われたら何も言えないじやない。けれどその代わり、最後に名前で呼んで。」

「奈央。俺もお前のことが好きだ。友達としてだが。」

そう言うと見吉は俺に抱きつき頬にキスをした。

「私の思いは変わらない。ダーリンのことが好きだつた事実も消えない。ダーリンの唇は戸村さんの為に空けておくね。」

「すまないな。見吉俺はもう行くから。」

「うん。行つてあげてダーリン。」

「ああ。」

そう言つて俺は屋上に向かつた。教室からは見吉の泣き声が聞こえていた。

俺が屋上に着くと戸村が一人で立っていた。

「待っていたよ。レイ。見吉さんには悪いことをしちやつたかな。」

「いざれこうなることになつていただろうから仕方のないことだ。」

「俺に言いたいことがあるんだろ？」

「うん。私、レイのことが好き。友達としてじゃなくて一人の男子として。これからもいろいろ頼つちゃうかもしれないけど私で良ければ付き合つてください。」

「俺にはバンドがあるからデートとかもあまりできないかもしさない。それに俺には死別した恋人がいるからその恋人との思い出も胸に残さなくつちやならない。それでも良ければ喜んで。」

「レイ…。そつか、レイにも同じ傷があつたんだね。アタシにも同じく昔恋人がいたんだ。事故で二年前に死んじやつたんだけど。宮島翔つて私の中学で出会つた男の子。アタシもその子のことを胸に残して生きていくよ。それでもいいかな?」

「お互い様だ。」

そう言つて俺は戸村の唇にキスをした。戸村は泣いていた。

「嫌だつたか?」

「違いますよ。嬉し泣きですよ。」

「行こつか。戸村。」

「美知留。」

「どうしたんだ?」

「あーーもう!晴れて恋人になつたんですから美知留つて名前で呼んで欲しいんですよ!」

「そつか。悪かつた。じゃあ行こつか。美知留。」

「うん!」

そして教室に戻つて。開店前の準備をした。俺や一部のクラスメイトは出し物への参加を免除されていた。部活に専念してという委員長や橋先生の意向から。

「九条君、真島君。頑張つてね。」

白鳥と櫻井がそう言つてくれた。

「そつちも頑張れよ!」

「うん。」「

「レイ。最前列で見るからね!」

「ありがとな。美知留。」

「そつか。お前らそういう関係になつたんだな。おめでとう礼二。

戸村。」

「サンキュー恭介。時間がないから走るぞ。」

「ああ!」

「よし。みんな集まつたな。今回で俺は部長を引退する。次の後継者は文化祭終了日の翌日、つまり明後日に部室で発表するから全員来ること。そしてその前の俺たちのライブで観客を満足させること。出番以外のメンバーは事前に組んだシフト通りに宣伝してくれ。タイムテーブルの看板は野外ステージの柵の前にな。それ以外は基本自由だ。」

「えーっと俺たちは二日目の15:10分からで宣伝係は初日の13:00から14:30と二日目つまり最終日の11:30から13:00だな。」

「トリから二番目か。俺の初陣には少し荷が重い気がする。」

「悠。最初からそんなんはどうすんだ?客に笑顔で帰つてもらえるように最高のパフォーマンスすることを考えろ。」

「そうか。そうだよな。」

「ライブの良し悪しはボーカルのお前にかかるつているんだからな。頼むぜ。」

「ああ。」

「美知留には伝えるのは忘れていたけど、この時間なら一緒に回れるから一緒に回ろつか。一部は見たいライブとか先輩のライブだから無理だけど。」

「はい!教室で待つてます!」

初日は開始後軽く昼食を恭介と食べ、その後に俺、恭介、悠と他の

部員が当番だったのでバラバラになつて宣伝した。時間終了後丁度風町達のステージだったので見に行つた。その後は美知留と学園祭を一緒に回り初日が終わつた。

翌日最終日の宣伝の時間の間に美知留が来た。

「我慢できなくて来ちやつた。一緒に宣伝しよ？」  
「しようがねーなー。いいぜ。」

「やつたー！」

その後一時間ほど一緒に宣伝をした。そして美知留が、「3年B組のラーメン屋が評判いいから一緒に行こう?」と言つてきた。

「ああ。いいぞ。昼食まだだつたからな。」

そして俺たちは3年B組でラーメンを食べた。

「それじゃあ美知留。俺は準備があるから。」

「ではまたステージで！」

「ああ。」

俺達のステージの時客席はほぼ満席だつたが美知留が最前列にいた。

悠のMCから始まり俺たちのライブがスタートした。今回は恭介と俺で作曲したものを作つた。

俺たちのライブは大盛り上がりだつた。

ト리는部長のステージだつた。これは最初部長は辞退したが部員全員で最後だからと頼んで成り立つたステージだつた。

「凄かつたな。」

「ああ。」

そして文化祭は終了して俺たちのバイト先で打ち上げとなつた。打ち上げの途中恭介と風町がいなかつたので黒川に聞いたが黒川も知らないとのことだつた。先輩や悠と話しているといつの間にか途中で二人が戻つてきていた。21：30分になつたので解散となつた。すると恭介と風町が俺と悠の所に來た。

「礼二、悠、二人には伝えておく。俺と風町付き合うことになつた。」

「そつか。良かつたな。恭介、風町。」

「おめでとう。」

「ありがとな。二人とも。」

「ありがとう。ナギーと董にも伝えないと。」

「そうだな。」

「さて俺らは帰りますか。悠行こうぜ。」

俺と悠は先に帰った。二日間充実していたからか、ぐつすり寝られた。

翌日日野先輩が部長に就任した

## 迷子の子供とその姉と

11月に入つて季節が変わりつつあるのを身に感じながら部室での練習を小牧先輩、西沢先輩、恭介、そして悠とやつて下校となつた。「それじや俺たちは参考書買ってから帰るからお前らとはここでお別れだな。」

と西沢先輩が言つた。

「はい。それではお疲れさまでした。」

「ああ。お疲れさん。」

そして残つた恭介と悠と俺で商店街の中を歩いていると迷子らしい子供一人が泣いていた。

「お姉ちゃんどこー。」

「うわーん。」

「恭介。どうする?」

「子供はあまり得意ではないんだが。」

「俺もだ。でも放つておくのもかわいそうだよな。」

「なら俺が行つてやるよ。」

「助かるぜ悠。」

すると悠がその子供の身長くらいまでしゃがんで、「どうしたんだい君たち。困つているのならお兄ちゃんが聞くよ？」

？

「お姉ちゃんとはぐれちゃつた。」

「そのお姉ちゃんの特徴はどんな感じかい？」

「お兄ちゃんたちと同じ上着を着ていて水色のスカート。髪の色は僕たちと同じピンク」

「お姉ちゃんの名前は？」

「花房優輝。」

「君たちの名前は？」

「僕が花房潤。」

「アタシが花房愛。」

「潤君に愛ちやんだね。それじやそこにいる二人のお兄ちゃんが探

してきてくれるから一緒に待つていようか。」

「うん！」

「つてわけで、礼二、恭介、聖櫻生で花房つて女子を探してきてくれるか？特徴はこの子たちの言つた通り、確か小さい三つ編みが特徴だつた気がする。」

「悠、何でそんなに知つているんだ？」

「ああ、それなら俺のクラスメイトだから。」

「お前D組だつたなそいいえば。」

「つてわけで行つてきてくれ。俺はここでこの子たちの事を見ているから。」

「わかつた。使える人手は少し増やそう。」

「そうだな。俺は陽歌とルイ達に聞いてみる。」

「なら軽音部メンバーと美知留に声をかけてみるわ。」

「了解。」

数分後黒川、風町、美知留、ルイどるいがそろつた。

「黒川、風町、恭介は北側を頼む。ルイどるいは別れて商店街の外を、俺と美知留は南側を見る。」

「了解。」

俺は聞き込みを始めた。朝比奈酒店にまずは行つてみた。

「なんだ兄ちゃん。桃子に会いに来たのか。」

「違いますよ。聞き込みですよ。聞き込み。人を探していまして。」

「なんだ。桃子に用があつたんかと思つたんだが違うのか。それでその子の特徴はどんなだ？」

「特徴は俺たちと同じ制服でピンクの髪に小さい三つ編みの女子生徒つて感じです。」

「あーその生徒ならさつきうちで醤油と飲み物買つて行つたな。」

「どつちへ行きました？」

「確か魚の味付けとかなんとか言つていたから魚屋に行つたんじやねーか？」

「わかりました。ありがとうございます。」

「また寄つてくれよ。」

俺は魚屋に寄つた。魚屋で接客しているおばちゃんに聞いたらちようどタツチの差で東側に行つたと聞き少し速足で探した結果その生徒を見つけた。

「すみませーん。 そこの聖櫻生の方ー。」

「ひつ。」

「あー急に声かけてゴメン。 君が花房さんで合つてる?」

「はい。 花房は私ですけど。」

「君たちの弟を俺の仲間が保護している。 ついてきてもらつていい？」

「本当ですか！ よかつた。 私引っ込み思案だからどうしたらいいのかわからなくつてさつき気づいたら二人ともいなくて困つていたんですね。」

「それならよかつた。 それじやその場所に連れていくからついてきて。」

「うわーん。 お姉ちゃーん。」

「もう泣かないの。 そこにいるお兄ちゃんとお姉ちゃんたちにお礼を言いなさい。」

「ありがとうお兄ちゃん。 お姉ちゃん。」

「まさか花房さんに弟と妹がいたとはねー。 まあお疲れさん礼二。 悠。」

「その…よかつたらこれをお礼として貰つてもらえませんか？ 今月末の商店街の福引券なのですが。 3枚ありますので3人だけになつてしまつてすみません。」

「渡すならレイと恭ちゃんと悠君ですかね？」

「それで私は問題ないよ。」

「私も。」

「私も大丈夫だよ。」

「右に同じく。」

「すまないな皆。それじゃありがたく受け取りますか。」

「いや、俺はいいかな。」

「俺も。」

「ならやつぱり俺もいいかな。それで何か当てて弟たちに何かしてあげな。」

「でも…。」

「気にすんなって。」

「俺たちは俺たちの意志でやつたことだし、お礼目当てでもないしな。」

「それじゃそろそろ帰りますか。」

「そうだな。」

「その…神崎さん。弟たちの面倒見てくれてありがとうございます。」

「た。ちょっとといいでですか？」

「ん? 何?」

「んつ。」

見間違いかと思ったが悠が少し赤くなっていたことから気づいた。花房が悠の口にキスしていたと気づいた。意外と大胆だなと思われた。寒くなり始めた季節に少しの熱を感じた出来事だった。

## 試験結果とクリスマスパーティー

12月に入り後期中間テストも終わって結果発表があつた。

3位 真島恭介

4位 九条礼二

「負けた。」

「しかし不知火ってやつ本当にすごいよな。毎回3位以内つてのは。」

「俺も1回3位以内に入つたけどな。」

「どうしたんだ君たち？さつき私の名前を上げていた気がしたんだが。」

「ひよつとしてお前が不知火か？」

「そうだが君たちは誰だ？」

「ああ悪い。俺はC組の九条礼二。でこつちが真島恭介。」

「ああ！君たちが九条と真島か。毎回トップクラスの成績を修めていることから私もいい刺激を受けている。これからも一緒に切磋琢磨してくれないか？」

「ああ。いいぞ。だが次は勝たせてもらうからな。」

「望むところだ。」

俺たちは教室に入つたら前日に話されていた学校主催のクリスマスパーティーの話が広がつていた。

時はさかのぼつて前日のH R

「12月24日は学園主催のクリスマスパーティーがあります。参加は任意だから気軽な気持ちで参加してね。参加するクラスは何か出し物をしてもいいっていうのが例年の決まりなんだつて。残りの時間は会議にあてるよ。八束さんお願ひね。」

「わかりました。何かやりたいものはある？はい真田君。」

クラスでトップクラスのオタクである真田がとんでもないことを発言した。

「お…俺はセクシー寿司パーティーがやりたいっす。」

「何そのセクシー寿司バーティイーって。」

馬鹿だこいつ。そんな事を言つたら霧生が、「当然却下よ。風紀的にも学生としても狂つてゐるわそんな企画。」クラスの女子からもブーイングが上がつた。そりやそうだ。

「つてわけで他の案を募集します。はい毛利君。」「俺はお好み焼き屋をやりたい。当然広島流で。」

「んだと毛利。お好み焼きは大阪流だろ。」「うはつと木下君！落う着、て！ごつうで

「「どつちでもよくねー。」」

「八束さん提案があるわ。

「いつそのことどつちが多く売れるか競えばいいんじやないかし

5

「ダーリンがそう言うなら私もー。」

「レイが言うならアタシもいいですよ。」

## 「反対意見はある?」

「無いよ

るわ。」

「私が『れからくじ』を作るわ。参加者は挙手して」

「その前に大阪派閥、広島派閥の軸を決めないと。」

「俺らは玄島旅館ぞ。」  
するとノル拳手した。夕六次の吉川 小早川 竹中 黒田が立た

吉川が小早川の肩を持つて言つた。

「それじゃ16人分のくじを作るわ。先生何か景品を用意してくれ

「うーん。それじゃあ負けたチームに古文単語の単語カードを作る  
ませんか？」

課題を新たに追加します。」

随分ぬるいものだな。俺や恭介にとつては。

「くじができたわ。赤が大阪チーム。白が広島チームね。」

結果は俺は大阪チーム、恭介は広島チーム、他の周りのメンバーは見吉、櫻井、木下、竹中、黒田、加賀美 八束、桐山、伊勢崎、広島チームは恭介、美知留 古谷 南田 白鳥 毛利 吉川 小早川 霧生という形になつた。それぞれのカウントは霧生と委員長になつた。うちのクラスがほとんど文化系ということに驚いた。

「それじゃあ大阪組は今週と来週の空いている日を聞くから空いている日に焼き方を教えるから。」

俺が空いていたのは今週の木曜日だつたのでそこで教わることにした。

「木下。俺が空いているのは今週の木曜だからそこで頼む。」

そして木曜に焼き方を教わつた。その帰りに美知留へのクリスマスプレゼントを買つた。

クリスマスパーティー前日に美知留にクリスマスパーティーの後に屋上に来て欲しいと連絡した。

そしてクリスマスパーティー当日

「広島組に負けないように行くぞー！」

「おー！」

「九条。提案がある。運動部の奴中に声かけていつてくれ。」

「はいよ。」

「美味しいお好み焼きはいらんかー。美味しいお好み焼きはいらんかー。食べたいのなら1年C組大阪流までー。」

とプラカードを持つて回つた。

「九条君交代の時間です。」

「加賀美か。いつもと違つてよそよそしいな。」

「仕方ないでしょ。皆の前なんだから。ほら交代！」

俺は屋台まで戻つてお好み焼きを焼き続けた。

「10枚くださいー。」

あいつは柔道部の熊田か。捕まえてきたのは委員長だろう。委員長に感謝しないとな。柔道部でもトップクラスに強い女子つて聞いたことはある。大食いの噂も同時に。本当だつたようだ。

その後も客足途絶えることなく完売になつた。広島流の方を見に行つた結果向こうはすでに完売していた。

結果発表の結果どつちも同じ枚数で完売したが完売の速度が広島の方が早かつたため広島の勝利となつた。珍しさと本場の味が功を奏したというのが勝因だと毛利が言つていた。

そしてクリスマスパーティーが終わり屋上に行つた。

「待たせてすまんな後お疲れ様美知留。」

「いいよ。レイもお疲れ様それで屋上に来てほしかつた理由つて何？」

「それはこれだ。」

そう言つて俺は小さな箱を渡した。

「これつてイヤリング？」

「そう。挿むタイプ。」

「あちゃー。被つちゃつたか。」

「つてことは美知留も持つて來てたのか？」

「屋上に来たらプレゼントくれるんだろうなつて思つてたから。」

「ハハツ恋人の事なら何でもわかるつてか。」

「悪い？」

「いやむしろ嬉しい。」

「つてわけではい。」

「開けるぜ。おおつこれ前から目つけてた奴じやん。」

「レイなら好きかなつて思つて。」

「それじやあ帰るか。家まで送るよつて家知らなかつたんだ。」

「あのさレイ。一つお願ひがあるんだけど。」

「何だ？」

「帰りは遠回りしてほしいなーつて思つて。」

「わかつた。常識の範囲内でな。」

「ありがとう！」

そう言つて美知留は俺の胸元に飛び込んできた。そしてその後に一緒に帰つた。美知留の手を握つてお互いの体温を感じながら。そして俺たち聖櫻生は冬休みに突入した。

## 福引と新年時々両親

学園でのクリスマスパーティーが終わった翌日宿題の息抜きとして外出しようとした時

「礼二、外出するならついでに買い物頼まれて。」

「はあ、わかつたよ。それで何買つてくりやいいの？」

「今リスト渡すから待つてて。それとおまけだけど商店街で福引やつて いるらしいから景品は物によつてはあげる。」

「わかつた。」

そして俺は商店街で買い物を済ませた後楽器屋でいろいろな教本を買った。買った物は主に基礎物ではなく難易度の高いテクニックの関してのものだ。福引券もだいぶ溜まつたし一石二鳥だ。  
そして福引会場に行こうとした途中

「礼二。」

「おー悠。どうしたんだ?」

「これ貰つてくれ。俺にとつて欲しいものないから無用の長物でな。」

「サンキュー。」

「じゃあな。良いお年を。」

商店街の中の福引会場に俺は来た。福引券は親の買い物で4枚俺の買い物で5枚悠からもらつたもので3枚。一枚で1回だつたので12回回せるみたいだ。一等はペアの温泉旅行!? これは狙いだ。美知留と一緒に行きたい。そんな思いが脳をよぎつた。

「それでは次の方どうぞ。」

「はい。」

「福引券を確認させていただきます。12枚ですね。わかりました。ではこちらの福引を回してください。」

そして俺は回した。7つ参加賞のティッシュ3つカイロの結果だつた。残り2回を回した。結果はもう無理だと諦めていたが奇跡が起こつた。4等の1000円分の商店街割引券と1等温泉旅行

が当たつた。

「おめでとうござります！」

「ありがとうございます。」

奇跡つて意外と簡単に起ころるもんなんだな。帰りに悠の家に寄つた。

ピンポーン。

「はーい。つてあら礼二君。久しぶりじゃない。悠に用なのよね？ ちょっと待つてて。悠ー。礼二君よ。」

「どうした？ 礼二。」

「これやる。」

そう言つて商品券とティッシュを渡した。

「わざわざよかつたのに。まあありがたくもらつとく。」

「参考書でも買つて勉強してろ。」

「はつはつはそんなもん買う金あつたらボイトレの本買うわ。」

「そーかい。ま、俺は帰るわ。」

「じゃあな。」

俺は悠の家を去り家に帰つた。

「はいよこれ。買つてきて欲しいつて言つていたもの。」

「ありがとう。福引の結果は？」

「温泉旅行当たつた。」

「まあ！ 憎いじやない！ 彼女の美知留ちゃんと行つてくるの？」

「まあ。それの連絡をするとこ。」

俺は自分の部屋に入つて美知留に電話入れた。

「もしもし？ 美知留？ 今時間平氣？」

「あ、レイ？ うん。問題ないよ。」

「そつか。じゃあ早速本題に入るけど商店街の福引で温泉旅行当たつた。良かつたら年明けにどうかな？」

「もちろん行く！ それじゃ決定だね。」

「日付は年明けてから最初の金土でどう？」

「OK！」

「それじゃ当日は8時に新桔梗ヶ丘駅前に集合な。」

「わかつた。一回お母さんたちに聞いてみる。」

「はいよ。」

10分後美知留から電話が来た。

「レイ。OKだつて。あ、お母さんちよつと！」

「もしもしあなたが美知留の彼氏のレイ君？初めまして美知留の母の留美です。いつも美知留がお世話になつています。美知留から聞いたけどレイ君にも辛い過去があつたんだつたわね。傷を舐め合う関係からかもしけないけど美知留を大切にしてね。あ、それと旦那から俺の事はお義父さんと呼んでいいぞだつて。だから私の事もお義母さんでいいわ。」

「え？しかし俺には夢があるのでその夢で美知留を幸せにすることはできるかわからぬのですが…」

「大丈夫！美知留も夢があるから。その夢はー。」

「もーお母さんレイと喋り過ぎー。」

「あつ。ちよつと。」

「もうレイには話すね。アタシの夢は自分でコスプレブランドを立ち上げる事なの。だからレイと幸せになれるかわからんじー。」

「奇遇だな。俺にもバンドでやつていく夢があるから美知留を幸せにしてやれるかわからぬ。でもな美知留。それでも幸せかどうか決めるのは俺たちなんだからそんなことは気にしなくつてもいいんじゃないか？」

「レイ…。アタシレイを好きになつてよかつた。お互ی夢のために頑張ろうね！それとこれからもよろしく！」

「美知留。そのセリフはプロポーズまで取つておいてくれ。」

「あ、ごめん。」

「それじゃあ切るぞ。おやすみ。」

「おやすみ。」

それから数日後年末の特番を見て新年のあいさつを両親に済ませて俺は寝た。そして朝を迎えた。

「礼二ー。美知留ちゃんつて子が来てるわよー。」

「はいよー。」

俺はパジャマから着替えて玄関に向かった。そこには晴れ着を着た美知留の姿があった。

「明けましておめでとう！これから森園神社に初詣に行こう？」

「行つてらっしゃい礼二。女の子のお誘いは断る物じやないわよ。」

「わかつた。それじゃ行つてきます。」

「相変わらず混んでいるな。」

「礼二。明けましておめでとう。」

「明けましておめでとう礼二君。」

「おー恭介に風町。明けましておめでとう。」

「今年もよろしく頼むぜ。」

「ああ！」

「明けましておめでとう。礼二君。それと遅くなつたけど戸村さんとの交際おめでとう。」

「ああ。押井か。明けましておめでとう。後ありがとうございました。そういえば櫻井は？」

「知ちゃん待つてー。あ、九条君明けましておめでとう。今年もよろしくね。」

「明けましておめでとう。そしてよろしく。」

恭介たちと新年のあいさつを終えた俺たちは賽銭を投げてお守りを買った。美知留は金運上昇、俺は学業成就のお守りにした。

「金運上昇か。美知留らしい。」

「コスプレの為ですから。」

「はいはい。」

「あ、そうだ。これからアタシの家に来てよ。レイを紹介したいから。」

「わかつた。」

「ただいまー。」

「お邪魔します。」

「お帰り美知留。あらその子がレイ君？」

「そう。アタシの彼氏のレイ。本名は九条礼二君。」「どうも。」

「パパー美知留が彼氏君を連れてきたわよー。」

「おー君が噂のレイ君だね。俺が美知留の父、戸村智也だ。これからも美知留をよろしく頼んだよ。」

「は、はあ。あ、そういうえば美知留との旅行の件承認していただきありがとうございました。」

「いいつて。高校生なんだから健全なお付き合いでな。」

「?」

「その様子だとまだ問題なさそうだね。まあ大学入つてから違う。孫は期待しているよ。」

「ちよつとお父さん！ レイが困つているから連れていいくよ！」

「おつと。これは失礼。」

「なんていうかゴメンね。アタシの両親が。」

「なんていうか結構気が早い家系だな。でもあつたかい家庭だから悪くはない。」

「そう言つてもらえると助かる。あ、アタシが作つたおせちとお雑煮あるから食べていいって。」

「じゃあお言葉に甘えて。」

俺は美知留の作つたお雑煮とおせちを食べた。中学の頃から作つてから慣れたとのことだった。その後は旅行の事を話し宿題を手伝つておいた。そんな新年初日だった。

## 温泉勉強新学期

約束の新年最初の金曜日になつた。俺は準備を前日に整え7時30分に新桔梗ヶ丘駅前に到着した。美知留は待つてから10分程度で到着した。

「レイ、待つた？」

「ああ、三時間くらいこの寒い中待つてた。」

「レイ：冗談にしては下手ですよ。まあそれはさておき行きますか。」

「そうだな。ちなみに正しくは10分前だ。」

今回行く温泉は自由に選べたが美知留と相談して日本三名泉と名高い草津温泉にした。25分電車に揺られて新宿に着いた。そこからは高速バスで移動となつていて。

バス内では朝早くから俺たちは寝ていた。草津温泉に到着してから俺たちは昼食にした。昼食は二人でシエアして蕎麦にした。その後は温泉図書館で歴史の勉強をした。美知留からはレイの頭でつかちと言われた。観光地の歴史に触れて見聞を広めるつてのも学生のすること。俺はそう言い聞かせた。その後は西の河原公園を散歩して湯畠を観光しながら饅頭を食べ歩きしていた。

「そろそろ湯もみの時間だな。」

「湯もみって何？」

「お前さては図書館で勉強していいないな？まあいい。説明すると草津の温泉はもともとの温度が高いからそのままじや入れねーんだよ。そこで美知留だつたらどうする？」

「水を入れる。」

「ふつうはそう答えるだろうな。だけどそれだと効能が落ちる。だから温度を下げるために湯もみをするつてわけ。」

「さすがレイ。学年上位は違うね。」

「お前が学習意欲のないだけだ。とにかく行くか？行かないか？どうする？」

「せつかくだから行こ。えい。」

そう言つて美知留は腕を組んできた。

その後は湯もみを見てホテルにチェックインした。ホテルの部屋は二人で一緒だつた。カギは俺が持つことにした。そして二人で温泉に向かつた。混浴がなかつたのは運がよかつた？のかもしない。草津温泉に入つての感想。湯もみしてもめつちや熱い。

その後はバイキングの夕食だつた。夕食を済ませた俺たちはまた部屋に戻つてきてそのままベッドに入つた。

「レイ。起きてる？」

「ああ。」

「レイ。今日は誘つてくれてありがとうね。アタシレイと旅行できて本当に良かつた。恋人との旅行は初めてだつたんだよ？」

「俺も初めてだ。しかし今回の旅行が福引であてたものだから実質ゼロ円みたいなのはすまんと思つている。」

「そこは気にしなくていいよ。アタシたち学生だし。もう少し大きくなつたらレイが払つてくれるんでしょ？アタシの分まで。」

「そこまでの甲斐性があるかは知らんけどな。けどまたいつか来ような。」

「うん！」

「じゃあおやすみ。」

「おやすみ。レイ。」

そして夜は更けていった。

朝起きて朝食を済ませた俺たちは土産屋に行つた。部員の皆への土産や友達への土産、バイト先、そして家族への土産を買って俺たちは帰つた。

そして月曜からの新学期、悠、ルイとるい、恭介やクラスメイト達に土産を配つて回つた。本当は饅頭を渡したかつたが日持ちの都合上断念した。

姫島からは、

「礼一一、お前戸村と旅行行つたのか。それで何もなかつたのか？」

「何もなかつたのかつて何が？」

「襲つたりしなかつたのかと聞いてんのじやー！」

「誰が襲うか！アホか！高校生で不純異性交遊でいろいろマズいだろそれも考えらんないからお前はバカ呼ばわりされてんだろ。」

「誰がバカじやどー！アタシをバカつて言つたこと後悔させてやるー。」

「なら学業で俺を超えてみろ。」

「不可能なこと言うなー！」

「ならバカを認めろ。」

「ぐぬぬー！」

「はいはいそこまでそこまで。九条君も姫島さんも席ついてー。」

「すいませんでした。」

「礼二一。後で覚えとれよー。」

「皆さん新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。今日から冬休みの課題テストも始まります。高校一年も残すところ三ヶ月ですから後悔の無いように過ごしてください。先生からは以上です。」

一日課題テストをやり遂げ俺と恭介は部室に向かつた。

「新年あけましておめでとうございまーす。土産持つてきました。」「おー九条に真島。待つてたぞ。早速練習に…と思つたが九条手に持つてているのは土産か？」

「はい。彼女と温泉旅行行つてきまして。先輩も良ければどうぞ」

「サンキュー。」

「あとは部室に置き書きしておけばいいですかね？」

「問題ないと思う。」

「わかりました。」

西沢先輩がそう言つたので俺は置き書きして土産を置いておいた。バイク先でも同じようにして土産を置いて新年初日の登校日は終わりを告げた。

## バレンタインは戦場にも？

2月14日今日はバレンタインの日だ。俺が登校して教室に入つて荷物を置いたら美知留がやつてきた。多分チヨコかなと思つた俺は少しからかつてみることにした。

「レイ！今日は何の日でしよう？」

「2月14日だから語呂合わせで追試の日だろ。」

「レイ…それアタシには笑えない冗談なんだけど。」

「それは自業自得だろ。小テスト前にコスプレ制作する上に今回は一人で頑張るとか言つたのは美知留だろ？」

「うぐっ返す言葉もない。もうこれ以上追試の話はしたくないから

本題に移るよ。バレンタインでしょ！バレンタイン！」

「そうだな。つてことはやつぱり？」

「そう！はいコレ。もちろん本命だからね。」

「ん。ありがとな。」

「ダーリン。私からもだよ。はい。」

「ありがとな。」

「朝から二つももらつたのか。俺は一つだけだ。陽歌から。」

「恭介か。おはようさん。」

「あ、礼二君、恭介君、はいこれ。義理だけど。」

「ありがとなるい。」

「お前らももらつたのか。良かつたな。」

「ルイももらつたのか。まあ俺も義理だけどな。」

そういうつてルイはるいからもらつたチヨコを見せた。俺らとは違う。本当は本命じやねーか。るいは照れ隠ししたんだろうな。

「ルイ君のバカ（ボソツ）」

「どうしたるい？」

「なんでもないつ！ほらもうすぐ予鈴がなるから行くわよルイ君。」

「??」

「はあ…。ルイもいい加減氣づけばいいのにな。」

「本つ当に鈍感だよな。」

「全くくだ。」

昼休み俺は恭介と学食で昼飯を食べたその帰り道有栖川先輩が一部の女子に何かを配つていた。

「あれ？ 有栖川先輩何しているんですか？」

「あら、礼二君久しぶりね。それは「チョコを渡したりしていた女の子に映画のチケットをプレゼントしていたのよねー。」 そうそう。あら望月さんじやない。」

「幸せそうな女の子がたくさんいたから尋ねてきちゃつたわー。これで魅力的な女の子がたくさん撮れるわー。」

何この先輩怖い。

「確かに一人は君が美知留ちゃんの彼氏の九条礼二君でそつちの君が陽歌ちゃんの彼氏の真島恭介君よね？」

「な、何故それを?!」

「私の女の子に関する情報を甘く見ないでほしいわー。可愛い女の子の情報はすぐにつかんでいるんだから。あの二人は付き合い始めてからより一層魅力を感じるわ。」

「とりあえず小枝子ちゃんからもらつたチケットは今日この後二人からお誘いが来るとと思うから心の準備はしたほうがいいかもね。」

「あの、そういうのつてサプライズにするべきじゃないんですね？」

？

「あらそうねー。私としたことが迂闊だつたわー。」

「あーつらい！ やつと見つけたー！ 風町さん、レイと恭ちゃん見つけましたよー。」

「探したよ。恭介君。」

「望月先輩と有栖川先輩が一緒つてことは…あー知つちゃつたんだ。」

「ああ。映画のチケットのこと？」

「そう。これから誘おうと思つて偶然風町さんと会つたから一緒に探して いたんですよ。」

「つてわけで今日の放課後一緒に見に行こ？」

「今日は確か部活の日だつたよな？」

「そういえばそうだな。」

「じゃあ部活終了後に迎えに行くから。何時に終わるの？」

「17：30頃だな。」

「それじゃあ18：30頃に聖櫻モール集合で。」

「わかった。」

「今月のライブもうまくいきそうだな。今回はオリジナルじゃないんだな。九条スランプか？」

「そんな感じです。中々アイデア出づに。」

「そつか。何かすまんな。」

「いえいえ気にしないでください。アイデアってのは急に降りてくるものですから。」

「悠、何かいい考え方あるか？」

「そうだなー。出会いと別れみたいなもんはどうだ？」

「わかつた。とりあえずその路線で考えるわ。といえば最近知つたんだけど保健室の先生も神崎つて苗字だつたけど悠とはどういう関係だ。」

「よく聞かれるんだよな。いとこのねーちゃんつて所かな。」

「なんとなく睨んではいたがそんな関係か。」

「そういうこつた。」

放課後聖櫻モールにて

「あ、九条さん、真島さんも来たんですか？」

「花房か。つてことは。」

「はい。実は神崎さんにあげたんです。とてもうれしそうな顔をしていました。」

「良かつたな。」

「はい！」

「俺の名前が出ていた気がするんだけどどうした？」

「あ、神崎さん待つていましたよ。行きましょうか？」

「おう！」

「レイ。」

「恭介君。」

「事前に風町さんと映画調べてきました。チケットはペアの席を取  
れましたよ。風町さん発案で。」

「えへへー。」

「ありがとな。」

恭介はそう言つて風町の頭を撫でていた。

「映画は何を見るんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！それはズバリ！戦場のバレンタインで  
す。」

「あー今売れている女優の。」

「もうすぐで開場だから行きましょうよ。」

劇場で悠たちとも会つて戦場のバレンタインを見た。クライマッ  
クスの戦場から帰還した兵士の男が恋人と再会して10ヶ月遅れの  
バレンタインと称してチョコを渡していたのが印象的だつた。

劇場から出ると美知留と風町は涙目だつた。

「いい映画でしたね。」

「俺としては定番な感じがしたな。何かもう少し足りないものが  
あつた気がした。」

「俺も同感だな。多分思考回路が違うんだろうな。」

「時間はいい時間だからそろそろ帰らないとまずいな。」

「もう少し一緒にいたいけど親に外出禁止令出されたら元も子もな  
いから仕方ないよな。」

「そうだね。レイ今日は付き合つてくれてありがとう。」「  
恭介君もありがとう。」

「美知留は方向は一緒だから途中まで一緒に帰ろうか。」

「帰りの途中悠が後ろから合流してきた。」

「そつちも解散になつたか。花房感動して泣きっぱなしだつたから  
落ち着くまで俺が一緒にいたから少し遅くなつた。」

「何も関係に進展はなかつたのか？」

「特には。」

「何か変化が起きたんじゃないかとは思つたがまだ先か。」

「そのようだな。」

「??」

「ここにも鈍感が⋮」

そんな鈍感2名に呆れたが恋人とバレンタインを過ごした俺達  
だった。

取り返しのつかない間違いをする前に

3月13日後期期末試験を終えた俺と恭介はホワイトデーのお返しを買うために聖櫻モールに来ていた。

「礼一。ホワイトデーのお返しは何にするんだ？」

「ホワイトデーのお返しと言つたらマシユマロつて聞くからマシユマロから何か作つてみようと思つていてるが。」

「確かにマシユマロはホワイトデーでよく聞くよな俺もそうするわ。」

そんな会話をしていたら後ろから

「ちよつと待つた！」

と聞こえたので振り返つたら望月先輩と有栖川先輩がいた。

「礼一君も恭介君も何を考えているの!? 美知留ちゃんや陽歌ちゃんを泣かせるつもりなの!?」

「泣かせるつてどういうことですか？」

「もーおバカー！ ホワイトデーでマシユマロを送る意味を今すぐここで調べて！」

「は、はあ…」

「…」

「どうした恭介？」

「礼一。俺ら地雷を踏むところだつたぞ。」

「どれどれ…ヤベー！ 確かにこれは踏んで終わつたな。」

そこにはマシユマロの意味はあなたが嫌いと書かれていた。

「だからマシユマロはダメなの。ホワイトデーのお返しで悩んでいるならお姉さんが手伝うわよ？」

「では先輩に質問です。下手でも手作りのほうが嬉しいですか？ 市販のほうにするべきですか？」

俺はそう聞いた。

「それは相手次第かな。でも手作りのほうが気持ちは伝わりやすい

からおすすめといえればおすすめね。」

「ならそうするか。」

「そうしよう。それじゃあ少し調べるか。」

「礼二。マカロンかマドレーヌが妥当かもしれないな。」「いいじゃない！それなら二人もきっと喜ぶわー。」

「難易度的にはマドレーヌのほうが低そうだがマカロンはどんな感じだ？あとそれぞれの意味は？」

「マドレーヌはもつと親密な関係になりたいマカロンはあなたは特別。」

「多少下手でもマカロンにしたいところではあるな。」「お前も同じ考え方か。」

「礼二に恭介じやん。どうした先輩たちと一緒にいて。」「悠か。ホワイトデーのお返しで悩んでいてな。」

「ふーん。花房へのお返し考えないとなーって俺も思つて来たわけだがお前らとは事情が違うから俺は俺なりに考えるわ。」

「そうか、まあよく考えな。マシユマロは絶対ダメだからな。」「了解。」

「とりあえず菓子作りの本買つてそこから材料買つて礼二の家で作るか。」「俺の家でか？まあいいけど。」

その後望月先輩と有栖川先輩と別れて二人でマカロン作りに挑戦した。ないと見吉には市販のクッキーを買っておいた。悪戦苦闘したが何とか作ることには成功した。呑み込みが早いことに感謝したのはここだけの話。

翌日の朝教室に入つて美知留を探したらすぐに俺のところに来た。

「レイおはよー。」

「おう。はいよ、これ。ホワイトデーのお返し。」

「レイ…ありがと！」

そういうつて美知留は俺に勢いよく抱き着いてきた。

「バカ！ここは教室だぞみんな見てる。」

「いーじやん！周知の事実なんですかー！」

「はあ…姫島や霧生、委員長から何言われるやら…面倒ごとは好かないんだけどな。」

そういうって俺は美知留を俺からゆつくり引きはがした。

「見吉見吉。ほいこれ。」

「ダーリンありがとー。そつかこれからも私の大切な友達でいてねつか。ありがとう。」

数日後後期期末試験の結果が発表された。

2位九条礼二

3位不知火五十鈴

4位真島恭介

「くそっ。不知火には勝ったがトップにはなれずか。」

「今回は私の負けのようだな。礼二おめでとう。」

「ありがとな。不知火。」

次の土日に軽音部の追いコンライブがあつた。3年生優先のタイムテーブルだつたから俺ら1年生に出番は少なかつたがいいライブであつた。月曜日に卒業式で軽音部で打ち上げ兼送別会を行い、翌日終業式で春休みを迎えた。春休みはアルバイトに打ち込んだり1年で学んだことの復習をしたりした。恋に打ち込むことも考えたが恋に足をすくわれて失敗はカツコ悪いと思い我慢した。

## 高校二年編

### 新しいクラスと新入生

四月の新学期が始まる日俺、恭介、ルイ、るいの四人で登校していた。すると後ろから、

「おつはよーレイ、恭ちゃん。」

「おはよう、恭介君、礼二君。」

「よーっすお前ら。」

振り返ると、美知留、風町、悠がいた。

「レイ今日はクラス替えだね。一緒のクラスかな?」

「知らん。どこのクラスだろうと普通に勉強と部活とバイトして過ごすただそれだけだ。」

「レイ。もう少し遊ぶつてことを覚えたほうがいいと思うよ。」

「美知留が遊びすぎなんじやね?」

「失敬な! コスプレ制作がアタシの青春なの!」

「まあせいぜいコスプレの作りすぎで赤点取らないように頑張りなー。」

「ぐむむ:アタシの成績がレイの力などと赤点取りかねないのが悔しい…。」

「そういうえば二か月後の修学旅行の班決めはどうなるんだろうな?」

「クラス問わずの班決めも問題なかつたつて小牧先輩たちは言つていたな。」

「なら俺らは俺らで組んじまうか?」

「それがいいかもな。俺、恭介、悠、ルイで。」

学園についてクラス表を見た。

2年A組

風町陽歌

上条るい

2年C組

天霧ルイ

九条礼二

戸村美知留

真島恭介

2年D組

神崎悠

「今年も俺らは一緒か。」

「ルイ君、寂しかつたらいつでも来ていいんだからね？」  
「るいこそ寂しかつたら来ていいんだぞ？」

「ムキー、ルイ君のくせに、ルイ君のくせにー！」

「この二人は相変わらずだな。」

「か、神崎さん、おはようございます。」

「ああ、花房か。おはよう。どうしたんだ？声かけてくるなんて珍しいじやん？」

「一緒にクラスなのであいさつしたかったのと春休みのお礼を言いたかつたので。」

「悠、花房と春休みに何していたんだ？」

「ああ、花房の弟と妹の面倒と一緒に見ていた。」

「バイトのシフトが少なかつたのはそれが理由か。納得だ。」  
C組に入ると見て驚いたのは圧倒的な女子率だった。

「あ、ダーリンおはよー。」

「見吉が一緒か。」

「おはよう九条君、真島君。今年も一緒に切磋琢磨しようね。」「さらに学年トップクラスの遠山か。今年もお前を完封させてもらうからな。」

「それは今年にはどっちのセリフになるかしらね。」「みんな席について。始業式に移動するわよ。」

「ほうほう。今年はよーこちゃんか。」

「姫島、今年もボクの登校プランをかき乱さないでくれよ。」

「お前がいないとゲームがつまんないんじゃー。」

「それなら礼二と恭介に力を借りればいいじゃん。」

「モンハンのフォーマンセルはどうすんのじゃー?」

「スリーマンセルでもいいじゃん。」

「ぐぬぬー。意地でも登校させてやる。」

始業式にて

「続きまして留学生の紹介をします。クロエさん、ユーリヤさん、李さんよろしくお願ひします。」

「初めまして皆サン。ワタシはフランスから留学してきましたクロエ・ルメールデス。よろしくお願ひいたしまス。」

「ロシアから留学のユーリヤ・ヴァルコワといいます。よろしくお願いいたします。」

「中国から留学の李春燕言うネ。皆よろしくアル。」

「以上三人の留学生の皆さんでした。」

「金髪外国人中々コスプレのさせ甲斐がありますなー。」  
と美知留が不穏なことを言つていたのはここだけの話。  
そんなことがあつた数日後新入生が部活見学に来た。

「ここにちは。九条先輩、真島先輩。」

「桃子ちゃんこの先輩たちと知り合いなのですか?」

「そうだよ。くるみちゃん。中学の時の先輩なんだー。」

「ひよつとしてdearのREIJIさんとKYOSUKEさん  
じゃないですか?」

「中学の頃の俺らを知つているのか?」

「それはもちろん!俺らの周辺ではかなりファン多かつたので。」

「俺ら先輩方にあこがれて楽器を始めたのでお会いできて光榮です。」

「自己紹介がまだでした。私は江藤くるみでつす。先輩よろしくお願いしまっす。クラスは1年B組でつす。」

「俺がギターの秋山諒です。」

「俺は里見康二でパートはベースです。クラスは諒も一緒の1年C組です。」

「ボーカルの先輩は初めましてなので私も自己紹介しますね。1年A組の朝比奈桃子です。パートはキーボード担当です。」

「俺は九条礼二、担当はギター。」

「俺が真島恭介でパートはドラム。」

「俺が神崎悠。パートはボーカル。」

「ひよつとして悠って名前つてことは最初のボーカルで転校の都合で脱退したメンバーッてことつすか？前の方がよかつたつて声をライブの時によく聞いたので。」

「多分その前のボーカルが俺つてことだな？合っているか？礼二。」「ああ。」

「クラスは俺と恭介がC組、悠がD組。」

「小牧真人。3年A組だ。パートはベース。」

「西沢靖。3年C組。パートはギター。」

「真人サン、見学に来ましたヨ。」

「クロエか。九条、部室に予備のギターはあつたか？」

「確かに、O Bの誰かが仮入部者用について最後に初心者ギターを提供してくれた気がします。あ、ありました。クロエ先輩もやつてみますか？」

「是非！」

こうして新入生の確保、クロエ先輩の見学で最初の一週間は終わりを告げた。

## 遠足の道中は昼寝に限る

遠足の班を決めるホームルームにて

「礼二、恭介今年もモンハンするぞつてか力を貸せ！」

そういつたのは姫島だった。

「ボクもまた付き合わされるんだ。遠足なんてだるいし中華なんて興味ない。ピザがないなんて行く価値もない。」

「なら弁当にでも持つてくれればいいだろ。」

「その手があつたか。姫島どれくらい持つてくれるんだ？」

「ワシにたかるのか!?」

「そりやそうだろ。依頼するならそれくらいの対価は払うべきだ。」「つてことらしいぞ礼二、恭介。」

「そうか。なら俺らがお前に払つてやるよ姫島。グーパンで。」

「ノー！ 暴力変態！ 暴力変態！」

「それを言うなら暴力反対な。」

ゴチン！ ゴチン！

俺と恭介は姫島にゲンコツを一発ずつした。

「イテテテテ。恭介のほうが痛い。つてか女に暴力振るうとは何するんじやー！」

「お前を女とは思っていないから。男友達感覺だし。」

「はあ…これはまた今年も私が一緒じゃないとね…」

「委員長…ご愁傷様です。」

「レイ！ あ、東雲さんじやなくて彼氏のほうのレイね。アタシも一緒にしていい？」

「別に構わん。仮に嫌と言つても一緒の班にするんだろう？」

「それはもちろんです。サー。」

「今年からは戸村さんは九条君が管理してくれるから手間が少し減るわね。」

今年の班は姫島、美知留、東雲、俺、恭介、委員長になつた。

学校からバイトに向かう途中ルイと会つた。

「おーリイ、そいいえばお前バイト決まつたらしいな。どんなバイ

トだ？」

「祐天寺先生から暇していそうを理由に学校周辺に現れる不審者の取り締まりをやつてている。不審者を捕まえて警察に引き渡すのも仕事。祐天寺先生に武術は一通り教わった。今年の四月に入つてからすごく増えたから大変だけど給料は高いからいいね。噂だと祐天寺先生の昔もらつたファイトマネーとか学園からの支払いとか支払元は知らんけど。」

「そうか…。それ以上聞くのはよしておこう。何かまずそうだし。」  
その日のバイトの時に小牧先輩と西沢先輩にお勧めの店を聞いた。  
二人とも昼は食べ放題だけど食べ歩きのためにセーブして色々食べてみるといいとのことであつた。店長の大島さんからは、  
「土産は適当に何かよろしく。」

とのことだつた。

遠足当日

「礼二モンハンするぞ。」

「どーぞご自由に。俺はやつてやるとは一言も言つてねーから。」

「なら恭介お主は力を貸してくれるよな?」

「残念ながら答えはノー。俺ら昨日の夜俺のリフオームした家の地下スタジオで恭介の新しいドラムのお披露目と練習で眠い。やつと届いた二つ目のドラムセット披露したから興奮して寝られなかつた。これで念願のツー・バスできるつてな。」

「ツー・バスつてなんぞや?」

「二つのバスドラムセットされたドラムセットだ。つてわけで俺は寝る。」

「アタシもコスプレ作成で忙しかつたからシメジちゃんごめん…」

「ノー！寝るな！寝たら死ぬぞー。こうなつたら右手にお玉を！左手にフライパンを！」

「姫島さん。ここは料理をする場所じやありません！没収します

！」

「ノー！よーこちやんならこいつら起こしてくれー！」

「ホームルームは終わつているからあとは到着まで自由です！」

「ひーん。」

中華街に到着して少し早めの昼食になつた。体型に気を遣うジヤンルだから食べすぎには気を付けた。美知留もコスが入らなくならないようにとセーブしていた。食いたいけど食えないのはつらいと思つた俺達だつた。

ランドマークタワーを最後に観光して遠足は終了した。

その後のゴールデンウイークは悠や秋山、里見と練習や宿題で終わつた。

秋山と里見の宿題を見た時は基本はできていて応用はもう少しつて感じだつたが赤点はなきそうで安心した。悠もそんな感じであつた。中学のころから基本はできて応用苦手つて感じだつたのがルイと悠だつた。中間試験も後輩の初陣も何とかなりそうで安心した俺と恭介であつた。

告白する勇気と告白される優輝

新入生たちの初陣ライブが終わってから数日が過ぎたある日俺は花房のことで悩んでいた。花房のほうからいろいろアプローチをかけられているのはわかる。俺のことが好きかもしれないという希望的観測かもしれない。そんなことで何度も悩んでいた。

「どうしたん神崎？うじうじ悩んでいるみたいだけど、体動かしていれば頭がすつきりすると思うけどどうだい？」

みねー！」うわつ、先輩誰ですか!?」

「あらごめんなさい。恋をしていた人がいそうだつたから飛び込んできちゃつたわー。あ、自己紹介が先ね、私は有栖川小枝子。合唱部の部長よ。真人君と靖君の後輩だつたかしら？ 前に礼二君の相談にも乗つて見事二人は結ばれたのよ。君の名前は？」

「それじやあ神

「それじゃあ神崎君。放課後保健室で話を聞くわ。理由はあなたが  
神崎先生の知り合いつて噂が流れているからよ。」

一  
は  
はあ  
…  
」

一方的に話を進められてしまった。行かなかつたらミコト姉ちゃんにぶつ飛ばされるだろうから行くけど。

放課後になつて俺は保健室に向かつた。入つてから第一声が、

「いきなりなんだよミート姉ちゃん」

「あ、神崎君来てくれたのね。それじゃあ本題に行きましょうか。」  
「神崎君が好きなのは誰なの？」

「同じクラスの花房ですね。」

「あら、あのいつもオドオドしている女の子よね。悠ああいう子が

「知り合つたきつかけは去年の秋と冬の境くらいに迷子になつた花

房の弟と妹の保護をした時だつた。そこから試験勉強を一緒にした  
り、花房の弟と妹の面倒を一緒に見たりしているうちに好きになつ  
たつて感じかな。」

「それでなんで二の足を踏んでいるの？」

「そういうの虫が良くないかつて思うんですよ。面倒見てやつてい  
るから俺と付き合え見たいな感じになつてしまふのが。それに花房  
にはまだ幼い弟や妹がいる。その子たちを放つてデートなんてでき  
ないなつて思つて。」

「悠、あなた本当に馬鹿ね。そんなの花房さんが決めることでしょ。  
自分に正直になりなさい。好きなら好きつて伝えないと。」

「でも。」

「神崎君。神崎先生の言う通りよ。迷惑かどうかなんて相手の花房  
さんが決めることがなんだからアタックしてみたらどうかしら？」

「悠、三日以内にアタックしなさい。できなかつたらゲンコツよ。」

「はあ、わかつたよ。」

その日の夜、花房に電話をして放課後屋上に来てほしいと伝えた。  
翌日の放課後俺は急いで屋上に向かつた。2、3分して花房が來  
た。

「神崎さん。大事な話があるつて言つっていましたが何でしようか。」「花房、君のことが好きだ。俺と付き合つてほしい。」

すると花房は泣いていた。俺は

「嫌だつたのか？もしそうならごめん。」

「…がいます。」

「…え？」

「違います！これは嬉し泣きです！神崎さんやつと私の思いに気づ  
いてくれたつて。」

「つてことは。」

「はい！私も神崎さんのことが好きです！幼い弟や妹もいますし視  
線恐怖症な私ですが私と付き合つてください！」

俺は花房を抱きしめた。

「頼みがあるんだけどいいかな？」

「何ですか？」

「恋人になつたんだからゆーちゃんつて呼んでもいいかな?」「是非!では神崎さんはゆーくんでいいですか?」

「いいよ。」

「今日の下校手をつないで遠回りしてもいいですか?」

「ああ。」

「試験勉強は毎回面倒見てあげてもいいですか?」

「もちろん。」

「お昼一緒に食べてもらつてもいいですか?」

「もちろん。」

「それから:」

「そろそろ帰ろつか。今日はバイトだし遠回りしていたらシフトの時間になつちやうからこれからのことはその時にゆっくり話そう。」「はい!」

「どうしたんだ悠。ずいぶん機嫌よさそうだな。」

「ああ。俺の憑き物となつていた悩みが解決したから。俺花房と交際することにした。」

「そつか。お前も花房の思いに気づいたのか。」

「つてことは礼二は気づいていたのか?」

「ああ。とつくの昔にな。」

「ならなんで教えてくれなかつたんだよ。」

「そういうのは自分で気付くべきものだつたから放つておいてやつた。恨むならお前の朴念仁つぶりを恨め。」「正論過ぎて反論できない。」

「これで残す俺らの悩みはルイルイコンビだけだな。」

「ああ、るいはルイのこと好きだもんな。」

「あのバカが気づくのはだいぶ先になりそうだけどな。」

「うわつ恭介。いきなり俺の後ろに立つなよ。」

「修学旅行で何か変化が起きれば面白いんだけどな。」

「そんなことを思つた修学旅行一週間前の日々であつた。」

## 修学旅行と新たな縁

修学旅行前日に修学旅行のしおりを見て忘れ物がないか確認を終えた俺は少し早めに寝た。寝る前美知留がやたらLINE入れてきてやかましかつたのでもう寝るといつて連絡を切つたのはほかの人には内緒。

### 行きの新幹線内で

「レイ酷い！どうしてあの後すぐ寝ちゃったの!?」

「今日の行動に支障出ないようにするため。大事な話の時に寝ていたら話にならないからな。」

「修学旅行前のテンションなんてそんなもんじやん。」

「だから感情より理性を重視した。」

「ううー。」

「礼二、大変だつたな。」

「ああ。ところで道中暇になるだろうと思つてトランプ持つてきたがやる奴いる？」

「俺は参加。」

「俺も参加。」

恭介にレイが便乗した。

「アタシも。」

続いて美知留。

姫島は東雲とモンハン中だつたので放つておいた。

数分後

「ほつほつほレイ。貧民にはこれがお似合いよ。」

「フン、そういつていられるのも今のうちさ。」

「8切り。からの3、4、5」

「これはさすがに無理でしょ。」

「ほいQ4枚で革命。」

「そこで革命!? 酷い、酷いよレイ！ それが彼女にすることなの？」

「美知留。頭に特大ブーメラン刺さつているぞ。」

「結構痛いことしてくれたな礼二。だがこれで俺の持つていた最弱

の5使えるぜ。」

「恭介ぬるいよ。4。」

「バス。」

「ルイ、美知留悪いな3。」

この回は俺が大富豪で幕を終えた。

静岡時点でここまでの大貧民と貧民は俺とルイが多かつたがここで逆転して京都まで俺とルイが大富豪と富豪になつた。

最初に来たのは清水寺だつた。

「何々左から学問成就、恋愛成就、延命長寿かとなると学問成就かな。」

「俺も同じく。」

俺と恭介は学問成就の水を選んだ。

「戸村さん！舞台からの飛び降りごっこはやめなさい！」

「レイかくまつて。」

「だが断る。」

「酷い！胸まで当ててあげているのに。」

「常識のないやつへは当然の報いだ。」

「ひーん。」

「文句があるなら俺が突き落としてやろうか？」

「やめてよ！死んじやうでしょ。」

「冗談だ。」

「レイが言うと冗談に聞こえない。」

「何か言つたか？」

「何でもありません！すみませんでした！」

次に金閣寺と銀閣寺を回つて初日は終わつた。

「部屋は男女の行き来は特に禁止されていないみたいだな。普通の高校だつたら制約されていいみたいだけだな。普通の

「うちが緩いだけだろ。」

「言えている。」

同じ部屋の恭介、ルイ、悠はそんなことを言つていた。

入浴時間を終えてから美知留と姫島、東雲が来た。

「モンハンするぞ。礼二、恭介。」

「この人数を考えろ。お前の脳みそはキノコ生えまくつているのか  
？あぶれる奴らのことを考えろ。」

「俺はゆーちゃんのところ行つている。」

「俺はロビーで土産見ている。」

「断る理由がなくなつたな。」

「しょーがねーな。1本だけだ。」

「なら絶対零度行くぞ。」

「姫島力尽きるでハツトリックするなよ。」

「やかましいわ！そつちこそ！」

その後姫島が一回力尽きながらも突破した。

「ハツトリックにはならなかつたな。」

「そろそろ男女の行き来の時間終了じゃね。」

「あ、ホントだ。それじゃあね。レイ、恭ちゃん。」

「ああ。」

初日はこれで終わつた。

最終日は14時まで自由行動で土産購入もその時間内にとのこと  
だつた。集合場所は京都駅。そのため恭介、美知留、風町を誘つて回  
ることにした。俺たちは相談の結果本能寺と二条城と映画村を見る  
ことにした。

「ここが二条城か。織田信忠の最後や大坂の陣の会見もあつたつて  
考えると歴史では重要なところだよな。」

「ねえ礼二君、織田信忠って誰？」

「信長の長男。本能寺の変の時に一緒に殺されている。正式には追  
い詰められて自害だけど。」

「礼二君物知りだね。」

「俺は知つていたけどな。その話を教えたのは俺だし。」

「ハハツそうだつたな。一時期恭介歴史にはまつていた時期あつた  
しな。今は理系だけど。」

「俺がやりたいのはもつとマニアックなことだつたのと国語が苦手

だつたからな。」

「ちなみに今立っている本能寺は昔本能寺の変があつたところから少し離れたところにある。」

「さて、バスで映画村に向かうか。」

映画村で衣装を着て撮影をしたり、時代劇の舞台を見て土産探しに駅の近くまで戻ってきた。そして俺と恭介は土産で悩んでいた。

「悩むよな。」

「ああ。前のと同じにしちまえば楽だけどひねりがないしな。」「これなんかオススメやで。」

「うわついきなり後ろから話しかけないでくださいよ。」

「いやー兄さんたち困っていたみたいやから力になろうと思つて。その制服は聖櫻?」

「知つているんですか。」

「ダンス大会とかで少しな。」

「日々喜はん、そんなに一方的に話したらその子たち困るさかい。そのへんにしておき。」

「自己紹介がまだでしたね。私は三条八重。そつちのおしゃべりさんが豊永日々喜。」

「はいはい日々喜ちゃんでーす。でこつちがアネット。」

「アネット・〇・唐澤や。よろしく。」

「私は嵯峨椿高校の生徒やからダンス大会で聖櫻のことは知つているんや。」

「なるほど。こつちの自己紹介がまだでいたね。俺は九条礼二でこつちが真島恭介です。ちなみに俺たちは高校二年です。」

「なるほどアタシらの1個下か。彼女はあるの?」

「俺たちそろつて彼女持ちです。」

「そつか。それは残念。それはきておきお土産やつたな。学生たちの間では京都ブラックサンダーが人気高い気がするなあ。後はあぶらとり紙、阿闍梨餅、八つ橋あたりかなー。どう?」

「それらにさせてもらいます。八つ橋は前来た時に買いましたが今

回も買います。」

「礼一。陽歌からLINEで軽音部の皆さんにも買つていこうつてきました。予算は割り勘だと。」

「そつちに任せると伝えておいてくれ。悠にも連絡はしたともついでに。」

「では皆さんありがとうございました。」

「気にせんでええで。今度そつちにも遊びに行かせてーな。」

「はい。」

「レイ、選び終わつた? ところでさつきの人は?」

「土産選び手伝ってくれた地元の高校の人だと思う。結構なお嬢様つて感じだつたな。」

「レイ。まあいつか。レイは浮気しなそうだし。」「信用しているのか?」

「そりやあね。」

「ありがとな。」

そういつて美知留の頭を撫でてやつた。

「えへへ。」

帰りの新幹線内は疲れて寝ていた。

## 自分の人生のために行動せよ

修学旅行が終わり7月に入った。朝のS H Rで参加自由の全国の模試を受けるか悩んで次の休み時間に恭介と話をしていた。

「恭介、朝言つていた模試は受けるか？」

「それをお前にちようど聞こうと思つていたんだ。お前は受けるか？」

？」

「絶賛お悩み中つて所だな。恭介はどこの大学狙つているんだ？」

「皇龍学院大学、偏差値もいいから箔も付くと思って。」

「お前もか。俺も同じ理由でそこ狙つていた。」

「俺らはプロ目指しているから関係はないと思つているけどまともなのがいなかつたら就職しかないとだろうしな。」

「超難関私立だからなー。あそこは。今どれくらいの確率で受かるか知つておこうぜ？」

「そうだな。」

「そういえば風町と別れたのってマジ？」

「ああ。マジ。理由はもしも喧嘩して別れて部室内の空気悪くしたらつてのを風町と俺で相談して二人で同意の上だ。みんなに迷惑がかかるのも嫌だからな。円満に別れたつて所か？」

「それはそれで嫌な予感しかしないが。まああとは黒川とか蓬田に力を借りよう。」

そんな話をしていたら、チャイムが鳴つた。  
次の休み時間、

「レイ！ 朝言つていた模試は受けるの？」

「ああ、受ける。恭介も受けるみたい。そうだろ？」

「ああ受ける。今どれくらいの確率で受かるのかは気になるしな。」

「アタシは専門学校の推薦使おうと思っているんだけど大丈夫かな？」

「美知留、悪いことは言わん。推薦は諦めろ。授業中散々の居眠りに俺なしだと赤点にギリギリだろ。そんな奴推薦したいと思うか？」

「レイ、アタシに現実を突きつけないで。泣くよ。勉強頑張るからア

タシを捨てないでー。」

「わかつたらここまで習つたことをきちんと復習しておけ。」

「うん。専門学校でいろいろ学びたいから頑張る。コスプレ作成にとつてきつとプラスになるだろうから。」

「戸村さんいいかしら?」

「遠山さんじやないですか。どうしたんですか?」

「実は九条君と真島君と一緒に今度の模試の勉強会をしたいの。それで戸村さんは九条君と交際中だから一緒にどうかと思ったの。」

「俺は構わん。」

「遠山、警告はしておく、戸村との勉強は疲れるぞ。それでもいいのか?」

「そこは気にしていないわ。九条君と真島君もフォローしてくれることでしょ?」

「それはする。毎回美知留と恭介とは勉強している日もあつたし。「問題は遠山が耐えられるかだな。戸村の学力は思うところがあるからな。」

「ちよつと恭ちゃんさつきからひどくない?」

「事実だから仕方ないだろ。」

「うぐつ。」

「この際だから遠山からも学んでおけ。成績上がれば志望校に受かる可能性も上がるんだから。」

「勉強は嫌いですけど志望校に受からないのはもつと嫌なので頑張りますよ…。」

「決まりね。」

その日の放課後から勉強会を始めたことにした。遠山は美知留の出来の悪さに苦労していたが慣れてきたみたいで後半は順調だった。模試の日の放課後俺たちはV系のコピバンのライブがあつた日だったのでいつも部活でのライブで使っているライブハウスに寄っていた。そこにある広告があつた。

『集え! 高校生バンド!』

全国高校生バンド大会のチラシだつた。一枚とつて鞄にしまつて

ライブを楽しんだ。家に帰った後に恭介、悠、秋山、里見に声をかけて応募しようと伝えた。内容はコピーとオリジナル問わず3曲、エンブリードしたメンバーで予選から脱落するまで変えてはならないがルールだった。投票はオーディエンスによる投票と審査員票だけ。予選は11月の頭で文化祭のすぐ後だった。

部長に部室に掲示を依頼して部室にチラシを掲示してもらつた。応募するのは風町たち「にゅーろん★くりいむそふと」と俺たち「evil jack」だけだった。風町たちは全部オリジナルで勝負するみたいだったが、俺たちは会場で知っている曲もあつた方がいいだろうと保険でコピー1曲オリジナル2曲で勝負することにした。

夏休みに入る終業式に模試の結果が返ってきた。結果は俺も恭介もA判定だった。さらに成績優秀者で偏差値70以上の人たちリストに名前も載っていた。全国順位を見たら俺と恭介は同じ順位で全国約3万人のうち191位で校内4位だった。一緒に勉強していた遠山は校内6位で245位という結果に終わつた。美知留は13000番台のことだった。全国で半分くらいいっていればいいやと思っていたので俺らの努力が実つて安心した。

## キャンプ合宿のカレーは好きじゃない

時は少しさかのぼつて終業式の数日前

「礼一、恭介、東雲、クエストがあるぞ。」

「クエスト? なんじやそりや?」

姫島はそう言つて掲示板のキャンプ合宿のポスターを指さした。  
「このポスターを見ろ。これは職員室やいろんなところに貼られて  
いたキャンプ合宿の話だ。これに参加してレポートを書けば宿題免  
除されるぞ。つまり遊び放題じゃー。」

「なるほどな。夏休みは自由な方がいいから俺は賛成だ。」

「俺も。」

「ボクもその案に乗る。」

「レイが行くならアタシも。」

「美知留、何に行くのかわかっているのか?」

「それはキャンプ合宿でしょ? 途中から聞いていたから。」

「必殺盗聴人がここにいるぞ。」

「それって誰の事?」

「美知留、お前以外に誰もいないだろ。」

「とりあえず、参加者は申し込みにいかないとか。」

俺らはさっそくキャンプ合宿の申し込みに行つた。

夏休みが始まって3日目の朝、俺、恭介、美知留はバスに乗り込んでいた。時間ギリギリにルイと東雲が乗つていた。姫島はいなかつたことから体調不良かと思つていた。そしてトイレ休憩の時に話を聞いたら寝坊して別のバスに乗つたとのことだつた。もちろんルイ、東雲、姫島は絞られたらしい。

キャンプ場に到着したら電子機器を回収された。改修前に全員付箋を渡されスマホなどに名前を書いて貼つていた。理由は大自然をより感じるためとのことだつた。先生からの説明を受けてテントを張るのを男子が、調理器具を借りに行くのを女子が担当した。女子のほうを見たら多少予想していたが桐山と南田がいた。おそらく天体望遠鏡でも持つてきたのだろうなど想像した。

テントの設営は恭介と一緒にしていた。

「そういえばルイの奴どこ行つたんだ？ サボりか？」

「多分な。東雲か姫島に唆されたんだろ。礼二悪いことは言わん。動いたらお前まで捕まるぞ。」

「わかった。にしてもテント張りつて面倒だな。」

「ギターのチューニングやドラムのチューニングと同じつて考えろ。にしても悠は来なかつたのは残念だつたな。」

「仕方ないだろ。彼女の花房と一緒に弟と妹の面倒を一緒に見てあげないとなんだから。宿題は花房に教わりながらなんだろうけど。」

「安易に想像できてしまう。」

1時間後案の定ルイ、東雲、姫島は月白先生に怒られていた。見捨ててよかつたと内心思つた。

夕方になり夕食づくりが始まつた。今回はルイがいたが、姫島と東雲が脱走して いた。噂で聞いた話にはキノコ採りに行つたらしい。

「レイ、野菜のほうは洗えた？」

「ああ、洗えた。」

「ならあたしが切つておくから、恭ちゃん火のほうは起こせた？」

「問題ない。」

「それじやあ二人は休んでて。あとはアタシがやつておくから。」

「これもいれていいかー？」

姫島が来て怪しいキノコを持つて立つて いた。

「得体の知れないキノコなんか入れられないよ。」

姫島の後ろから月白先生が来て、

「姫島さん、探しましたよ。」

と言つた。すると姫島はキノコを片手に

「マ、マンマミーア。」

と言つていた。任天堂のあの髭のおつさんかと突つ込みたかたが我慢した。理由は突つ込んだら負けだと思ったからだ。案の定その後、月白先生に怒られていた。

食事中

「カレーはもう少し辛い方が好みだな。辛くて食えないくらいが

ちようどいい。」

「これでもまあ食えなくはないな。」

「仕方ないよレイ。先生からの指示だから、あ、調味料を先生からも  
らつてくるから少し待つて。」

「助かる。」

夕飯の後腹ごなしに散歩していると南田と桐山が一人で天体観測の準備をしていた。

「これから天体観測か南田？」

「はい。良かつたら皆さんも呼んでもらえませんか？この星空を二人で独占するのはもつたいないと思つたので。」

「わかつた。」

その後はみんなで天体観測をした。今回の合宿は前の部活の合宿とは違う所だが都会から見る夜空とは違うなと改めて思った。

翌日は6時起床から全員で朝食の支度をした。その後は自由行動で10時から昼食の支度のために釣りを始めた。昼食は魚とあらかじめ朝に炊いた残りの白米だった。昼間に木材を切ることを男子がやつてそれを組み立ててキャンプファイヤーをするのかと想像した。

夕方になつて全員で野菜や肉の仕込みをして夕食はバーベキューだつた。

そしてキャンプファイヤーをした後先生たちの計らいで花火をして二日目は終わつた。

最終日に先生たちからレポートの用紙を渡された。感想文でも可とのことだったので感想文のほうが楽だということから感想文で済ませて締め切りの一週間後の前に提出して合格をもらつて俺の本格的な休みは始まつたのだつた。

## 受験生になる前の最後の夏休みの過ごし方

夏休み前に両親から行くか聞かれていて行くと言つていた8月初日から始まる予備校の夏期講習を恭介と受けに行つた。受ける夏期講習は5日間で苦手な人にもわかりやすい説明で評判になつていて予備校の講習だつた。俺は国語、日本史、英語を選んだが、恭介は物理、化学、英語、数学を受けるとのことだつた。

「あら？ 九条君もここに来ることにしたんですか？」

「加賀美か。ここは評判も良かつたから一応基礎固めると応用力を養うつてのが目的でな。とりあえず試しに受けてみようつて所。」

「私は家族から半分強制的にです。私の両親が厳しいから無理やり受けさせられているんです。大学も家から通えるところにしなさいと言われているので。」

「大変なんだな。」

そんな予備校の夏期講習の5日間はあつという間に過ぎていつた。最終日に行われた予備校のテストでは文系トップにはなれなかつたが講習を受けたクラス内では2位の成績だつた。恭介の成績を聞いたら恭介はクラス1位だつたらしい2位は遠山だつたと恭介から聞いた。

美知留からコミケでやるコスプレの合わせをしたいから家に来てくれと言われて採寸をして2日後完成してそこから打ち合わせをしていた。その週の残りはオープンキャンパスを志望している大学がいくつか開催するとのことだつたので一番日が早かつたのは第一志望の皇龍学院大学だつたのではまずはそのキャンパスに行つた。キャンパスは都内の中でもそこそこ通いやすいキャンパスだつたので何としても受かりたいと思つた大学生の人に高2の時にやるべきことを聞いた。その結果今は英単語や基礎を固めたとのことだつた。ほかにも滑り止めの大学を見に行つたがやっぱり第一志望は変えられないと思わされた。コミケ本番も大盛況で終わつた。

帰りに美知留と夕飯を食べにファミレスに行つて進路の話をしていた。

「美知留、美知留は進路どうするんだ？」

「アタシは服飾の専門学校を目指している。試験内容は筆記のところもあれば書類選考だけって所もあるかな。だから丁寧な字を練習したり時谷先輩にいろいろ聞いている。レイは？」

「俺は大学を目指している。そこでバンドを組んでプロを目指す。第一志望は皇龍学院大学つて超難関私立大学。」

「そつか。ねえレイ。もし良かつたらなんだけど衣装の製作はアタシに任せてもらつてもいい？コスの勉強にもなると思うし、アタシの経験も増えるし。衣装のデザインはレイたちがしてアタシが作ること。どうかな？」

「助かる。ただ時谷先輩がいる間は時谷先輩に依頼する。小牧先輩たちに紹介してもらつた分急に変えるのは悪いからな。」

「そんなこと気にしないでいいぞ礼二。」

「時谷先輩いつからそこにいたんすか？」

「ついさつきだ。戸村にいろいろ私が持つてている技術を叩き込んでやるから安心してくれていいぞ。」

「すみません。」

「気にするな。可愛い後輩たちの成長は私とつても嬉しいからな。はつはつはつ。ただし真人と靖のは譲らないからな。」

こうして衣装の製作の一部は時谷先輩から美知留に変わった。

夏休みの半分過ぎた頃に聖櫻学園での夏期講習で登校した。半日で終わる上に宿題免除だつた俺らは基礎固めと楽器の練習で忙しかつた。

夏期講習2日目軽音部から招集メールが来た。

翌日会講習終了後俺と恭介、悠は部室に行つた。そして全員そろつてから日野先輩が

「高2以上のメンバーは夏期講習ご苦労。2年以上のメンバーはわかつているだろけど今年も文化部合同合宿の時期がやつてきた。今年も参加は任意で日程は8月19日から8月23日まで。費用は学園側が出るとのことだ。参加は8月15日までに俺に連絡。もしくはこの場で言つてくれ。場所は長野だ。持ち物は着替えと楽器類。

他は何を持つても問題なし。キノコを持つてマンマミーアやるのはなしだからな」

「日野先輩、それキャンプ合宿でやつたやつが俺の友人にはいます。」

「あの合宿毎年サボつてキノコ採つてマンマミーアやる奴がいるとのことだから。」

「マジすか。」

「長野の合宿所の近くには川があるからそこで遊ぶのはOKだ。だから遊びたい奴は水着も忘れずにな。」

その日俺と恭介は合宿の買い出しに行つた。ギターの弦やドラムのステイツクを購入しておいた。

そして夏期講習最終日の最後の授業が終わつてすぐに美知留が教壇に上つて

「みんなお疲れ様。せっかく受験生になる前の最後の夏休みだからみんなで思い出作りがしたい。つてわけで花火大会をみんなでしようと思います。参加する人はいる？」

そう美知留が教壇の上で言つた。

賛成の声が相次いで上がつた。

「遠山は行かないのか？」

「私は勉強があるから。」

「遠山。休めるときには休んでおけ。大事な時に倒れないためにも息抜きは大事だぞ。」

「ま、真島君がそう言うのなら。私より成績がいい人にそう言われちゃつたら何も言い返せないじやない。」

「花火のスponサーはだれがやるんだ？」

「ふつふつふよくぞ聞いてくださいました。今回はコミケ衣装の製作が安く済んだことから全額アタシが持ちます。」

「場所は私に任せてください。星を見る場所にしている秘密の場所がありますので。」

「みんなが楽しめるようにルールを守れるよう私も参加するわ。」

「私もクラスの責任者だから参加するわ。」

「霧生、委員長も参加か。なら安心だな。」

「レイ。レイは西側のお店で花火を買つてきてもらえる？ 東からはアタシが行くから。」

「わかつた。金のほうは建て替えておく。」

「ほかに必要そなものは私のほうが考えて手分けして購入してもらうから行つてきて。」

霧生のこの言葉に俺と美知留は、

「ありがとう。」

そう言つて、俺と美知留はお互い反対方向に行つて店にある花火を買つていつた。夏の終わりだつたからか花火は売れ残つていてセールになつていた。合流地点で美知留と合流した。霧生からの連絡でクラス全員来ることになつた。

「見てみて花火六本持ちー。」

「危ねーからやめろバカ。」

「もうそんなこと言つて。レイは楽しんでいるの？」

「美知留と違つてハメ外しすぎない程度にはな。」

「そつか。それならよかつた。」

恭介は向こうで南田たちと天体観測を楽しんでいた。

「いやー楽しかつた。」

「みんな片付けのほうは平氣？」

「O.K.」

「それじやあ解散！ と言いたいところですけど夜もだいぶ遅いからレイ、恭ちゃん、レイ君みんなを送つて行つてもらつてもいいですか？ もちろんアタシもですけど。」

「わかつた。花火の後始末したものや周りにあつたゴミはどうするんだ？」

「それなら私と霧生さんと川淵さんで手分けして持つていくわ。」

「委員長助かる。」

俺、恭介、ルイの三人の班を作つて女子を振り分けて解散となつた。こうして夏休みの夏期講習最終日は終わりを迎えた。残りのイベントは文化部合同合宿だつた。

## 合宿!!

文化部合同合宿の朝俺は幻を見ているのかと思わされることがあつた。それはなぜか美知留とルイが合宿の集合場所にいたことだ。

「ヤツホーレイ。来ちゃつた。」

「何で美知留がここにいるんだ？ 美知留は帰宅部だろ？」

「確かにアタシは帰宅部です。ですけど時谷先輩が今年で卒業だから衣装政策などの技術をいろいろ教われればと思つて頼み込んだら了承してもらつたつてわけですよ。」

「全く戸村があまりにも熱心だつたものだからやる気を買つたつてわけだ。後戸村のバイト先のお菓子も貰つてしまつたからそのお礼つてのもある。」

と時谷先輩が説明をした。

「ちなみに俺は祐天寺先生からの合宿内での風紀の乱れがあつた場合の取り締まり要員としての招集兼オカルト研究会の三嶋部長からの誘いがあつたから参加だ。」

「ルイも大変だな。」

「まあ祐天寺先生が今回の取り締まりでも給料出るつてのとあの人 の頼みを断つたら後が怖そうだからな。」

「天霧君何か言つたかしら。」

「な、何でもありません。」

「悪い、遅れた。」

「悠も到着か。」

「バスは部活ごとだから俺らはこつちだ。悠は初めてだよな。」「ああ。」

「先輩——そろそろ出発ですから早く乗つてください。」「悪い、今行く。」

「軽音部全員揃いました。」

色々話していた間にほかのメンバーの乗車が済んでいた。

「静子ちゃん。これは注文の品だ。持つて行つてくれ。」

「ありがとうございます。朝比奈さん。」

大量の飲み物や調味料が朝比奈家から注文されていたのをバスから見た俺らであつた。バイト先の大島さんもその中にいた。そのほかにもいろんな知らない人もいたが恐らく〇Bの人たちの経営しているところに注文していた品だろうと見守つていた。

バス内で各部長が集まつて部活の目標を報告していた。軽音部の目標は最終日前夜のオールナイトライブの成功にすることだつた。ルイのほうのオカルト研究会は二日目の肝試しの成功、手芸部は一人作れる限りいろんなものを作ることとなつた。

そしてバスが合宿所に到着した。初日の夕飯は料理部の目標の料理部による料理講習となつた。内容はカレーだつた。班ごとに違うからいろいろなところで食べ比べをしてもいいとのことだつた。

「九条君と真島君は去年よりだいぶ上達したわね。何か訓練でもしたの?」

「バイト先でキッチンもやることにしたのでその努力の賜物だと思います。」

去年お世話になつた鍋島先輩がやつてきたので俺たちは答えた。  
「悠も意外と器用だよな。まあ花房の家で一緒に料理でもしていたんだろうな。」

「正解だ。ゆーちゃんからいろいろ教わつたし。  
「カレールーは俺らの班は激辛だよな。」

「ああ合つている。里見、秋山の班は苦労しているみたいだな。  
「去年の俺らを思い出すな。」

「ああ。」

「西沢先輩がサポートに入つたみたいだ。  
「ホントあの人スゲー。」

「西沢先輩は何で料理上手いんだ?」

「あの人家の家にも小さい兄弟がいるから家事をやつてゐるらしい。  
「なるほど。」

作り終わつて食べていたら美知留が來た。

「レイ、レイたちの班のカレーはどんなの?」

「激辛のポークカレー。美知留の班は?」

「アタシの班はキーマカレー。料理部の班の人たちがアタシたちが来る前からナン作つていてそれとのセット。良かつたら食べに来てね。」

「俺らのところも良かつたら食べてくれ。」

「うん！ 美味しいね。これつてレイと恭ちゃんと神崎君の三人で作つたの？」

「ああ。そうだな。去年の合宿後からバイト先の焼肉屋でキツチンもやるようになつた。」

「レイたち頑張つたんだね。」

「ああ。美知留の班のも少しもらいたいからいいか？」

「もちろん。」

美知留の班のカレーも美味かつたの一言に尽きた。食後風呂に入りに合宿所の温泉に向かうとルイが立つっていた。

「ルイ、霧生。何やつてんだ？」

「覗きの準備中か？」

「んなわけないだろ。むしろ逆だ。覗きにいかないように警備しているんだよ。外にも何人かいる。覗けるものなら覗いてみろつてんだよ。祐天寺先生に報告してやるわ。」

「キャーーー。」

「何事（だ）！？」

「つて女子風呂じや入れねーな。霧生、確認頼む。」

「わかつたわ。」

「俺は外の部隊の援護に回る。」

「俺たちも行くぞ。」

「応！」

そして向かつた先には拘束されていた望月先輩がいた。

「何やつているんですか？ 先輩？」

「天使の入浴シーンを撮ろうとしていたのよ。ダメなの？ 女の子同士なのに。」

「当たり前です。このカメラは没収します。」

「望月さん。覚悟はいいわよね。」

「ヒイツ!?祐天寺先生!話せばわかりますから何卒。お情けを。」

「確かに話せばわかるわね。拳と拳で語り合いましょうか。」

「ごめんなさーーーーーーーい。」

「恐ろしかつたな。礼二。」

「ああ。道理で人の人を怒らせてはいけないわけだ。」

入浴後俺は合宿最終日に向けて作つたバンド大会用の曲の仕上げをしていた。そのため就寝は夜中の3時になつてしまつた。

「おはよう。今何時だ?」

「今は12時だ。おそよう。」

「作曲、作詞していたら遅くなつちまつた。これを悠、里見、秋山、お前に夜中に送つておいた。」

「里見、秋山はすでに練習している。俺もこれから練習だ。」

「俺も起きたからそろそろ始めるか。」

「その前にいいか?九条。」

「日野先輩どうしたんですか?」

「今回のライブのトリをお前らのevil jackが風町たちのにゅーろんかどつちにするか悩んでいる。いつたん協議するから少し来てくれ。」

「わかりました。」

「あ、礼二君。礼二君も話は聞いているのかな?」

「ああ。」

「どつちがトリをやるかなんだけど私はもう答えを決めているんだー。」

「奇遇だな。俺もだ。」

「それじやあ、セーので言おうか。」

「ああ。」

「セーの。」

「日野先輩のバンドがトリをやる。」

「え?よく聞こえなかつた。もう一回言つてくれ。」

「日野先輩が最後を飾つてくださいって言つたんですよ。」

「お前らはいいのかそれで。」

「「はい。」

「その方が喧嘩になりませんし。代わりに風町たちをトップバッターにしてください。」

「礼二君…。なら先輩たちの一つ前を礼二君たちでお願いします。」「わかつた。二人がそう言うのならそれでいく。二人とも全力でやるようにな。」

「「はい！」

その後俺は風町と別れてスタジオに向かった。そしてスタジオ内に美知留がいた。

「レイ。待つていましたよ。」

「どういうことだ？」

「他のメンバーは終わっている。」

「だから何がだ？」

「あーもう！ 鈍すぎですよレイ、採寸ですよ採寸！」

「あー衣装作成のか。」

「そうですよ。ですから図らせてください。」

「わかつた。」

そして採寸が終わって美知留は出ていった。音源も欲しいと言っていたので渡しておいた。理由を聞いたら衣装の参考にしたいとのことだつた。

二日目の夕食を食べた後肝試しのために合宿参加者全員集合してくじの班を決めた。結果、朝比奈、黒川、俺、恭介、悠の班になつた。

「あやや…。怖いですー。」

「桃子。まだ始まつてすらいないよ。」

そして俺らの番が回ってきた。

「仕掛けがなかなか来ないな。」

ピトッ

「何だこんなにやくか。」

「チツ」

舌打ちが聞こえた。期待外れのリアクションだつたらしい。

その後もいくつかの仕掛けがあつたが被害の大半が俺、恭介、黒川だつた。リアクション薄そうなやつらにとか間抜けだと思つていた矢先に

チエーンソー持つたジェイソンのマスクをした女子生徒が前の茂みから現れた。

「あややーーーー！」

朝比奈が黒川に抱き着いていた。

「フヒヒヒヒ大成功ですね。」

少し歩くとゴールはあと少しの看板があつた。  
「もうすぐゴールだ。がんばれ朝比奈。」

「はい…。うう…。」

励ました次の瞬間木の上からミイラが逆さづりで降つてきた。  
「あややーーーー！」

「ヒヤツハー！ 嫁ちゃんビビつた？ ビビつた？」

「その声ルイか？」

「誰のことだい？ 僕は見ての通りミイラだよ？」

「うえーーーーーーーん。」

朝比奈が泣き出した。

「朝比奈、もうすぐゴールだから行くぞ。」

「うう…。ひつく…。」

そしてやつとゴールした。

「お疲れ様です。こちらのアンケートを記入して303号室前のアンケート箱に入れてください。ご協力お願ひします。  
数分後、

「うえーーーーーーーん怖かつたよー。レイー。」

「はいはい白々しい演技はバレバレだからな。まあ抱きしめてはやるけど。」

「それでこそアタシの彼氏です。」

美知留が三文芝居で抱き着こうとしていたので乗つてやつた。

後から種明かしを聞いたらジェイソンの女子生徒が一年の甘利で最後のミイラがルイとのことだつた。最後の二つの仕掛け以外で俺

らを狙つたのは朝比奈を油断させるためだつたんだろうと思つた。アンケートの内容を見たら満足度診断と一番驚いた仕掛けについてだつた。俺は勿論最後の仕掛けを選んだ。

3日目、4日目は練習に勤しんだ。3日目の夕飯はバーべキューだつた。肉の種類の多さには驚いた。店長の大島さんだけではないだろうと思った。理由はラム肉もあつたからだ。他の焼肉屋だからジンギスカン屋をやつている〇Bもいたんだと思つた。

4日目の夜すなわち合宿最終日前日俺たち軽音部のオールナイトライブが始まつた。風町たちのにゅーろんから始まつて小牧先輩や西沢先輩のステージと様々なバンドがライブを行つた。そしてラストから2つ目の俺らの出番となつた。

「evi\_ \_j a c kです。今回はギターの礼二がバンド大会のための準備もかねてバンド大会と同じセトリにしました。聞いてください。」

俺らのライブは始まつた。オリジナルから始めてコピー、オリジナルのセトリで俺らの番は終了した。クオリティーはまずまずつて所だと思える出来であつた。

最後の日野先輩たちのライブはみんなで盛り上がりがれる感じのセトリで日野先輩のボーカルが映えるライブであつた。

アンケートの結果は帰りのバスで発表されてルイがダントツトップだつた。

夏休み最後のイベントの合宿も終わり残るは授業再開日を待つだけとなつた。

## 文化祭は何の日？

夏休みが終わり秋もどんどん深まっていく中、俺たち2年C組全員は放課後委員長のもとに集められていた。

「みんなは何でここに集められているのかわかつているわよね？」

「文化祭の出し物が決まっていないからだつたかしら？ そうよね？」

八束さん？」

「その通り。皆の都合がなかなかつかなかつたからこうなつたわけだけど。一部の人はアルバイトや部活で忙しいから仕方ないとして姫島さん、東雲さんはゲーム以外はすることないのに何で参加してくれないのかしら？」

「期間限定イベントで忙しいんじやー。こうしておるうちに順位が下がつてしまふ。」

「それならさつさと決めちゃいましょう。」

「はいはーい。それならメイド喫茶がアタシやりたーい。」

「戸村さんから意見を出すなんて以外ね。他にやりたいことのある人はいる？ いないのなら面倒だからメイド喫茶で行こうと思うんだけど。」

「もうそれでええ。とつととゲームさせとくれ委員長。」

「男はどうするんだ？」

「それなら執事も追加でいいんじゃないですか？ 男子の皆もそれでいい？」

男からは特に文句も出なかつたので執事メイド喫茶となつた。

「わーい。ダーリンの執事服楽しみー。」

と見吉が言つていたのが聞こえたのは気のせいではないだろう。委員長からもここからの参加は任意ただし自己責任ということもあつて姫島、東雲はあつさり帰つた。

軽音部の方も文化祭の方で動きがあつたが今年も参加は任意であつた。そのため今年は大会に専念したいことから参加は見送つた。風町達も参加はしないとのことだつた。そのため今年はクラスの出し物に集中した。

「とりあえず問題はメニューだな。飲食店でバイトしているのは俺、恭介、美知留くらいか。俺らは焼き肉屋だからほぼ使い物にはならないしな。美知留が軸となつて決めるのが妥当だろう。」「え?! アタシですか!?

「頼む! 美知留だけが頼りなんだ!」

「九条君イチャイチャするのは教室ではやめるようにな。ただ戸村さんを軸にするのは賛成ね。」

「委員長まで!?

「ファミレスだつたりいろんなところでバイトしているってことから戸村さんが適任だと思うの。お願ひできる?」

「わかりました。そこまで言われたら断れませんね。」

「ありがとうございます。それで戸村さんの考えるメニューなら何が思い浮かぶ?」

「そうですねー。パスタ関係、オムライス、パンケーキあとは飲み物関係つて所でしようか? 飲み物関係は難しくないように市販の飲み物に絞りましょう。」

「わかったわ。それじゃあ戸村さんほかに必要なことはある。」

「伝票の購入と衣装のための採寸ですね。それを業者に送つて作つてもらうつてのでどうでしょう。アタシでも作れますけどこれだけの人数作るのは困難なので。」

「わかったわ。戸村さんメジャーは持つている?」

「いつでも持つていますので今から測りますか?」

「帰つた人は姫島さんと東雲さんくらいだからこの二人はあとで測るとしますよう。戸村さんお願ひできる?」

「はい。お任せください。夏服なのでこのまま測る形にします。」  
そして全員の採寸が終わつた。

そこからの日々は俺と恭介が接客のマナーを教えた。美知留は料理を教えることになつた。俺らも一応料理は覚えた。  
そして文化祭当日となつた。

俺と美知留は前半組で恭介は後半組となつた。ルイと霧生も前半公判で別れて担当外の場合は交代で見回りも担当する時間もあると

のことだ。担当の時はサボりの監視らしい。

天都会長の開始の放送で文化祭が始まつた。さらに文化祭終了後のダンス大会でベストカップルに食券50枚プレゼントとも伝えていた。

開始から5分後、

「お帰りなさいませお嬢様。」

「あ、礼二君。執事服似合つているよ。写真撮らせてー。ナギー写真お願い。」

「礼二ー済まないね。陽歌のわがままに付き合つてもらつて。」

「気にすんな。一応想定内のことだから。」

「えへへー。恭介君はいつから?」

「午後からだ。それまでは自由に回りながら宣伝していると思う。」「わかつたー。ありがとう。探してみるよー。」

そういつて風町達は俺らの出し物を楽しんで帰つていつた。  
さらに一時間後、

「お帰りなさいませ旦那様。お嬢様。」

「礼二ー、来たぜ。」

「ゆーくん。ここで不通に声かけたらまずいんじゃないかな。」

「悠と花房か。いらつしやい。ゆっくりしていきな。」

「そして一気に崩れた。いいのかそれで。」

「いーのいーの。学園祭の出し物なんだからつて痛つ。」

「九条君。出し物だからつて気を抜かずにきちんとやりなさい。」

「委員長、お盆で叩かなくとも。」

「真面目にやらない九条君が悪い。」

「怒られてやんの。まあとりあえずゆっくりしていくわ。」

「承知しました。」

その後客席の悠を見たら俺のことを話していた。後で一発殴ろうと思つた。午前番が終わつて交代となつた。

「レイやつと回れるね。」

「ああ。」

その後は二人で回つていた。開始の放送の後のダンスパーティー

のベストカップルのことと思い出した。

「美知留、開始すぐに会長が言っていたダンス大会は出たいか？」

「学食の食券50枚ですよね。アタシは出たい。レイ、ダメ？」

「わかったー。ダンスには自信ないけど出てやるよ。」

「ありがとうレイ。」

そう言つて美知留は俺の腕に抱き着いてきた。美知留の柔らかい感触が嬉しいのと恥ずかしいのとで平静を保つのが難しかった。

そして文化祭終了後のダンスパーティーになつて貸出し衣装もあつたけど俺らは文化祭で着た衣装で参加した。恭介は参加していくなかつたが悠は花房と参加していた。悠は花房の顔を隠すように踊つていた。視線恐怖症だつたから隠してあげているのかと思った。そういう配慮をしていたからか優勝は悠と花房のカップルだった。

「そういえば美知留。今日で交際始まって一年だな。俺と付き合つてくれてありがとう。これからもよろしく。」

「レイ…。忘れないなかつたんだね。一日それについて何も言つてくれなかつたから忘れていたのかと思っていた。嬉しい。アタシこそ付き合つてくれてありがとう。」

美知留は泣いていた。そんな顔を誰にも見せたくないと思い俺はただ泣き止むまで美知留を抱きしめた。そんな文化祭と交際一年目の記念日だった。

## バンドコンテスト 東京予選

10月頭の文化祭が終わり季節も冬に近づく中恭介と学食で昼食を食べながら打ち合わせをしていた。

「バンド大会の方だが、部室とスタジオを効率よく使ってやっていくぞ。日野部長がしばらくは俺らと陽歌達を優先的にしてくれるみたいだ。さつきLINE来た。これで練習の予算がいくらか削減できるな。礼二。」

「了解。風町と打ち合わせをしておく。」「わかつた。」

昼休みがもうすぐ終わってしまうことから昼食を急いでかき込んだ。

放課後風町に部室に来てもらつて日野部長と打ち合わせの結果大会までは火曜日と土曜日は俺らが、水曜日と日曜日を風町たちが使うという形にした。

バイト先の店長の大島さんにも伝えてシフトは多めにして時間は短めにしてもらつた。大島さんは、

「バンド大会かー。懐かしいねー。俺も出たんよ。まあ結果は東京大会で今活躍しているバンドに負けて準グランプリだつたんだけどね。まあ頑張りな。応援にはいくから。」

とのことだつた。

運営からのメールを帰りに再確認した。11月最初の土曜がV系とメタル部門で風町達はその翌日とのことだつた。メンバーにも体調管理はするよう伝えた。悠にはのどに気をつけると伝えた。

練習も一週間前に不調な時が少しあつたがすぐに戻せた。最終週の最後のスタジオで一回通しで練習をした結果これ以上にない出来となつた。

金曜日の練習はほどほどにして体調管理のため早めに休めるようにと伝えて前日は解散とした。

そして運命の土曜日開場前に着いた時、部員のほとんどが俺らを待つていた。

「九条、真島、神崎、秋山、里見。お前らならやれる。仲間を信じて演奏しな。頑張っている奴に頑張れば酷だからあえて言わずにしてもおく。」

と日野部長は言った。

「ありがとうございます。俺らは俺らのできることをやります。」

「ああ。それでいい。行つてきな。俺らは客席に行つてている。」

「レイ、間に合つてよかつた。レイたちならできる。だから自分を信じてください。」

「ありがとな。」

そういうつて俺らは出演者入口に入つていつた。

入つた先で驚いたのはタイムテーブルを見た結果出演者達の演奏はたつたの6バンドだけだつた。

俺らの出番は3番だつたため最後の確認を他の出演者達の演奏を聴きながら行つた。俺らの出番直前となり里見、秋山がかなり緊張していいたように見えたので、

「秋山、里見気負うな。いつもの演奏をいつも通りにやればいい。」「はい。わかりました。」

「本番で100%の力は無理だ。80%出来れば上々だ。ただ最初から80%の演奏はするな。100%に近い演奏ができるようになるためにいつも通りを意識するんだ。」

「はい！」

「わかればいい。時間だ。行くぞ。」

ステージに立つた時俺は今までに見たことのない観客の数に心の内で驚いた。だがすぐに落ち着いた。ここはまだ通過点に過ぎない。そういう思いで俺らは演奏した。そこから先は一心不乱に演奏したのと楽しさであまり覚えていなかつた。気づいたら終わつていたというのが心境だつた。

最後のバンドの演奏が終わつて審査のため一時間待つことになつた。観客から投票用紙の回収、審査員の投票などのためだらうと思つていた。

一時間後結果発表と閉会式が行われた。司会の人人が進行を進めて

いつた。

「結果発表 グランプリ 聖櫻学園 e v i l j a c k 準グラ  
ンプリ 凪灘学園d i s t o r t i o n」

「礼二！」

「ああ！」

その言葉を聞いてメンバー全員で喜びを分かち合つた。出演したほかの高校の人たちからも祝福の言葉をもらつた。

「聖櫻の皆さんおめでとうございます。リードギターの方とドラムの方にお話があるのですがよろしいでしょうか？」

「俺らはボーカルの方にお話があるのですがよろしいでしょうか？」

？」

俺と恭介と悠は他校の人たちから声をかけられた。

「まずは改めましておめでとうございます。俺らは凪灘学園の出演者でサイドギターの鷺沢美鶴、こつちはベースの内藤迅です。俺らは学年は高2です。」

「俺らは聖櫻学園2年。リードギター担当九条礼二。こつちはドラムの真島恭介。作曲は俺がメインで恭介もたまにやっている。」「なるほど。今回の曲は九条さんが作つたんでしょうか？」

「ああ。」

「もしよかつたらなんですが、俺らといずれバンドを組んでくれませんか？お二人は進学予定でしようか？」

「今のところは。」

「他のメンバーの方は今回は正式メンバーですか？」

「部員のメンバーだけどサポートだな。今回は俺のわがままに付き合つてもらつた感じだ。俺と悠と恭介はプロをいざれ目指す。他の二人はわからん。悠の方も恐らくそういう声かけだろう。」

「それなら！」

「ああ。決まりだな。お前ら二人の演奏には目を光らせていた。俺の方から声をかけようと思つた矢先に声をかけられて好都合だつた。これからよろしく。」

そういつて俺は一人と握手した。帰り道悠の方から話を聞いたが

向こうもスカウトだった。相手方の曲も悠は好きだったことから悠からはしばらく掛け持ちすると伝えられた。俺は悠の意思を尊重するため、その言葉に同意した。

## ハロウインパーティーの思わぬ来客

10月も終わりに近づいてきた頃、聖櫻学園でハロウインパーティーが開催されることになつた。文化祭直後に毎時間各クラスを手芸部が採寸をしていて何になるかは当日のお楽しみということになつていた。

そして当日俺は吸血鬼、恭介は警察、悠は狼男となつていた。美知留は魔女の仮装で、

「じゃーん。レイ似合つてる?」

と聞いてきた。

「ああ、似合つている。」

「返事が適當すぎるよー。彼女の仮装なんですから、もう少し反応してくださいよー。」

「つつても美知留はしょっちゅう仮装していたり私服以外の恰好なんて何回も見ているから新鮮さにかけるんだよなー。」

「しまつた。そこは盲点でした…。コスプレに青春捧げたのが裏目に出てしましましたか。」

そう話していると、

「ゆ、ゆーくんどうかな?」

「ゆーちゃんは赤ずきんか。手芸部もうまく配慮してくれてよかつた。ゆーちゃん視線が怖いみたいだから時谷先輩に伝えておいてよかつた。」

「ゆーくん…。」

「ま、真島君どうかな?」

「遠山か。それはなんだ?」

「キヨンシーよ。お札が邪魔だけど。本当はこんな行事なんかより授業やつている方がまだいいんだけどね。」

「そう言うなつて。学校行事なんて学生のうちにしかできないんだからさ。勉強は高三の受験期や大人になつてもできるんだからさ。」

「私より成績の良い人に言われたら私は何も言えないじゃない。はあ、その代わり後で一緒に勉強してくれる?」

「ああ、構わない。」

風町と別れたことが学年で知られてからは遠山が恭介に積極的に勉強によく誘つたりしていたことから一緒に勉強ついでに狙つているのではないかと少し気にかけてはいたが予想通りだつたようだ。

「あー！九条の兄さんに真島の兄さんやん！」

「豊永先輩!?なぜ聖櫻にいるんですか!?」

「アタシだけじゃないでー。八重ちゃんとアネットもおるよ。」

「礼二、恭介久しぶりやなー。私等は生徒会長さんにゲストで呼ばれたらんや。」

「天都会会长か…。あの人のわがまま大体この学校では通るからな。未恐ろしい。あのパツと思いついたことを篠宮は止められないのだろうか。振り回される生徒の身にもなつてほしい。」

「あら礼二はん。それは私たちに来てほしくなかつたどですか？」

「あ、すみません。そういうわけではないのですが生徒会長の思い付きに毎回生徒が振り回されている気がするので。」

「冗談どすよ。礼二はんがそんなことを言いはる方とは思つておりまへんて。」

「そういえば礼二コスプレが吸血鬼とは私と同じやな。狙つてたん？」

「これは手芸部が作つたので偶然かと。あれはルイ？あいつザビエルかよ。」

「おやこれは吸血鬼のお二人さん。私の十字架のもとに消えなさい。」

「ギヤー！」

アネット先輩と俺はルイの悪乗りに乗つてやられたふりをした。  
「ナイスリアクション。アネット先輩乗りに乗つてくれてありがとうございます。」

「良いつて良いつて。関西人なら当たり前や。」

そんな風に話していたら校内放送でハロウインパーティーの開始が告げられた。俺と美知留は二人で回つていろいろお菓子を交換して回つた。コスパ重視でうまい棒やチロルチョコなどを大量に購入

していて校内のいろんな人と交換して回った。そういうえば時谷先輩とも交換したが先輩はかなり疲労した様子で各生徒にもう一着学園行事の服装を用意していると言っていたが何のことだつたのだろうかと疑問に思つたハロウィンパーティーだつた。その後コスプレの人気投票でルイがトップになつていた。俺らは会わなかつたが校内に不審者が入つていたらしく不審者の取り締まりのベテランのルイに捕まつて警察に引き渡しをされていたことが注目の的になつたのと吸血鬼の仮装をしていた人に俺にやつたネタをやつしていく人気者だつたとのことだ。号外の校内新聞にもそのことが書かれていた。あいつがそんなに有名人だつたとはと思つた俺であつた。

この学校での思い出は？

ハロウインパーティーが終わって一週間がたつた。そして俺たち生徒は手芸部から渡されたドレスコード的な服装を渡されたことに疑問を隠せずにいた。

「皆さんに服の方は届きましたね。あと5分後に理事長と天都会長からお話があります。」

5分後放送委員から、

「本日は大事な話ということで理事長と天都会長からお話があります。」

「何だろうねレイ？」

「廃校にするとかか？まさかな。」

「えー、学園生徒の皆さん理事長の倉田です。今年は聖櫻学園が設立されて125周年となりました。これも皆さんのおかげで迎えられました。そこで創立から少し過ぎた日付ではありますが、そのお礼として創立記念パーティーを開催したく思つたため連絡いたしました。今回生徒の皆さん居配られた服装は手芸部の皆さんのが作られたものとなつております。ここから先は現会長の天都さんからお伝えしたく思います。」

「生徒の皆さん生徒会長の天都です。今回は理事長と好調、私の3人の計画で開催されることになりました。そこで余興のものを開催してくださる方々を募集します。申請は3日以内にしていただくという形にします。」

「急だなおい…。」

「軽音部でも出し物をしないか部長の小野に聞いてみようぜ。」

「ああ。」

軽音部の部長は文化祭の終了後にB組の小野になつた。これによつて苗字に野がつく人が部長になるというジンクスができてしまつた。次の休み時間小野に声をかけた。

「小野。軽音部の方も何か出すか？」

「それを風町と九条を呼んで会議しようと思っていた。お前らは例

の大会で実績があるからな。」

「了解。」

三人で協議して開催委員会に三人で申請をした。メンバーも全員同意してくれた。今回はオリジナルにするか悩んだが全員に受けるようになじみ度の高いもののコピーを2曲、オリジナルを1曲選んだ。創立記念パーティー当日クラスごとに更衣室が分けられていた。着替えると美知留が待っていた。

「レイ似合っているよ。」

「美知留、一つ聞く。なぜ更衣室前で待っているんだ？」

「それはレイのタキシード見たかったのとアタシのドレス見せたかったから。」

「でも更衣室の前に美知留だと覗きかコスプレの有望な奴探しにも思われかねないぞ？」

「うぐつ、反省します。」

「とりあえず会場に行くか。体育館だつたな。確か。」

「そうですね。パンフレットがあるので見てください。」

「今回の料理は料理部、花は華道部と園芸部、合唱部、衣装は手芸部、あの時の時谷先輩の言っていたのはこれが。余興にダンスパークティー、軽音部、美術部、新聞部、写真部、この2つは取材だな、司会、インタビューは放送委員会も一緒か。」

「軽音部もつてことはレイや恭ちゃんも出演するの？」

「ああ。」

「それならレイの準備時間まで一緒にいてもいいよね？」

「ああ。」

「天霧君はパーティー楽しみながら見回りかな。」

「ルイからそのように聞いた気がする。」

「タキシードとか堅苦しくてあまり好きじゃない。」

「礼二、手芸部の人たちが忙しい中作つたんだからそんなこと言うな。」

「ああ、そうだな。」

会場についた俺たちは食事や飲み物を楽しんでいた。

「あ、礼二君、恭介君、戸村さんちちょうどいい所に。今創立記念パーティの参加者何人かにインタビューしていく誰かひとり協力してくれない？お願い！」この通りだから。」

「礼二だな。」

「レイだね。」

「わかつたよ。んで何に答えればいいんだ？」

「聖櫻学園に入つて良かつたと思つた瞬間や思い出に残つていてることをお願い。」

「なるほど。俺にとつて良かつたことや思い出に残つたことか。俺にとつてはこの学校で得たたくさんの人とのつながりだな。勉強でのライバルや転校してきた昔の友達、部活で一緒に頑張る仲間、俺の過去を知つてそれを受け止めてくれる恋人、そんなたくさんの人々に出会えたことが良かつたことかな。」

「なるほど。インタビューの回答ありがとうございます。取材は完了でOKですよね？ 神楽坂先輩、望月先輩。」

「ええ。問題ないわ。」

「はい礼二君こつち向いていい感じの顔でお願いねー。」

「わかりました。」

「はい。チーズ。」

「次は小瑠璃ちゃんでいい？ 手芸部部長として学園行事に携わつたり、いろんな部の依頼などから他の部に貢献しているから。」

「わかつたわ。時谷さんは馬が合わないけどいい取材ができるから仕方ないわね。」

「ゲームのイベント回したいのに何でこんなイベに参加せないかんのじゃー。こうなつたら料理全種類コンプリートしてやるまでじゃー。」

「そろそろ時間か。恭介、悠、里見、秋山を呼んで向かうか。」

「全員メイク、着替えOKだな。それじゃあ行くぞ。」

「続きまして軽音部から代表の2バンドですがお願ひします。」

「皆さんパーティー楽しんでいますかー？ それじゃあ3曲だけですが飛ばしていくぜー！」

今回のセトリは生徒が小学生の時に見ていたと思うアニメソング2曲と俺たちの曲1曲で挑んだ。会場の盛り上がりはそこそこだった。俺たちのようなニッヂなジャンルには上々の出来だと思った。退場して風町達に引き継いで俺たちはパーティーに戻った。

「レイ。お疲れ様。あそこで海賊アニメと医者のアニメの曲とはわかつていますなー。今回のコスのシンデレラ候補を探していて王子さまはレイにしようと思つていたんだけどなかなかないので困つていたんですよ。」

「ならシンデレラは美知留がいいな。美知留以外に浮気するのは俺が嫌だ。美知留は俺以外の女の子と写真撮ついたらどう思う。」「それは…。あーもうわかりましたよ。そこまで言われたら断れないじゃないですか。本当にレイはうれしいこと言つてくれるんですから。」

俺たちは美知留とコスプレ時の写真とドレスコードの服装の2種類の写真を撮つた。

「少し疲れたから屋上で休みたいんだけどいいか。」

「そつか。レイそういえばステージに立つていたから疲れていますよね。いいですよ。行きましょつか。」

「レイ。お疲れ様。膝の上に頭載せていいよ。」

「膝枕か。いいのか。」

「何言つているんですか。彼女なんですから当然ですよ。」

「ありがとう。」

「いいえ。それにしても少し寒くなつてきたね。」

「ああ。」

「来月はアタシのいろんな用事がありますから力を貸してくださいね?」

「できる範囲でな。」

「そこは俺に任せとけじゃないの?」

「できない口約束する方が格好悪いからな。」「レイらしいね。」

「悪いか。」

「いいえ。レイはそのままのレイでいて欲しいですから。」

「さてそろそろ会場に戻りますか。のども乾いたし」

「そうですね。それじゃあ会場に戻りましょう。」

俺たちは会場に戻つて残りのパーティーの時間を楽しんでパーティーは終了となつた。

## 師走のサンタたちは超多忙

季節は12月になり後期中間試験を終えた俺は休み時間恭介とバンドコンテストの全国大会についての話をしていた。

「恭介、1月の半ばに全国大会があるとのことだ。さつき顧問から連絡が来た。予選の時も顧問に申請して書類書いたから。もちろん参加するよな?」

「ああ。当然だ。他の奴らには送ったのか?」

「これからグループLINEに送る予定だ。」

「了解。」

「恭ちゃん、レイを少し借りてもいい?」

「ああ、いいぞ。」

「そんで俺と恭介のバンド大会の話に水を差してまで話したいことってなんだ?」

「彼女に対してそんないい方しないでよー。まあそれはさておき、レイは今年のクリスマス頃の予定は何かある?」

「今のところバンドの練習しているだろうな。1月に全国大会だから。美知留まさかコスプレ関係か?」

「正解!実は去年にもこの学校のクリスマスパーティーの数日前に中学生の時に職業体験で保育園に行つたことがありまして、それ以来毎年保育園にサンタの恰好をしてお菓子やおもちゃを配っていたんですよ。その時にファンになつてくれた子がいましてその子のデザインしたもので今年は行つてあげたくて。ダメですか?」

美知留が上目遣いで聞いてきた。

「美知留定番の狡い真似をするな。はあ:何をやつても引くつもりはないんだろうな。わかつた。俺一人の力じゃ無理だろうから軽音部のメンバーや人脈の広いルイに聞いてみるわ。」

「ありがとうレイ!」

美知留が勢いよく抱き着いてきた。

「バカ!ここ教室だぞ!」

「戸村。人のいる前でいちやつくのはどうかと思うぞ。」

「はい。すみません。」

「とりあえず手芸部の方に出向くか。」

「あー手芸部の時谷先輩と優木さんには聞いたんですね。それで現状多忙で難しいと言われてしまいまして。」

「美知留。お前にしかできない方法があるだろ?」

「アタシにしかできない方法?」

「コスの衣装作成の経験を使って手芸部をサポートするんだ。」

「なるほど!その手がありましたか!それで時間を作つてもらうのと恩を売つておくつてことですね!・さすがレイ!・

「つてわけで行くぞ。」

「どうしたんだ礼二。こつちはあいにく暇人ではないんだが。」

「美知留の衣装の件は聞いていますよね時谷先輩。」

「ああ。もちろん聞いている。今の時期は多忙で難しいんだ。諦めてはくれないか?」

「そこで美知留が手芸部の手伝いをしてでも美知留のコスの作成に力を貸してほしいと言つていたので。」

「人出が増えるのは助かる。まあいいだろう。戸村ミシンの用意をする。少し待つてくれ。礼二ももちろん君にも手伝つてもらう。」

「俺そこまで器用じゃないんですけど。」

「違う違う。出来上がつたものをいろんな部に届けてほしいんだ。断る権利はないからな?」

「わかりました。」

「ああ。礼一。戸村の衣装で問題なのは衣装の装飾品の方だ。その辺が見つかれば半日もかかるないからその辺の人脈を探しておいてくれ。」

「わかりました。」

早速ルイに連絡をした。

「もしもし。九条だけど。戸村の衣装作成で今のところ必要なつながりは木の素材でソリのバツチを作れそうな人を探して欲しい。星のパートは南田、その他諸々のデータは東雲に作つてもらわ。」

「はいよ。何かあつたら連絡してくれ。頼りにできる繋がりにはＬＩＮＥ伝えていいよな？」

「ああ。」

「それじゃ切るぞ。」

「ああ。」

「あのー九条さん。さつき私の名前が出ていた気がするのですが何か私に用でしようか？」

「南田か。ちょうど良かつた。南田は星の装飾品はどこで購入しているんだ？美知留のコスの作成で必要で知りたくてな。」

「それなら明日持ってきますねー。」

「礼二——何やら困っているようじやのー。どつたんだ？」

「お前はゲームだけだから暇人だろうなー。」

「なんじやとー。明日は新作ゲームの購入、週末は最近始めたゲームのデバッグのバイトしてゲーム用資金を稼いでいるんじやぞ。」

「お前のような引きこもりがバイト始めるなんてな。」

「仕方ないじやろ。ママンに家に引きこもつて勉強しないでゲームしているなら社会勉強としてバイトしろ言われたんだから。まあゲームの資金得られるから頑張っているんじやがの。ぬはははははー。」

「話は変わるがお前は東雲の家を知っているか？俺が依頼したいことがあると伝えてほしいと。すべてが終わるまではゲームに参加できそうにないとも。」

「なんじやとー。なら至急連絡しよう。とりあえずついてこい。」

姫島にしては珍しく積極的になつていた。

姫島に案内してもらつて俺は東雲の家に着いた。

「それでボクに何の用だい？」

「正式には美知留からの依頼だこういうアクセサリーとイヤリングを作つて欲しいんだけど可能か？」

「ボクにはできないけど僕が3Dデータにして後はロボット研究部の螺子川さんにもつていけば何とかしてくれると思うよ。」

「わかった。助かる。」

「つてわけでその図面の紙をスキヤナーに通してくれ。」

「後はこれをこうしてはいできたよ。」

「サンキュー東雲。」

「お礼は期待していいんだよね？」と戸村さんにも伝えておいてくれ。」「はいよ。」

俺は急いで学校に戻ることにした。

「君が東雲さんからの紹介の九条君かな？」

「ああ。話は聞いているよ。使うのは3Dプロジェクターだっけ？」

「あー少し違うな。3Dプリンターだ。」

「ならそこにあるから好きに使っておくれ。」

「助かる。」

その後装飾品を作成して口ボ研を後にした。

翌日の放課後美知留と手芸部部室で合流して完成したものを渡した。

「レイありがとう。さつき天霧君からの紹介で1年の山野さんとクラスマイトの南田さんから貰ったよ。」

「そうか。あれ？」

バタツ

「レイ？ レイ！ しつかりして！ レイ！」

「落ち着け戸村！ 焦っている時こそ冷静になるんだ。とりあえず礼二を運ぶために真島を呼ぶんだ。」

「恭ちゃん。レイが倒れちゃった。」

「はあ。いざれこうなるだろとは思っていたが何か思い当たることはないか？ここ最近来月の全国大会のために作曲していくたり試験勉強していくたりとハードワークだつたからなアイツ。」

「アタシのせいだ…。レイを追い詰めていたのアタシのせいだ…。」

「落ち着け戸村。礼二も好きでやつていたんだ。コンディイションを管理できていなかつたアソツ自身にも、それに気づいてやれなかつた俺にも責任はある。」

「起きてしまつたことを悔やんでも仕方ない。とりあえず保健室まで運ぶぞ。」

「神崎先生いますか。」

「あら、あなたは悠の友達の。」

「はい。実は礼二が倒れてしまいまして。」

「わかつたわ。とりあえずベッドに彼を寝かせて。」

「はい。」

「うーん。これは疲労による高熱ね。今日が金曜日でよかつたわね。」

「九条君は私が送つていくわ。真島君。あなたも来てくれるわよね？戸村さんはあとから来たければ個人的に言つてもいいけど長居はしない方がいいわよ。熱が移つてしまうから。」

「はい。」

「ううーん。」

「礼二。良かつた。気づいたか？」

「あれ？ここ俺の部屋。俺は確か学校にいて。」

「お前は倒れたんだよ。原因は無理のし過ぎだ。ここまで送つてくれた神崎先生と俺から。この土日はゆつくりするよう以上だ。後そこに戸村の作つたおじやがあるからそれ食べてゆつくりしてろ。」「すまねえ。」

「俺の相手するのは結構だがそこで寝ている戸村のことも相手にしてやりな。さつきまでずっと泣いて心配していたんだから。泣き疲れてさつき寝ちまったくけど。」

恭介の指さしたところを見ると美知留が寝ていた。

「わかつた。」

「それじや俺はそろそろ行くから後は二人に任せるわ。そんじゃー

な。」

「ああ。」

美知留の肩をゆすつた。

「んう。レイ？ レイ！ よかつた。やつと目を覚ましたんですね。」

「ああ。」

「ごめんねレイ。レイのことを知らずにアタシのわがままにつき合わせちゃつて。」

「俺も望んでやつていたことだ。美知留が気にすることはない。」

「でも。」

「いいんだ。後恭介と一緒に見ていてくれたこと助かつた。ありがとな。そろそろ帰らないと親も心配するから帰つた方がいいんじやないか？ あとおじや美味かつた。」

「うん。」

「恭介に連絡しとく。恭介と一緒に帰るようにな。」

「うん。」

恭介にLINEするとすぐに既読がついた。もとより美知留を送り届けるつもりだつたらしい。本当にアイツは気が利くと思つた。

月曜日の放課後美知留と俺は手芸部部室に行つた。

「失礼します。」

「おー礼二に戸村衣装が完成したぞ。とりあえず着てみてくれ。」

「え、嘘…」

「どうしたんだ？」

「コスプレの関東大会と保育園の日程が被つっていた。毎年同じだから勘違いしていた。どうしよう。このままじゃあの子をがつかりさせちゃうし大会のメンバーにも迷惑をかけられない。」

この時俺の中に螺子川の3Dプロジェクターを思い出した。

「螺子川の3Dプロジェクターがあつた。借りられるか交渉してみる。」

「後はメンバー探しだな。」

螺子川に連絡したところ二つ返事でOKしてもらい螺子川が美知

留に詳細を送り、俺は軽音部部室に向かった。運のいいことに探していた相手が全員いた。

「西沢先輩、小牧先輩、恭介、悠、朝比奈頼みがあるんだ。」

「どうした九条？ いうだけ言つてみろ。」

「実は俺の彼女が毎年保育園にクリスマスプレゼントを配つていましてそれで子供がまだ得意でないため力を貸して欲しいってわけです。」

「あや？ では私は何でですか？」

「これは個人的に閃いたんだが朝比奈にはクリスマスの曲を弾いて欲しいんだ。」

「そういうことですか。なら任せてください。」

「そういう理由なら問題ないな。進路も決まつたしな。いいよな？」

真人

「ああ。」

この件については美知留に報告しておいた。

当日は映画研究会の用意してくれた映像や朝比奈の演奏で大成功に終わつた。

後日美知留と俺で今回協力してくれた人たちに美知留と俺の手作り料理で簡単なクリスマスパーティーを開いた。

「今日は皆さん来てくれてありがとうございます。今回の一件では皆さんのおかげで大成功を收められました。皆さんには感謝をしてもしきれません。そこで今回はレイとアタシでささやかながらクリスマスパーティーという形でお礼をさせていただきます。」

「今回はありがとうございました。乾杯！」

「「「乾杯！」」」

今回集まつてもらつたメンバーは10人以上になつた。これだけのつながりのあるみんなはすごいなと思つた。そんな12月半ばの出来事だつた。

## 再会は思わぬ時にやつてくる

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

「はーい。どちら様ですか?」

「従兄さん久しぶりだね。」

「さくら?」

「ルイ、誰が来たの?ってあら?さくらちゃんじゃない。前にあつた時よりだいぶおつきくなつたわねー。」

「おばさん。お久しぶりです。」

「さくらちゃんどうしたの?こつちに来る用事なんかあつたかしら?」

「実は父の仕事の都合でこちらに引っ越してきたので。両親は引っ越してきたばかりで荷物の整理中で代わりに挨拶してきてほしいってことで私が来たんです。」

「学校は聖櫻?」

「はい。」

「なら俺と一緒に。学校の案内は必要か?」

「いいの?」

「ああ。遠慮はいらん。」

「それじゃ母さん行つてくる。」

「行つてらっしゃい。」

「あらルイ君これからお出かけ?隣の子はだれ?」

「るい、偶然だな。誰つてひどくないか?小さいころ一緒に遊んでいた従妹のさくらだよ。」

「久しぶりだね。るいちゃん。」

「従兄さん少し待つてもらつてもいい?」

「いいぞ。」

「るいちゃんは従兄さんることは今も好き?」「なつ何のことかなー?」

「なら言いふらしちやつてもいいのかな？」

「わー！わー！正直に言うわよ！小さいころから今もずっと変わらず大好きよ！悪い！」

「ふーん。つてことは私たちライバルだね。るいちやん知ってる？従兄妹は結婚できるんだよ。」

「なつ。負ける気はないからね。」

「隙を見せたら奪つてあげますから。」

「ぐむむむむー。」

「それじやあ行つてくるから。従兄さんとのデート楽しんでくるからね。」

「ムキー！覚えてなさーい！」

「るいのやつずいぶん怒つていたみたいだけど何言つたんだ？」

「乙女の秘密だよ。そいうえべ従兄さんは部活はしているの？」

「帰宅部だけどバイトしている。」

「へー。どんな？」

「祐天寺先生つて学校の先生がリーダーになつて他校と一緒に結成した不良や不審者の見回り及び取り締まりのバイト。」

「ずいぶん危ないことをしてているんだね。」

「危なくはないな。祐天寺先生の方が危ないからな。その先生が定期的に師範となつて取り締まりのメンバーに武術の稽古しているから。」

「つてことは従兄さんは強いの？」

「さあ？ただ取り締まりの検挙率では毎回トップ3には入つている。」

「へー、凄いね。」

「たださくらにはそういう危ないことはして欲しくないから入るとか言つたら俺が反対するけどな。」

「従兄さん…。」

「さて着いたぞ。ここだ。」

「ありがとうございます。クラスの方までも案内してもらつてもいいですか？」

「どうしたんだ？さつきまでと話し方が違うが…」

「学校では従兄妹つて関係は隠したいので…」

「そつか。ならそつちの意見を尊重する。奈木野は何組だ？」

「C組です。」

「ならあそこか。ついてきてくれ。」

「ここだな。」

「ありがとうございます先輩。」

「礼には及ばん。」

「それじやあ帰りますか。ちょっと両親とおばさんに連絡したいので少し待つていてください。」

「もしもし奈木野ですけど。」

「あら、さくらちゃんどうしたの？ルイが何かした？」

「いえ。今日おばさんの家に泊まりたいと思いましたので。夕食は私が作りますから何卒お願ひします。」

「いいわよ。」

「え？」

「さくらちゃん、ルイにアピールしたいんでしょ？それを抜いてでも姪っ子の頼みは聞いてあげるのがおばさんの仕事だから。お母さんには私から言つておくからね。」

「ありがとうございます！」

「誰と話していたんだ？」

「先輩のお母さんとです。今日泊まりますからね。」

「えー。いきなりだな。」

「先輩の部屋がいいなー。」

「それはダメだと思うけどな。」

「先輩のいけず。」

この日さくらは俺の家に泊まつた。料理も美味しくてびっくりしたというのが俺の率直な感想だつた。終業式直前に起きた小さな環境の変化だつた。

## それぞれの将来のビジョン

正月に美知留と初詣に行く最中に進路の話になつた。

「レイ、前にコスのブランドを立ち上げるのが夢つて言つていたのは覚えてますか？」

「ああ。覚えている。」

「それんですけどまずは資金がないと難しいなつて思つたことから保育士の資格を取ることにしました。保育士を選んだ理由としては年末年始に話した保育士の職業体験をして適性を感じたためですね。」

「そつか。それで俺には何ができる？」

「大学に行くために勉強教えてください。」

「美知留も将来のビジョンが見えてきたんだな。なら俺はできる限りのことをするだけだ。」

「レイ…。アタシ受かるためにも頑張るね。レイの進路は大丈夫なの？」

「一応模試は過去に受けたものはA判定。過去問は同レベルのほかの大学の問題を集めた本のやつをやつてあるが今のところ正答率はどの教科も8割くらいだな。俺が狙っているのは文学部で学芸員と司書を一応取ろうとは思つてている。」

「おつ札一。あけおめー。」

「恭介偶然だな。あけおめ。来年は受験だけどお前は進路どうするんだ？お前は俺と違つて理系が強かつたと思うが…」

「一応教員免許狙つてている。」

「なるほど。科目は？」

「理科かな。化学は好きだから。」

「俺は資格取りながらプロ目指すつて所だな。」

「それは俺も同感。」

「後はボーカルだけだな。」

「今度の全国大会でいい感じのがいればいいけど。」

「お参りで願つておくか。」

「そうだな。」

お参りで俺は良い縁に恵まれますようにと願つた。

休みが明けて美知留と恭介と登校していたら後ろから遠山が来た。

「あけましておめでとう。真島君、九条君、戸村さん。来年は受験ね。納得のいく進路に行けるようにお互い頑張りましょ。」

「そうだな。だが遠山、勉強は大事だが学校で学ぶのは座学だけではない、人付き合いや息抜きの仕方など他の勉強もある。そういう勉強もしないと大事な時に戦えなくなるかも知れないからな。気をつけろよ。」

「俺もそれには同感だな。ここ受験するときでもたまに楽器を息抜きにやつていたしな。」

「俺もやつていた。」

「私より成績のいい人に言われたら何も言い返せないじやない。」

「後は俺たちは気負つていなからな。主席になるとか考えていないし。最善を尽くせばそれで良しつてこととお互いを軽くライバル程度に思つてている位しかないかな。」

「それでの成績？」

「ああ。」

「今度ノート見せてもらつてもいい？」

「見たところで何も足しにはならんとは思うがな。ただ普通にノート取つておるだけだし。」

「それでもいいの。お願ひ。」

「はあ。わかつたよ。」

「ありがとう。」

その日の始業式に週末に行われる全国大会に出場する風町達にゆーろんと俺たち e v i l j a c k の壮行会が行われた。全校生徒に盛大に応援してもらつたことから負けられないと思つた。

その日に悠、里見、秋山を呼んで冬休みに練習した新曲を部室で合わせた。

「大丈夫そうだな。」

「ああ。さつきの感じめっちゃよかつた。」

「この調子でいけばそことこいいところに行けそうですね。」

「里見油断はするな。全国大会だからこれくらいの奴らはザラにいるだろうな。最初からいいところ程度で言つていたら入賞すらない。」

「すみません。」

「わかれればいい。」

コンコンコン

「来たか。」

「レイ。完成したよ。」

「美知留やつとできたか。」

「そりやあ全国大会ですから気合い入れて作りましたよ。達成感も半端なかつたですし。」

「ありがとな。幾らだ?」

「今日は無料でいいですよ。年末のイベントのが安く済んだのと入賞して賞金貰えたので。」

「ありがとうございます。戸村先輩。」

「良いつて良いつて。最高のパフォーマンス期待しているからね。」

「それじやあ。つとその前にいつたん着てみてください。キツイか確認したいので。」

「わかつた。」

「それじやあアタシはいつたん外に出ています。着替え覗くのはさすがに躊躇われますので。」

「着替え終わつたから確認してもらつてもいいか?」

「どれどれ。ピツタリですね。さすがはアタシ。」

「その通りだな。」

ついに運命の週末全国大会の会場の都内の音大に着いた。俺はこれほどの緊張は初めてライブした時以来だつた。

受付を済ませて控室の更衣室で着替えを済ませて出演順まで待つた。持ち時間は30分予め練習した時には問題ない時間だつた。

「e v i l j a c kさんお願ひします。」

「はい。」

俺たちはトリから一つ前だつた。そこからは悠のMC、俺の作曲、悠の作詞、恭介のしつかりとした土台によつて今までにない最高のパフォーマンスができた。満足のパフォーマンスができたと胸を張つて言えるものだつた。

そして閉会式の結果発表となつた。

「グランプリ 海府学園 d e a t h a c i d、準グランプリ聖  
櫻学園 e v i l j a c k」

この結果を聞いて俺は納得した。海府学園のボーカルこそ俺の求めていたボーカルだつたからだ。

控室に戻つて帰る準備をしていた時口論が耳に入つた。

「湊転校するつてマジか?! どうして黙つていたんだよ!」

「すまなかつた。練習の大事な時期だつたから言うにも言えなかつた。」

「グランプリ取れてこれからつて時に何でこういうことに。もういい! お前みたいな大事なことを伝えられない奴は俺らにはいらねえ!」

「当然の報いだな。すまない。」

「失礼。先程はグランプリおめでとう。ボーカルの君の名は? 俺は九条礼一。あまりにも俺の望んだ理想のボーカルだつたものだから声をかけさせてもらつた。」

「俺の名前は木塚湊、来月からこつちの六王学園に編入予定だ。六王学園は聖櫻学園より少し上のランクの進学校だつた。」

「なら良かつたらだが俺のバンドに来ないか? ベース、もう1人のギターも揃つている。ドラムはそこにいる恭介。本名は真島恭介だ。」

「お前変わつているな。他校の用済みとなつた初対面の人間に声をかけるつてには。だが悪くない話だ。その話乗らせてもらおう。」「決まりだな。」

バンドコンテストは準グランプリという悔しい結果に終わつたが

一番の問題だったボーカルが決まつたので悔しいより嬉しいの気持ちが強かつたバンドコンテスト全国大会となつた。後日黒川に聞いたにゆーろんは別会場でグランプリだつたとのことだつた。

## 有終の美を飾るためにには

二月に入り進路相談が始まった。そして俺にもついにその出番は回ってきた。

「九条君の進路は進学とありますが第一志望はどこでしようか?」「皇龍学院大学です。」

「模試の結果としても大丈夫とは思っていますが油断はしないでください。九条君は大学で何かしたいことはあるんですか?」「学芸員関係と司書を取ろうと思っています。バンドでプロを目指しながらにはなりますが。」

「となると九条君の進路は成績から察すると文学部ですか?」「はい。」

「わかりました。進路相談は以上です。」

「はい。ありがとうございました。」

俺の進路相談はあっさり終わつた。その後湊から六王学園に編入した連絡をもらつた当日俺は湊、迅、美鶴をLINEでグループを作つて招待した。そこでそれぞれの音源を共有してチューニングを確認したところ全部同じチューニングだつたため美鶴、迅に報告した。顔合わせの時にセッションして湊、迅、美鶴が実力的に大丈夫かということや馬が合うか確認しておきたかったからだ。人間関係でバンドが崩壊するということは俺たちの界隈ではざらにあることからそれが一番心配だつた。

当日の放課後、全員時間前にスタジオに集合してもらつてそれぞれ自己紹介をした。

「今回の大会の優勝校のボーカル木塚湊。今は最近編入した六王学園に通つている。」

「ギターの九条礼二だ。今回は集まつてくれたことありがとうございます。」「真島恭介。パートはドラム。礼二とは中学からバンドをやつている。」

「内藤迅。パートはベース。そつちの美鶴と同じ高校の凪灘学園に通つてている。」

「鷺沢美鶴。九条、ギターのパートなんだが俺がリードでもいいのか？」

「ああ。俺は支えるプレイが得意だからな。」

「そろそろ時間だな。礼二予約忘れたとか言わないだろうな？」

「安心しろ。ちゃんと取つた。」

「それじゃあ始めますかね。」

3バンドの曲を合わせた俺たちはスタジオ終了後ファミレスで夕飯を食べながら話をしていた。

「俺としてはこのメンバーでやりたいと思つたんだが皆としてはどうだ？」

「俺はこんなに楽しいスタジオは初めてだつた。ぜひこのバンドでやりたい。」

「迅。それは俺も同感だ。」

「湊、お前はどうだつた？全国大会優勝バンドのメンバーとして思うところはあつたか？」

「最高だ。俺もお前らとやりたい。」

「礼二。満場一致で決まりのようだな。」

「ああ。だが問題は俺たちの軽音部の活動をどうするかだな。」

「それがあつたな。小野と顧問に連絡するか。」

「少し待つていてくれ。顧問と小野に連絡する。」

「他校の人とやるのはいいけど部員の名前としては残つて欲しい。たまにゲストとして出でてくれないか？とのことだ。」

「ならいいか。秋山と里見にも連絡しておく。」

「早くも返信来て応援してくれるみたいだ。」

「なら問題ないか。」

「バンド名はどうする？世界観やコンセプトは大事だが…。」

「湊の言うとおりだな。だがやりたいようにやるのスタンスでいいんじゃないかな？ついてきたい奴だけついてこい。我が道を行くのスタンスで。」

「それがやりやすいよな。」

「全員やつた音源に好き嫌いはなかつたぽいから大丈夫だろ。」

「確かに合わせていた時は全員楽しそうだつたから大丈夫だらう

な。」

「それじやあ今日のところは解散か？」

「解散だな。」

「後で進路のことや学校の成績も共有しようぜ。偏差値的には迅と美鶴のところが俺らのところより下か。湊が俺らのところより少し上だつたな。どこの大学目指しているかや模試の結果があれば後でグループに送ろう。」

「つてわけで解散！」

俺は恭介と帰つていた。途中から雨が降り始めた。

「いやー折り畳み傘常に持つているのはこういう時に助かるな。」

「ああ。それじやあ俺はここで。」

「じゃあな。また明日。」

少し歩いていると聖櫻の制服を着た女子生徒が泣いていた。それは俺の良く見知つた顔だつた。

「美知留？ 何でこんなところに？」

「レイ？ ッ！」

俺は美知留が逃げようとしたので腕をつかんだ。

「離して。今だけはレイに会いたくなかった。」

「んだと？ 今お前に必要なのは一人で抱え込むことじやねえ。誰かを頼ることだろ。普段めちゃくちや明るいお前がここまで暗くなるなんて非常事態みたいなものだ。」

「そういう風にレイはすぐ心配する。だから会いたくなかった。レイには心配かけたくなかつた。」

「見たところ制服がズぶ濡れの時点で家にも帰らずここでフラフラ。家出か？」

「そうやつてすぐ察してくる。そうですよ！ 家出ですよ！ 悪いです

か!?

「悪い。親が心配するぞ。一人娘の親は余計に心配するだろうな。」「親がうざいのなんてこの年頃にはよくあることじゃないですか。もう放つておいてくださいよ。」

「美知留。今からすることにに関して謝罪しておく。すまん。「え?」

パンツ。

俺は美知留の頬を平手打ちした。

「親の力がなければ何もできねー子供が偉そうにしてんじゃねーよ。何もできねーうちは黙つて親に頭を下げておけ。多少理不尽かもしれないーがこういう時の親の言うことは正しいことがほとんどだ。」

「レイまでお母さんの味方するんだね。レイなんて嫌い!」

「そうか。ならお前の愚痴を聞いてやろうと思つたがどうする?」

「それは…。」

「思うところはあると思うがお前の愚痴はここで聞いてやる。俺の奢りでな。」

そう言つて俺は喫茶店で美知留の愚痴を聞き続けた。美知留にも思うところはあるんだが母親の言うことが正解だと思った。

そして美知留に諭すように伝えた。

「レイ。さつきはごめんね。だからお願ひ。アタシのこと嫌いにならないで。」

美知留は泣きながら言つた。俺は抱きしめて美知留の頭を撫でた。「俺も平手打ちして悪かつた。彼女に手を挙げた時点で俺も同じだ。」

「ううん。いいの。レイが正しいから。だからありがとう。」

「力になれたのなら良かつた。これで大丈夫か?」

「はい。お母さんに謝つてきます。心配かけてごめんね。」

「ああ。なら早く家に帰つて謝つてシャワー浴びて体温めておけ。風邪ひくぞ。」

「うん!」

バンドが決まり彼女が家出したりとドタバタした2月のある日のことだった。

## 春の訪れに待つもの

ホワイトデーが近づく中俺は美知留からもらつたバレンタインのチョコのお返しを聖櫻モールで悩み続けていた。

「おいおい礼二。お前これで何日目だ？」

「悪い恭介。去年はマカロンだつたから同じものを渡すのは躊躇わ  
れたから悩んでいるんだ。」

「あら礼二君に恭介君じやない。」

「ああ、望月先輩に有栖川先輩。偶然ですね。」

「ここにいるつてことはホワイトデーのお返しを探しについて所かし  
ら？」

「はい。」

「あらあら礼二君は学校の勉強はできても女の子の勉強は苦手みた  
いね。」

「返す言葉もありません。」

「美知留ちゃんなら前に手荒れに悩んでハンドクリームとかを買っ  
ているのを見たわ。」

「なるほど。であつたら薬局とかでハンドクリームや保湿ローション  
とかですかね？」

「もーおバカー。それだけじやあ40点よ。他にも美容用品とかを  
あげたらどう？彼女には常に可愛くいて欲しいでしょ。」

「となると缶のリップとエッセンシャルオイルもつけ足しておく  
か。」

「それでもギリギリの合格点ね。でも礼二君にしてはいいチョイス  
ね。」

「望月先輩。これ以上礼二の心をえぐるのはやめたげて下さい。礼  
二のライフはゼロに近いので。」

「アドバイスありがとうございました。」

「女の子を悲しませるのは私が許さないからね。」

「礼二君も恭介君も当日は頑張つてね。」

「ありがとうございました。望月先輩、有栖川先輩。」

ホワイトデー当日になつて俺は美知留と登校した。

「レイ。今日は何の日ですか？」

「ホワイトデーだろ。ここで3月14でゴロで再試の日なんて言つたら後が怖いからな。」

「そうですよー。それに今回はアタシは再試にはなりませんでしたし。レイの力を借りずで。成長を褒めて下さいよー。」

「はいはい。よー頑張つた、よー頑張つた。そんな頑張つた美知留にはホワイトデーのお返しをあげよう。」

「いよつ待つてましたー。」

「ほいこれ。」

「開けてもいい？」

「ああ。大したものではないがな。」

「色々入つていますね。全部美容に関係のあるものばかり。」

「一週間近く悩んで偶然通りかかつた望月先輩と有栖川先輩からのアドバイスや俺の意見へのダメ出しを何度も喰らいながら選んだ。大切に使つてくれると嬉しいかな。」

「レイ…。そんなに真剣に考えてくれたんだね。ありがとつ！大好き!! チュッ」

「朝からテンション高いな…。それに周りからかなり見られていたぞ。」

「ごめんなさい！」

「朝からめっちゃ恥ずかしい思いをするとはな。ハア…。」

そんなホワイトデーの日の登校の道のりでの出来事だつた。

数日後俺たちは3年の卒業式直前の追い出しライブを行つた。春の曲や卒業をイメージした曲を中心としたセトリで今回は組んだ。タイムテーブルではちょうど真ん中くらいだつた。俺たちの番が終わつてから小牧先輩、西沢先輩と少し話をした。

「そういえば先輩たちはエスカレーターで聖櫻大学でしたつけ？」

「ああ。俺は商学部で靖は教育学部。靖は保育士資格や教員免許を取つてそういう系の仕事に就きたいみたいだ。」

「次世代を育てるって凄いですね。西沢先輩。」

「なーに。俺のうちの弟や妹で慣れているから適性があると思つて選んだだけだ。」

「バイトの方はどうするんですか？今のところを辞めてしまうんですか？」

「いや、続ける。大島さんには世話になつてゐるしな。それに大学生になつたら夜勤もできるからガツツリ稼げる。それだけでもワクワクするぜ。」

「いいですね。夜勤ができるなんて。俺も早く稼ぎたいですよ。」「一足先に行つてるぜ。」

「マサー。ちょっといい？」

「どうしたんだ玉井？」

「ほら忍。いつまでモジモジしているの？早くバシッと決めなさい。」「麗巳。これで関係が終わっちゃうかもしないと思うと怖いのよ。」

「その時はその時でしょ？」

「もう麗巳。失敗したら一生恨むからね。絶交だつてするんだから。」

「話が全く見えないんだが…。」

「つてわけでヤス、マサ借りるねー。」

「ああ。」

「小牧先輩玉井先輩に連れて行かれましたね。目的はアレですかね？」

「ああ。アレだろうな。」

「あ、戻つてきましたね。小牧先輩は笑顔で九重先輩は泣いている。」「ヤスありがとね。成功だよ。」「そうか。」「それだけ？」

「俺に何を望んでいるんだ？そして何が言いたい？」

「祝福してあげなよ。友達なんだからさ。」

「三人の間に入るのは無粋だからな。二人だけの世界に浸らせてやりたい。」

「良かつたね忍。おめでとうそしてありがとうマサ。」

「ここでようやく察した。九重先輩が小牧先輩に告白して了承してもらつたんだなと。」

その後のバイト先の打ち上げで色紙を俺と恭介は小牧先輩、西沢先輩に渡す担当になつた。去年は渡す人はいなかつたが少し緊張した。その二日後卒業式で、俺たちは最終学年となることと進路へのプロセッシャーで身が引き締まる日となつた

## 桜の花を目にしたら振り向け

俺は春休みに入つて朝から受験勉強として英語を勉強した後昼飯を食べていた。

「英語を制する者は受験を制するとはよく言うからなー。きちんと文法やリードイング、熟語は確認しておかないと。」

そうブツブツ独り言を言つていたら急に俺のスマホに電話が来た。相手は：豊永先輩？

「はい九条です。」

「もしもし？久しぶりやな九条の兄さん。今アネットと花見の準備しているねん。そこで勉強ばかりで大変な兄さんに息抜きもかねてゆつくり花見でもせーへん？つて思つて。勉強ばかりやと大事な時に力はいるないつてこともあるんやから少しでも参加してくれへん？」

「わかりました。俺の周りの友人たちも呼んでみます。」

「わかつたでー。場所は新桔梗ヶ丘駅近くの公園。アネットと一緒に待つとるわ。時間は夕方からにするけどなるべく早めに来てな。ナンパされるのは面倒やから。」

「わかりました。あまり期待せずに待つてください。」

その後俺は恭介、悠、ルイ、るい、美知留、小牧先輩、西沢先輩に連絡を入れた。

その結果恭介、遠山、悠、花房、風町、ルイ、るい、奈木野、美知留、西沢先輩が参加できることだつた。遠山が来ることには驚いたが恭介に好意を寄せているみたいだからそういうことだらうと思つた。

とりあえず俺とルイが先に軽く差し入れも持つて行つて豊永先輩たちと先に合流して男除けになつておくことにした。

「よー姉ちゃん達。俺たちと飲まないかい？」

「あー。予想通りナンパされている。ルイいけそう？」

「あの程度のチャラ男ならいけるな。任せておけ。」

「よーあんちゃん。嫌がつてているのにしつこくナンパかい？そういうやつは嫌われるぜ？」

「んだと？どこが嫌がつてているんだ？」

「正直ゆーてウザいねん。どつか行つてくれへん？」

「てめーが声かけてこなけりやよかつたものを。」

そう言つてルイに殴りかかつてきた男二人は何があつたのかわからぬくらいの速さでルイに鳩尾に拳を入れられていた。

「聖櫻のデスマシーンの再来つて聞いたことないか？」

「ヒイツ！つてことはお前があの天霧…。相手が悪い！逃げるぞ。」

「おー。俺の前に二度と現れんなよー。」

「天霧の兄さん助かつたで。」

「そう言えばルイと先輩たちつていつ知り合つていたんですか？」

「九条の兄さんたちと修学旅行で会う少し前に困つていてところをアタシが助けたんや。」

「なるほど。」

「悪い礼二、ルイ。」

「待たせたな。」

「おお恭介。恭介は遠山と風町連れてきたのか。」

「元カノとは言われてもあの時いたからいないと不思議だと思ったからな。」

「恭介君が誘つてくれるとは思わなかつたなー。この花見で新曲も描けるといいな。」

「真島君。受験勉強の方は大丈夫なの？」

「この春休み籠りっぱなしでストレスで倒れそうつて思つたくらいには勉強している。」

「そう。私も似たようなものね。」

「あ。豊永先輩俺たちからの差し入れです。」

「俺たちからもこちらを。」

「飲み物関係とお菓子やん！おおきにー。」

「メインはるいと俺の後輩が弁当作つて持つてくるみたいです。」

「悪い待たせた。ゆーちゃんの弟たちも連れてきて遅れた。」

「ごめんねゅーくん。」

「お兄ちゃん久しぶりー。」

「ああ。久しぶりだな。」

「礼二。そういえば戸村は?」

「後から合流するとは言っていたが何やらこの公園でイベントがあるらしくそれに参加してからと。」

「兄さんそれならせつかくやから撮影してきてあげなあかんと。恋には活躍を見て欲しいやろしな。」

「わかりました。少し行つてきます。」

「悪い。摘まめるものの作成と弟たち連れてきたら遅くなつた。」

「西沢先輩。今日は急な対応ありがとうございます。」

「気にすんな。真人が来れねーのは残念だけど。何やら九重とビリヤードデートしているらしい。九重にとつてずっと彼氏ができたらビリヤードデートがしたかつたらしく。」

「なるほど。なら仕方ないですね。」

「はあー。こんなかわいい子供たちも一緒なら兄さんに連絡してもらつて正解やつたわ。」

「お待たせ（しました）。ルイ君（天霧先輩）。」

「弁当ありがと。るい、さくら。」

「気にしないで。こうやつて集まれることは珍しいんだから。（ルイ君に料理でくる女アピールしたかつたのに。）」

「私は天霧先輩が行くのならつて思つたので。（るいちゃんが来るのは予想できたからここで私がアピールしないと。）」

「なあ。真島。あの二人の背後に龍と虎が見えそなのは気のせいか？」

「いえ。気のせいではありません。俺にもそう見えるので。」

俺は公園の少し離れたエリアで開かれていたイベントに行つた。案の定美知留がたくさんの人撮影されていて。俺もその中に入つて一枚撮つた。その時美知留と目が合つた。それから少しして美知留と合流した。

「美知留お疲れ。」

「レイもわざわざこっちに少し顔出してくれてありがと。これから着替えてくるので少し待つていてくださいね?」

「わかつた。」

それから数分で美知留が戻ってきた。

「お待たせ。それじゃ行きましょつか。」

「ああ。適当に何か買つていきましょうよー。」

「それもそうだな。」

そう言つて俺たちはたこ焼き、イカ焼き、お好み焼きをいくつか買つていつた。

「兄さん。そのイカは何や?」

「ああ。これはイカ焼きですけど。」

「はえー初めて知つたわ。関東のイカ焼きはそのまま焼くんやな。大阪では粉ものやから驚いたわー。」

「大阪では粉ものなんですね。」

「兄さんたちが大学生になつたら粉ものパーティーでもしたいなー。」

「日々喜名案やん。礼二たちも頑張つて進路決めて早く粉ものパーティーしようや。」

「その時を楽しみにしています。」

花房の弟たちや西沢先輩たちの弟ははしゃぎすぎて疲れたのか食べ過ぎで眠くなつていたのかはわからないが寝ていた。

「はあー子供の寝顔はなんて可愛いんやろなー。見ているこっちも幸せになるわー。」

「」の後起として連れ帰るの考えると大変なんだけどな。おんぶとか言い出すから。」

「ええやんしてあげたら。」

「弟は小学1年で妹は年中だから妹はどうにかなるんだけどな。お兄ちゃんなんだから頑張れとでも言つておくか。」

「外も暗くなつてきたな。そういえばここ公園ライトアップもされるところみたいだ。もう少しゆつくりするか。英単語カード見な

がら。」

「私は問題集をやつて待つわ。」

「俺もそうするかな。」

少ししてからライトアップが始まった。

「これは凄い…。幻想的だ。」

「ああ。こんなところが俺たちのすぐ近くにあるなんてな。」

「ああ。」

俺たちはライトアップした桜をスマホで撮った。高校二度目の春休み終了直前にあつた勉強の息抜きの出来事だった。

## 休む時には思いつきり休め

高校三年生になつて早一ヶ月が経ち5月になつた。遠足は遊園地で人が多すぎて口クに遊べなかつた。それでイライラしながらL.I.N.EでG.Wの予定を悠に聞かれたので勉強するくらいしかないと伝えたらたまには遊んで心を休ませろと言われた。それから一時間後悠から電話が来た。

「おー礼二。さつきの件だけどお前に朗報だ。ゆーちゃんが川遊びに誘つてくれたんだけど良かつたらお前も来ないか?」

「あーわかつた。勉強ばかりやつていたら倒れるだろうからな。恭介やルイ、美知留に声かけてみる。そういえばそつちのバンドはどんな感じだ?」

「俺の方は正式加入が決まつて一ヶ月後に初ライブ。礼二の方は?」

「まだ未定。ただ練習はしている。お前の日に空いている枠はあるか?」

「ああ。二枠空いている。ブツキングするか?」

「いつたんメンバーと協議する。少し待つて欲しい。」

「了解。話を戻すが遊びの件の方はお前は戸村に声かけよろしく。他のメンバーは俺が声かける。」

「わかつた。」

「もしもし? 美知留?」

「あつレイ。どうしたんですか? 電話なんて珍しいですけど。」

「悠から連絡が来て川遊びにこのG.Wのどこかで行かないか? つて連絡が来て誘つた。俺は行く予定。」

「それならもちろん行きます。レイある所にアタシありますから。」「ありがとな。」

「あつ川遊びとは言つても何やるのかとかは決めているの?」

「多分バーべキューはやるんじゃないかな?」

「確かにあり得ますね——その線は。持つていくのは野菜とお肉です

かね？そのためのクーラーボックスならアタシに任せてくれださい。

コスプレイベントで普段使っているので。」

「わかつた。悠に共有しておく。」

「よろしく。当日は楽しみにしているよ。」

「ああ。」

その後俺は悠に美知留がクーラーボックスを持つていてる件を伝えてバンドメンバーにはライブの計画を話した。メンバーはそろそろやりたかつたらしくブツキングに喜んでいた。

川遊び当日花房は弟たちを連れていた。結果来たのは恭介、遠山、ルイ、るい、美知留だけだつた。

「皆さんごめんなさい。弟たちを遊びに連れて行きたかったので。」「気にしないでくれって。小さい子には小さい子なりに事情つてのがあるんだろうからな。」

「そうそう。礼二の言うとおりだな。まさか礼二からそんな言葉が出るとは丸くなつたものだなお前も。」

「人は変わるものだからな。美知留相手に勉強教えるので慣れた。」「アタシは子供じゃないですよ。」

「法律上では未成年でしょ。戸村さん。」

「はい。すみませんでした。」

「とりあえず飲み物は花房さんと神崎君。食材関係は上条さんと天霧君。九条君、恭介君はその他事前準備、私は宿題教える担当。バーべキューsettは？」

「しまつたー！」

「どうするのよ！それじゃあバーべキューできないじゃない！」

「お姉ちゃん。バーべキューなくなっちゃうの？」

「つだー！冗談だよ冗談。川遊びの場所にバーべキュー場があるんだよ。そこでは釣竿も借りられるらしい。釣りもやろうと思えばできる。冗談に少しばかり乗ってくれよ。つたく遠山は頭が固いんだからら。」

「天霧君。笑えない冗談はやめてよね。小さい子もいるんだから悲

しませないようだ。」

「はい。すみませんでした。」

「まあお説教はこれくらいにして後は楽しまないとよね。」

「電車がもうすぐ来るみたいだ。」

「潤。愛。電車の中ではしやぎたい気持ちもわかるけど周りの迷惑にならないように静かにね。」

「はーい。」

「重い荷物は俺、恭介、悠、男の方のルイに預けてくれ。力仕事は男がするつてのが相場だからな。」

「とはいっても飲み物と食材くらいしかないのよね。」

「ハハツ。るいの言うとおりだな。」

電車で一時間くらい揺られて俺たちはバーベキュー場に着いた。俺、恭介、ルイ、美知留はいつたん管理所に行つて道具を借りてきた。バーベキューsettは俺と恭介で運んでルイは釣竿、美知留は細かいものを運んだ。

「バーベキューの準備と火起こしは俺と礼二、食材準備は美知留とする、遠山とルイ、悠、花房は潤君と愛ちゃんと遊んであげてくれ。」「お兄ちゃんも遊ぼうよー。」

「ごめんね。遊んであげたいのは山々だけど準備しないとご飯が困っちゃうから我慢してねー。」「はーい。」

「終わつたら俺が火の番しているから恭介早めに片付けるぞ。」「了解。」

「にしても礼二。お前本当にいいのか？あまりお前遊んでいないよう思えるが？」

「気にするなつて。誰かがやらなきやいけないことだからな。にしてもこういう時にキャンプ合宿の経験が役に立つとは思わなかつたぜ。」

「それは同感。」

「上条さん食材の切り方上手ですね。普段お母さんの手伝いとかさ

れているんですか？」

「たまに手伝つている程度だけどね。戸村さんは？」

「アタシは飲食店でもアルバイトしているのでそれで覚えました。」

「なるほどね。」

「悪い。少し森の方に行つて着替えてくる。」

「ちよつ神崎君!? 一体どういうこと?」

「下を水着に着替えてくるんだよ。潤君や愛ちゃんまだ小さいし誰

かが足を滑らせてけがしたら大変だろ?」

「確かにそうね。ごめんね。キツイ言い方しちゃって。」

「気にすんなつて。せつかく遊びに来たんだから笑顔笑顔。」

「私は釣りをしながら皆を見守つているわ。」

「頼んだぜ遠山。」

「さて俺も遊びますかー。あつ潤君そつちは深いからもう少し浅いところで遊ぼうね。」

「大丈夫だよ。お兄ちゃん。足が届くうわつ。」

「危ない!」

ガシツ

悠が急いで潤君の腕をつかんで近くの木に捕まつた。

「悠! これに捕まれ!」

ルイはロープを括り付けた浮き輪を悠の方に投げた。

「大丈夫か潤君! 悠!」

「ああ。俺は無事だ。助かつたぜルイ。」

「僕も無事だよ。ごめんなさい。」

「心配したんだからね! あと一步間違つていたら取り返しのつかないことになつたかも知れないんだよ!」

「ごめんなさい。」

「ゆーちゃんそれくらいにしておきな。」

「でもゆーくんもしも木がなかつたらゆーくんも危なかつたんだからね。反省してください。」

「ごめん。」

ゆーちゃんこんなに大きな声出せるのは初めて知つた。普段怒ら

ない人を怒らせると怖いとも改めて思った。

「美知留一。そつちは準備出来たー？」

「うん。準備ばつちり。」

「O.K。なら遊んでいる皆を呼んできてくれないか？」

「わっかりましたー。」

「みんなー焼く準備出来ましたよー。戻ってきてください。」

「野菜は火が通りにくそうなものから焼いていこう。肉はすぐ焼けるだろうからな。」

「九条君、恭介君。このお魚は食べられるかな。」

「少し待つてくれ調べるから。食べられるみたいだな。」

「魚ならアタシに任せてください。こういうのもバイトで身に着けたので。」

「戸村のこういう能力が勉強に活かされればいいんだけどな。」

「恭介君それは言っちゃだめ。」

「ですよねー。」

「後恭介君、九条君、戸村さん、上条さんは私たちが遊んでいる間準備ありがとね。」

「ありがとうございます。お兄ちゃん、お姉ちゃん。」「すまんな。」

「ありがとうございます。」

「気にすんなって。小さい子のために遊ぶのも立派な仕事だ。そう

こう言つてゐる間に焼けたぞ。皆どんどん食べてくれ。」

俺はそう言つて皆に焼けた肉や野菜を取り分けて行つた。締めに焼きそばも焼いた。

午後はみんなで川遊びして日が暮れる前に新桔梗が丘駅に到着した。皆爆睡していたので俺と恭介で根性で眠気と格闘していた。新桔梗ヶ丘に着く前にみんなを起こして高校生組の寝過ごしは何とか阻止した。潤君と愛ちゃんは花房と悠がおんぶして運んで行つた。

「レイ一家まで運んでー。」

「家まで一緒に行くならいいけど運ぶのはバス。」

「わかりましたよー。ならそれでお願い。」

美知留が心配だったことから俺は美知留を送つてから帰つた。